

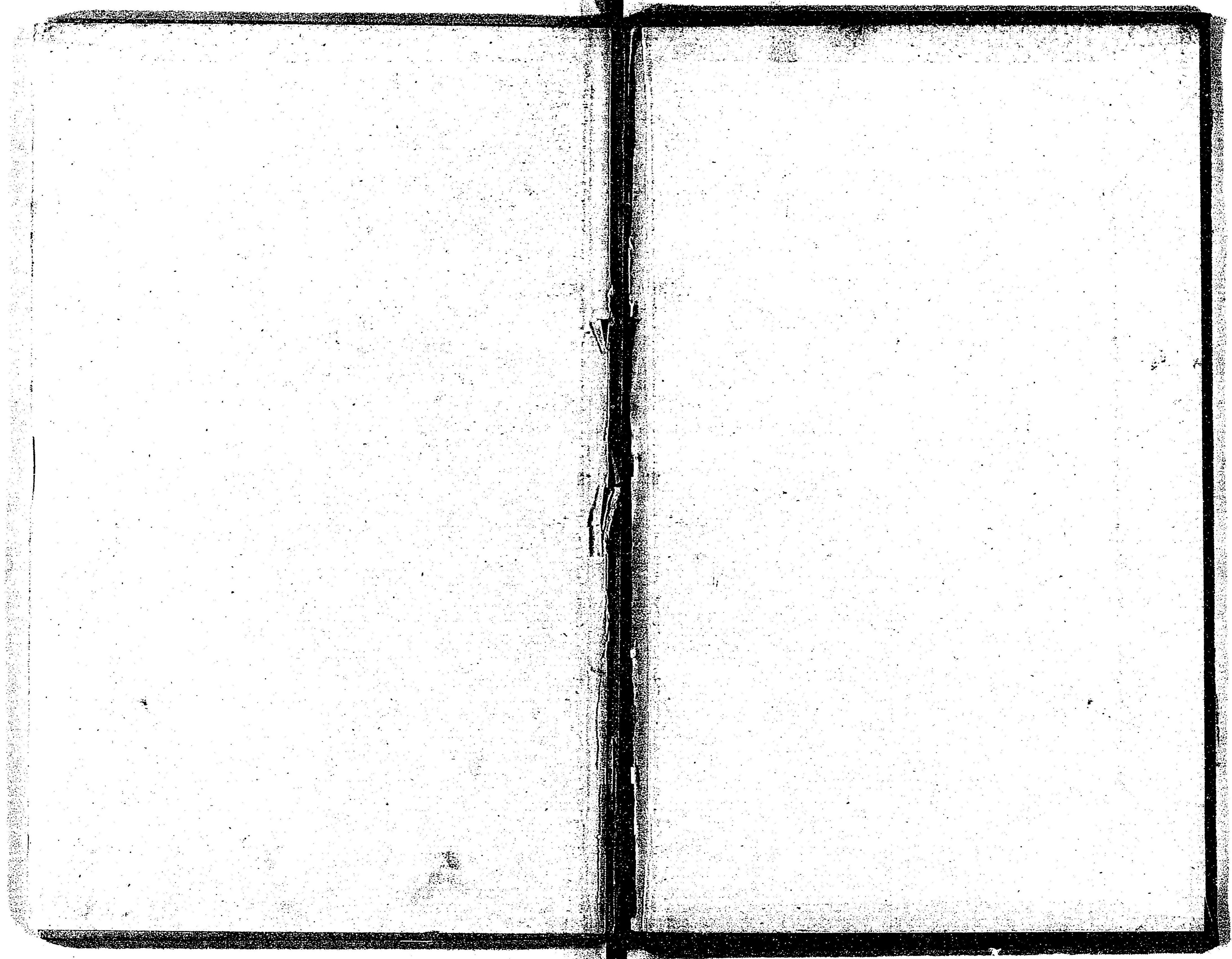
22

267

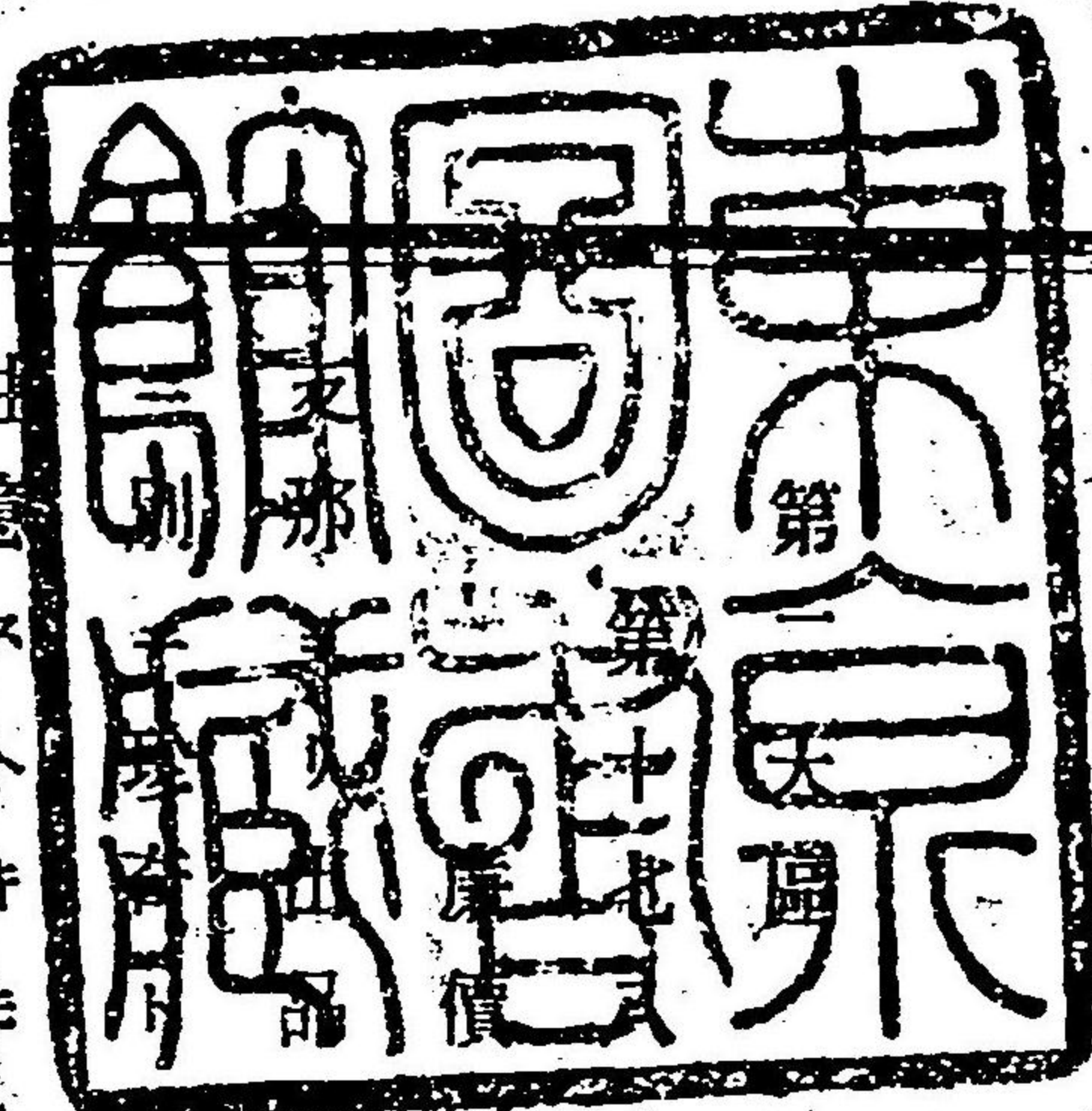
農商務省庶務局版

巴理萬國大博覽會日本出品品評抄譯

明治十七年六月



22-267 V/O/262

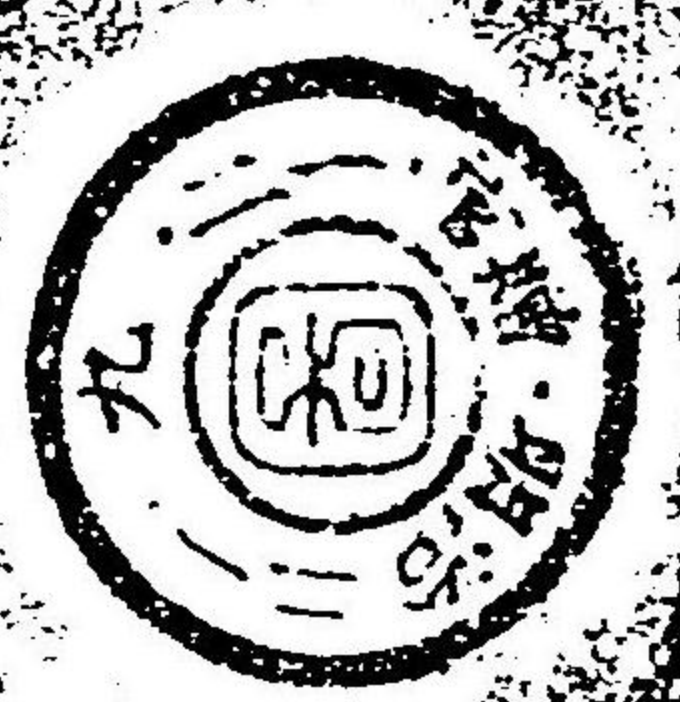


一千八百七十八年巴理萬國大博覽會日本出品部

ノ二小區
家具及高價家具ノ部

此ノ所ニ於テハ既ニ我國人ノ知ル所ナルカ故
ル所ノ彫刻ガ器具ハ既ニ我國人ノ知ル所ナルカ故
足ラスト雖モ日本ノ出品ニ係ル物品中ニハ頗ル

日本ノ出品區内ニアル家具ハ總テ原質材料ニ富シ精緻至ラサルハナ
リテ其ノ所ニ於テハ其右ニ出ルモノアラサルナリ夫レ其ノ
如ク完全ナル家具ハ世間又之アル可ラスト爲シテ之ヲ諦視スレハ其
物品ハ幾日奇ヲ好ミ新ヲ競スカ爲シニ製作スルモノニシテ常用ノ家
具トスル所ノモノニアラサルナリ其價ハ過當ニシテ常用ニ供スルニ



省務高農

出野 清照 抄譯
信託

適セサルヘシ
其精巧ナル其風致ニ富メル其美麗ニシテ特異ノ原質ヲ失ハサル奇品
珍器ヲ製出セシ所ノ藝工ニハ敬禮セサル可ラスト雖モ予輩ハ其製造
ニ模倣セシトテ欲セサルナリ
蓋シ佛蘭西ノ爲ニ實ナルモノ必シモ日本ノ爲ニ慮サラサルヘシ請フ
一言ヲ呈セン夫レ予輩ハ過當ノ價ナル家具ヲ製造スルノ進歩ニ左袒
セサルモノナルカ故ニ日本工人ノ其模形ヲ質素ニセシコトヲ願ヒ予輩
カ本書ノ初ニ於テ我佛國ノ製造家ニ寄スル所ノ忠告ヲ熟覽シテ以テ
注意アラシトテ望ノ外ナキナリ
其忠告ノ略ニ曰ク
我國製造家ハ美麗ナル家財ヲ製出スト雖モ然レモ其家財ハ價頗ル貴
フシテ適宜ヲ尊フ人及中等人ノ購フヘキ所ノモノニアラス凡ソ平常
需用ノ物品ハ普通ノモノニアラサレハ製出スルモ國産ト言フ可ラサ
ルナリ

試ニ彼ノ希臘人ヲ見ヨ百事ニ於テ我師トスル所ニアラスヤ然レモ其
製造セル常用ノ物品ニハ普通ノ細工ヲ施セルノミ
抑製造家ハ家財ヲ製スルニ左ノ三條ヲ主要トセサル可ラス
第一 需用ヲ満足セシムルニ足ルノ形体ヲ與フル
第二 材料ノ性質ニ從テ切組方ヲ變スル
第三 其物品ノ置場所ニ依テ粧飾ヲ簡單若クハ精密ニスル
但粧飾ノ爲ニ切組タル所ヲ傷害ス可ラス
我佛蘭西區ニ出品セル家財ハ美麗ハ則チ美麗ニシテ感嘆ノ外ナシト
雖モ然レモ善ク此三條ノ主意ニ適ヘルカ曰ク否然ラストセサルヲ得
サルナリ云々
第二十小區
陶磁器ノ部
緒言
陶磁器ノ陳列ハ今回ノ萬國博覽會ニ於テ甚タ光輝ノ狀ヲ呈シタリ出

品入數ノ多キト其出品ノ種々ニシテ限リテキト是レ陶磁器製造業
ノ大ニ擴張セルヲ示スヘキモノニシテ其擴張タルヤ首下シテ陶磁製
ニ係ル物品ヲ使用スルモノ益増加スルニ原因シ又大ニ公衆ノ之ヲ愛
好スル丁母盛ナルニ由來スルナリ抑工藝ニ係ル陶器製造業ノ進歩
ハ日常使用ノ磁器ニ因テ發起セルモノニシテ今日其磁器ヲ製造スル
點於テ主眼ヲスル所ハ品質ヲ善良ニシ價ヲ廉ニシ且之ヲヤテ雅緻
美觀ニシテアルヲ猶ホ陶器製造業於テ其力如シテ其進歩ハ
陶磁器製造術ハ之ヲ以テ其目的ヲスルモノニシテ世人ノ最も好テ筆
記講談スル所ナリ然レモ世人ハ一般ニ完全ナル磁器ハ何物タルヲ解
セザルカ如シテ其進歩ハ其能然損壞ニ
抑完全ノ磁器トシテ諸種ノ品質ヲ具備セルモノ云フナリ即チ形体ノ
雅緻美觀ハ着色ノ調和スルヲ然リ而シテ就中第一主眼トスル所ハ
損傷易カラサルコト是レナリ但損傷易カラサルコト云フモ堅固ナルコ
ト混同ス可ラス蓋シ磁器ヲシテ價格ヲ廉シタルモノハ其能然損壞ニ

堪ラカ爲メナリ然ルニ器物ノ本体ヲ成ス所ノ燒土ハ空氣ノ作用ヲ
受クルニモ永ク保存スト雖モ其粧飾ニ用ラル所ノ油藥及染料ニ至テハ
是ト同シカラヌシテ時日ヲ經ルト之ヲ使用スルトニ因リテ多少剝落
シテ特ニ家用ノ磁器ニ於テ然リトス加之油藥及染料ニハ無害ナ
物品ヲ用フルヲ要スルニ即チ過半ノ普通磁器ノ染汁中ニ夥シク入ル
ル所ノ鉛質混交劑ヲ如キハ決シテ之ニ用フ可ラサルナリ寧ロ硬且ツ堅
固ナルヲ以テ貴シト爲ス然レモ雖モ正藝磁器ニ於テハ粧飾ヲ以テ專一
トスルナリ惜ムラバ最モ好ク粧飾シ得ルモノハ最モ損シ易キ磁器
ニシテ又最モ易ク損スルモノハ最モ美ナル染料ナリ而シテ熱火ニ堪
フル所ノ染料ハ僅ニアルニシテ是故ニ陶磁器製造工ハ高度ノ火力ニ損
セサル土ヲ用フレバ則チ從テ之ヲ染ルノ料ニ乏シカルヘシ
是ノ故ニ製造主ハ堅固ニシテ少シク粧飾セル磁器ヲ製出スルカ若ク
ハ粧飾ニ富ムモノ永ク保存セザル磁器ヲ製出スルカ三者ノ一ニ居ラ

可ラス凡ソ人々陶磁器製造術ニ於テ希望ハ美麗シテ且堅固
ナル磁器ヲ製出スルニアリト云フ所以テ之ヲ陶磁器製造師ノ解釋
スルキ大難問トス而シテ其解釋ハ工藝磁器ニアリテハ甚ク重要ナ
ルハ何レハ工藝磁器ニ價格ヲ低減スルハ概テ藝工ノ加工ニ
レハ大費然ルニ容易ク損壞シテ其細工モ共ニ消滅スル所ノ磁器ニ精
工ヲ施スル無要ノ所爲然ルニテ其製造ニ關シテハ
凡ソ完全ナル磁器ハ二元素ヲ以テ組織ス煉土及洶藥是レナリ燒成
後煉土ハ再燒磁器ノ形狀ヲ呈スルモ洶藥ハ又洶藥ハ之ヲ覆フ所
硝子狀ノ物質ナリ其物質ハ煉土ノ白色ヲ成ル時ハ錫製洶藥ノ如ク
不透明ニシテ又煉土ノ白色ヲ成時ハ透明ニシトス
洶藥ハ伊太利陶器ニ在テハ不透明ニシテ緻密陶器ニ於テハ透明ナリ
但磁器ノ性質柔カク煉土ニシテ弱キ火以テ燒クニモ其
洶藥モ同ク柔カクニシテ熔ケ易クナリ抑煉土ハ硬クシテ熔ケ易
カラサルモノナル時ハ一般損傷セザルノ質ニ富ムモノトシ現世紀ノ初

ヨリ大ニ盡力シタルハ總テ磁器ヲ組織スル所ノ此三元素ヲ改良ニ係
リ蓋シ白色磁器ノ製造ニ付テハ前ニ云ヘル問題ハ今日既ニ解釋セ
リ云フモ不可ナキナリ美麗ニシテ且堅固ナル染料ニ於ケル工藝磁
器ニ付テハ其問題ハ解釋セルハ唯テ一部分ニシテ此問題ハ化學ヲ進歩
ヲ待テ全ク解釋スルアラントス
然レモ又工藝磁器ニ付テモ大ニ盡力ヲ試ミサリシニハアラサルナリ
四十年以來ノ進歩ハ實ニ重要ナルモノアリトス其進歩ハ特ニ一千八
百六十七年ニ於テハ巴理ニ一千八百七十三年ニ於テハ維也納ニ顯ハ
レ今回ノ博覽會ニ於テハ近時ノ進歩ヲ示シタリ爾來日尙ホ淺クシテ
未ク擴張ニ狀ヲ呈セズト雖モ然レモ大ニ見ルハキモノアルナリ注意
セシムルニ足ルベシ抑陶磁器製造人員ノ増加セルヲ見ルニ陶器ニ於
テ著シク陶器ハ磁器ニ比スレハ粧飾ノ工ヲ施シ易キカ故ニ其製造
者ノ増加セルハ固ヨリ怪ムニ足ラサルナリ夫レ磁器ニ之ヲ製スルニ
純粹ニシテ世間ニ稀ナル所ノ材料ヲ要シ又其煉土ハ費用多キ器具ヲ

以テ製スルモノニシテ且ツ巧智アル特別職工ノ力ヲ假ラサル可ラス
陶器之ニ反シ目下ニアル所ニ土ヲ以テ製スルヲ得テ其煉土之ヲ覆
フ所ノ坩堝之ヲ粧飾スル所ノ染料ヲ燒クニ中等ノ火力ヲ用フシハ則
チ可ナリ故ニ中等ノ工人ハ費用ヲ多ク出サスシテ之ヲ製スルヲ得
ベシ是ニ故ニ陶器製造業ハ小ナル工場ヨリ起リシモノナリ其工場ハ
才智勇氣アル工人ヲ裝置ニ係リ又其工人ハ自ラ奮テ事ニ從ヒ遂ニ玉
藝陶器ヲシテ有名タル區域ニ達セリ而シテ其貴重セラレ
ル外今日尙ホ昔日ニ減セスト云フ爾來之ニ摸倣シテ製造スルモノ日
益多ク博覽會場公私ノ蒐集品中ニ見ユタル陶器ハ好事家及外國製
造家ノ注意ヲ喚起シタリキ其製造タル摸倣ハ則チ摸倣ナリト雖モ今
日ニ至テハ諸國ニ於テ數多ノ工人其業ニ從事シ所得多クシテ又智力
ヲ研磨スルノ材料ヲ得ルニ云フモ不可ナリナリ
夫レ玉藝陶器製造ノ斯ク如ク速ニ盛ナリシ理由ノ第一ハ既ニ前ニ云
タル如ク其製造ノ容易ナルニアリテ尙ホ且ツ工人各其工品ニ特別

標印ヲ附スルヲ得ルニ因ルモノトス初時ニ製造セル陶器ハ實際品質
ガ善良ナルニ拘ハラス既ニ世ノ厭フ所トナレルヲ以テ新々ニ
他ノ色ヲ染テ新粧飾ヲ工夫シ夫レ東洋ノ陶器ト其特別ナル色トニ摸
倣スルニ至レリ然レモ彩色ニ光輝ヲ與フレハ陶器ノ品質ヲ損スル
往々少カラサリキ是レ陶器ニ在テハ最モ永ク保存セサル色ハ最モ佳
美ニシテ又最モ快活ナレバナリ是ニ於テカ磁器及之ニ塗ル所ノ坩堝
ヲ堅固ニシテ其改良ヲ計ルニ汲々トシ好ク水ヲ保チ熱氣ヲ爲ニ破碎
セザル工藝磁器ヲ製出スルニ至レルナリ四十年以來博覽會ニ從事ス
ル好事家及陶磁器製造師ハ昔日ノ製品ト今日ノ製品トニ於ケル品質
ノ異同ヲ證檢スルヲ得ルニ汲々トシ
然レモ是レ未タ以テ足レリ蓋爲ス可ラサルナリ夫レ磁器ハ佳美堅固
ニシテ又其粧飾ヲ精粗ハ器物保存ノ年月ニ適合セサレハ完全ト云フ
可ラサルコトヲ忘ル可ラス是レ其改良ヲ計ル者ハ最モ硬キ煉土ト強キ
熱度ニ堪アル染料トヲ得ルニ汲々トシ所以ナリトス蓋シ陶磁器製造

家ノ最モ盡力セシハ爰ニアリ而シテ今尙ホ盡力シテ已マサルナリ陶
磁器ニ粧飾ヲ爲ス下ハ工藝陶器製造所ニ始マレト雖モ今ヤ大ナル
陶器製造所ニ移ル漸アリ蓋シ美ナル陶器ヲ愛スルモノ日ニ益多ク
大ハ又其希望ヲ進メタルカ故ニ日用通常ノ物品ト雖モ之ニ雅致アル
形体種種ナル粧飾トヲ與フルヲ要スルナリ緻質陶器ノ製造所ニ於
テハ最モ硬ク最モ反射アル陶器ヲ製スト雖モ彩色ハ之ヲ燒クノ火力
ニ堪ヘサルカ故ニ之ニ用フルノ色料ニ乏然レモ其空乏ヲ補充スル
カ爲メ世人ノ盡力シタルハ甚メ著明ナリトモ今回ノ博覽會ニ因レハ
其盡力シテ得タル結果ノ景狀ヲ見ルベキナリトモ
其景狀ニ因テ之ヲ見レハ緻質陶器及其硬堅洵藥ヲ以テ美麗ナル粧飾
ヲ爲スニ至レルナリ而シテ其陶器ハ其本然ノ性質ナルヲ拘ハラス磁
器ノ如ク透明ナラズ緻密ナラス又硬堅ナラストモ磁器製造家モ亦其
影響ニ感シ磁器ニ粧飾ハ之ニ其盡力ノ主眼ナレリ然レモ磁器ニ至
テハ其困難ナルヲ陶器ニ比スレハ甚メ大ナリ夫レ磁器ハ世人ノ偏ク

知出如ク半透明ノ美ヲニシテ其煉土ノ元素殊ニ熔解ス可クサレヨ
ト云フ「粘土」ト熔解スベシ「石色」ト云フニ三種ナリ而シテ其煉土
ニ甚メ強度ノ火力ニテサレハ燒ク可ラス又其洵藥ハ「セル」スバ「及」
「コ」ワ「ル」ス「石」ヲ以テ成ルニシテ煉土ト同シ火力ニ燒クベシ
トモ夫レ斯ク如クナルカ故ニ彩色ニ其火力ニ堪フルヤ甚メ難シ故ニ
一般既ニ燒キタル煉土ニ之ヲ塗リテ以テ低度ノ火力ニ燒クヲ通例ト
ス博覽會ニ出品セル所ニ粧飾ニ磁器ハ美麗ナル集合物ナリ其粧飾
ニ富メルヲ陶器ノ比ニテアラスシテ甚メ著明ナリトモ
概言セバ今回博覽會ニ他ニ異ナル所ハ重ク性質ハ粧飾ナリトモ寧
ロ形体及彩色ノ二點ニ於ケル陶磁器製造術ノ擴張ニ云テ可ナリ
抑白色磁器製作模型築造器具及材料ヲ附録若クハ他小區ノ報告ニ讓
レテハ前ノ理由ニ外ナラスト雖モ甚メ惜シクハ蓋外見ニ於テハ
要品ニアラサルカ如クナレバ其効用ノ著明ニシテ第一等ニ位スルニ
足ルベキ物品ヲ第二位ニ讓ルハ是レ製陶術ノ重要ナル所ヲ減殺スル

至ノナルハ、
夫レ大衆ノ家宅常用ニ供スヘキ白色磁器及普通磁器石ニ代用シテ管
テ各地ノ都府全部ヲ築造スルニ用ヒ今日尙ホ之ニ用クル所ノ煉化石
治金師及硝子製造師ヲ爲シ甚ク貴重ニシテ又火力ヲ使用スルニ技術
ニ從事スル所ノ工師ヲシテ用ヒテ以テ甚ク大ニ結果ヲ得セシメタ
ル所ノ反射性ノ物品、化學工業ニ於テ大ニ効用ヲ與ワル所ノ甚ク堅固
ニシテ且ツ經濟ノ主義ニ適シ毫モ人ノ健康ヲ害セサル所ノ土器ノ如
キハ是レ皆ハ陶磁器製造家ノ發明ニ製造シ及改良シタル所ノモノニ
シテ其呈スル所ノ効用ト其使用スル場合ノ數多ナルトニ因リテ最
モ美麗ニ粧飾ヲ施セル磁器ノ傍ニ裝置スルニ足ルモノニアラスハ
是ノ故ニ第二十小區即チ本區中ニ陳列セシ所ノモノハ重モニ磁器陶
器土器及其他第二次ニ列スヘキ製産物トス抑各區ノ物品ハ皆ハ特別
ノ報告書中ニ詳ニ之ヲ掲載スヘキカ故ニ別ニ爰論セサルナリ此
ニ開設セル所ノ博覽會ト今回ノ博覽會トノ間ノ時日ハ甚ク短キカ故

ニ未ダ曾テ見サル所ノ奇品珍器ノ數多カルヘシト思惟シテ報告書ノ
刊行アルヲ待ツベカラズ然レモ近時ニ於テハ進歩及將ニ顯ハレント
スル所ノ進歩ト尙ホ改良シ補充スヘキノ缺短トハ皆ハ其書ニ詳ニ説
明スル丈ハ不自然レハ則チ其所説ハ陶磁器製造術歴史ノ一部分トシ
東洋陶磁器ノ部
日本帝國
巴理大博覽會日本事務官長
大藏大輔
就テ陶磁器ノ出品ハ種々ニシテ
其製造ノ中心タル各地ニ於テ製造主ノ各性質ヲ特異
ナキ土ヲ用フルニ因ルナリ
日本ニハ陶磁器ノ物産三種アリテ判然區別スヘシ
第三 陶器「ア」ダヤキ「サ」ツ「ア」ワシヤキ「名」ア

第三 陶土器 「パシヨヤキ」ト稱ス時アリテ泐藥ヲ附ケタルモノアリ
 第三 磁器 「アリタセト」キヨミズヤキ」等ト云フ
 常用若クハ室内ノ粧飾ニ用ウル所ノ物品ニ與テタル種々ノ形体ハ皆
 ナ善良ノ新工夫ナリ其粧飾ノ如キモ本質以テ巧智ヲ見ルニ足ルモノト
 ス細カニ之ヲ閱ミスレハ圖書及細工並ニ賞スルニ餘リナルナリ
 予輩ハ日本ノ陶磁器製造ノ業ニ從事スルモノ、低價物産ノ貿易ノ感
 響ニ決シテ制セラレシメナキヲ大ニ祝スルナリ若シ其レ之ニ制セラ
 ルモノアラハ其製造物ノ美ナル品質ヲ減殺スルコト支那帝國ニ於ケル
 カ如クナラントス
 予輩ハ又日本國カ陶磁器出品ヲ爲メ數多ク褒賞ヲ得タルヲ愛ニシ
 言スルノ幸ヲ有スルヲ以テ、
 審査官ニ於テハ下ニ列舉スル人ニ褒賞ヲ授與スルモノヲ左列如シ
 名譽賞狀
 陶磁器出品人申

金牌ノ部

東京府下

神奈川縣下

愛知縣下

長崎縣下

銀牌ノ部

京都府下

全

石川縣下

鹿兒島縣下

銅牌ノ部

東京府下

京都府下

瓢池園

宮川香山

七寶會社

香蘭社

幹山傳七

丹山青海

圓中孫平

柿本彦左衛門

熊本縣廳

服部

永樂善五郎

全	和氣 龜亭
全	清水 六兵衛
全	高橋 道八
愛知縣下	加藤 勘四郎
全	川本 枿吉
全	加藤 中左衛門
全	川本 幸助
岐阜縣下	加藤 吾助
全	清水 溫古
三重縣下	谷 斯
石川縣下	河部 碧海
賞狀ノ部	長崎縣廳
東京府下	松本 芳延

全	太田 萬吉
全	種日 八十吉
全	青木 虎吉
京都府下	清水 七兵衛
愛知縣下	山田 茂七
全	加藤 紋左衛門
愛知縣下	秋山 貞次
三重縣下	高木 閑齋
全	森 與五左衛門
石川縣下	笹田 藏二

第二十二小區
染紙及壁紙ノ部

日本製造擬草紙ノ陳列ハ外國出品中ノ最モ裨益アルモノ、一ナルコ
ハ固ヨリ論ヲ須タサルナリ其製法タル全ク我國ニ同シカラス而シテ

又此紙ハ壁紙中ニ入ル、モ染紙中ニ入ルモ不可ナカルヘシト雖也然レ其用法ニ因テ之ヲ見レハ寧ロ染紙ノ部類ニ入ルキモノ、如シ此紙ハ三十或ハ四十「サンチメートル」ハ「サンチメートル」ノ小葉ヲ以テ賣買スルモノアリ或ハ又我國ニ於テ製スルモノ、如ク長サ八「メートル」我三「尺」三「寸」ハ凡ノ卷ニ作テ賣買スルモノアルヲ其出品人ハ竹屋譯者曰ク日本出品目録ヲ見ルニ竹屋銀牌ヲ得タリ竹屋ハ其家號トアレハ原書ノ誤カ而シテ原書ニハ六名アリ出池部、榛原、今井及黒野ノ五名ナリ竹屋氏ノ出品ハ壁ニ掛ケル様セシモノニアラスシテ見本冊子ノ体裁タリ而シテ無色形附ナル巾三十「サンチメートル」長四十「サンチメートル」ノモノヲ陳列セリ其形附ハ原質ノ剛弱ニ因リ銅製或ハ木製ノ彫刻板ヲ以テシ後チ漆汁ヲ塗リ其乾燥スルヲ待テ棕栝色ノ粉ヲ散布スルナリ之ヲ摩札スレハ則チ古金色トナリテ金銀ヲ鑲嵌セル物品ノ風致アリ予輩其諸種ヲ點檢セルニ種々ノ形附アリ頗ル細微ニシテ又甚タ味アリトス

又竹屋氏出品中ニ其數葉ヲ接合セル巾一「メートル」長八「メートル」大卷アリ其接合法ハ甚ダ巧ニシテ密ニ注意セサレハ小葉ヲ集メタルモノナルコトヲ知ル可ラス此紙ハ多ク英國ニ輸入シ英人ハ之ヲ室内粧飾ノ用ニ供スト云フ其價ハ日本ニ於テ四十「フラン」ナリ又其卷ハ日本區ニ張ルモノ數多ナリト雖也惜ムラクハ其掛クル所甚高クシテ精密ニ見ル能ハス

竹屋ハ日本大家ノ一ニシテ職工ヲ使用スルコト頗ル多シト云フ竹屋ノ傍ニ池部、榛原、今井、黒野諸氏ノ製造ニ係ル種々ノ紙類ヲ陳列セリ然レモ其品質ハ蓋シ竹屋ノ出品セルモノニ如カサルナリ

又此諸氏ノ出セル物品中ニハ見本ノ冊子ニ製シテ尋常ノ紙類ヲ陳列セルモノアリ其紙ハ皆巾三十「サンチメートル」長四十「サンチメートル」ノ大サニシテ染藥ヲ塗リ青貝原書ニ青貝トアリノ粉ヲ散布シ而シテ形附器ヲ以テ壓權シタルモノナリ其粉ハ恰モ摸造ノ銀ニ似タリ此紙類ハ皆粧飾ニ用フト云フ

又日本出品中ニハ紙巻烟草ノ用紙ヨリモ薄キ紙アリ三四種ノ着色ヲ以テ繪ヲ描ケリ此繪中ニハ金箔アルモノアリ此類ノ紙ハ我國ニ於テ「アンジエヌ」ト稱スル布ニ甚タ好ク似タリ又此紙ハ薄シト雖モ甚タ強キヲ以テ手巾ニ代用スベシ

其他日本紙中ニハ染紙ノ部類ニ列ス可ラサルモノ若干アリ木ノ織緯ヲ以テ製スル所ノ頗ル強キ紙ノ如キ是レナリ其中ハ皆三十「センチメートル」長四十「センチメートル」ニシテ厚サハ二「ミリメートル」乃至三「ミリメートル」ニ下ラス此紙類ハ蠟引ノ布及薄キ草ニ異ナラスシテ表面ニハ油及漆ヲ塗抹セリ其質強ク又軟柔ニシテ書物ノ表紙紙入、旅袋、錢囊卷烟草入ノ製作ニ用フベキモノタリ

第二十四小區

炭金術ニ係ル物品ノ部

爰ニ注意シテ日本出品ヲ検査スルニ其細工其形体更ニ間然スヘキ所ナキモノナリ之ヲ我風俗我慣習ニ照ラシテ研究スルニ尙ホ種々ナル

形体ノモノヲ造作シ又種々細工ヲ施セルモノヲ製出スヘキ方法アルヲ知ルナリ

其出品ハ總テ研究ノ料ニ供スルニ足ルヘシ其形体ハ穩當ニシテ且快樂ヲ覺ヘシメ又色附ノ工ハ甚タ巧ニシテ其着色ノ濃薄ハ甚タ適度ヲ得タリ實ニ最モ貴重スヘキ模範ト謂フヘシ嗚呼何ソ其製造法ノ佳ニシテ又人目ヲ喜ハシムルノ甚シキヤ

- 金牌ノ部
- 東京府下
- 田長次郎
- 起立工商會社
- 銀牌ノ部
- 東京府下
- 齋藤善兵衛
- 京都府下
- 並河靖之
- 愛知縣下
- 七寶會社
- 銅牌ノ部

原書ニ魯西亞、合衆國、英吉利國製造家ノ出品ヲ評シ其進歩ヲ説クノ結
文ニ曰ク

此等製造家ノ進歩ハ將タ何ニ歸スルヤ抑事故アリテ我國ヲ去リタ
ル藝工ノ競争ニ因ルカ曰ク否内國若クハ外國博覽會ノ開設數回ナ
ルニ因ルカ曰ク否夫レ其進歩ノ原因ハ職トシテ畫學校ヲ設立ニ因
ルモノナリ前ニ揭示セル製造主ハ曾テ各其國ニ畫學校ヲ設立シテ
維持ノ方法ヲ立テ加フルニ競争試験法ヲ設ケ褒賞ヲ授與シテ以テ
生徒ヲ獎勵スト云フ云々

第二十五小區

青銅細工ノ部

外國工業總論ニ曰ク
夫レ青銅ノ製造ハ全ク佛國ノ工業ニシテ殊ニ巴理ニ於テ盛ナリトス
今回博覽會ノ結果ニ因テ之ヲ見ルニ青銅工業ハ我國ノ專有物タルコ

ヲ證スルニ

然レモ又今日青銅物品ヲ製出スル外國ノ中ニ就キ先ツ予輩ノ注意ヲ
惹起スモソヲ澳地利國トス云々澳地利ノ青銅工業ヲ説クノ後第二ニ
日本ノ工業ニ論及セリ
茲ニ又今日其物産ノ一種特異ナルニ因テ天下ニ勝ヲ制スル所ノ日本
人ヲ論セサル可ラス
日本人ハ青銅細工ニ於テ曾テ拮抗セシ所ノ支那人ヲ遙ニ超過セリ是
レ其古代ノ青銅品ヲ以テ之ヲ證スルニ餘アリトス
予輩ノ意見ニ因レハ支那人ノ其古代ノ物産ヲ近世ノ物産ニ混化セル
ハ大ニ過テリト云フヘシ是レ近世ノ物産ノ下等ニアルヲ明證スルニ
足ルナリ
其古代ノ物産ハ充分ノ風致アルニ近代ノモノハ濃ニ過キタルカ故ニ
之ヲ混交スル時ハ互ニ其風致ヲ害シ近世其工藝ノ頽衰セルヲ示スモ
ノタルニ過キサルナリ且又之ニ關スル法律ハ進歩ト新工夫トヲ禁ス

ルモノタリ
 日本人之ニ異ナリ曾テ其特異ノ原質ヲ失フコトナク又晩近ニ至テハ
 其物産ノ形体及製造法日ニ新ニシテ其青銅工藝ノ進歩ハ今ヨリ予輩
 ノ注意セサル可ラサルモノアルナリ
 其青銅品ハ一種特異ノ風趣アルト細工ノ種々ナルトニ因テ今回ノ博
 覽會ニ於テ大ニ結果ヲ得タリ
 然レ而爰ニ今世人ノ日本品ヲ珍重スル所以ヲ詳ニセサル可ラス
 夫レ予輩ハ青銅品製産ノ中心タル金澤及高岡ノ青銅工ノ製造ニ係ル
 工品ヲ見ルニ鑄物打物ノ美ナル器物ニシテ金銀等種々ノ物ヲ鑲嵌シ
 木葉ノ形ヲ描テ實ニ最奇巧ノ風趣アルナリ植物及其花且人物ヲ畫ケ
 ルノ精巧ナル嘆スルニ餘アリトス其圖ハ元ト甚々簡單ナルモノナリ
 ト雖而毫モ風趣ヲ損セサルナリ又器具ヲ使用シタルノ形迹ヲ止ムル
 コトナレ夫レ日本人ハ金屬ヲ軟柔ヨシムルノ術ヲ知り之ヲ熔カシ及
 之ニ彫刻スルニハ最妙ナル混合法ヲ用ヒ以テ金屬ノ性質ヲ變スルナ

又其着色ハ感嘆スヘキ味アリテ非常ニ堅固ナルモノトス
 蓋シ此類ノ業ニ付テハ大ニ秘訣アルヘシト雖而予輩未タ之ヲ發見セ
 ザルナリ今ヨリ千百ノ方法ヲ用テ之ヲ發見スルコトヲ務メサル可ラス
 又我國藝工ハ務メテ金屬混合、金キセ、金屬ニ漆スル工、象嵌、泐藥製作等
 ニ係ル方法ヲ發見スルコトヲ要スルナリ
 日本人ノ鑄物亦甚々裨益アルモノナリ就中孔雀及鳩(眞形)ノ香爐ハ出
 品中ノ優等ナルモノトス
 我國有名ナル青銅工ハルベテエンス氏ノ工場ニハ鑄物ヲ作ル藝工一
 名アリテ眞物ノ虫類、蝦類、木葉等ヲ以テ鑄型ヲ製作スルコトハ日本ノ優
 等ナルモノニ伯仲ス下云フ
 同氏ハ又日本ノ出品ヲ予輩ニ示シ證明シテ曰ク我國製造ノ精ナル爰
 ニ至ルヲ得ヘシト雖而之ヲ以テ工藝ノ極度トナシテ甘ス可ラザルナ
 リト又予輩ハ新金屬ナル烏銅ヲ見タリ是レ青銅ト黃金トノ混合物ニ

シテ之ヲ用ヒハ最美麗ナル着色品ヲ製スヘシ
 粧飾模様ニ至テハ日本製ヲ以テ最貴シトス何レノ國ノ人民モ諸色ヲ
 附テ合スニ於テハ日本人ノ右ニ出ルモノアラザルナリ
 之ニ因テ之ヲ觀レハ我國工人ハ日本人ニ摸倣スルコトヲ務メサル可ラ
 ス下雖モ一ニ之ニ則ルコト怪異ノ獸類ヲ摸擬スルコトハ謹マサル可
 ラザルナリ
 常ニ希臘ノ遺風ヲ以テ精神トスル所ノ我國彫刻工ハ日本風氣ノ我國
 ニ侵入スルニ注意セサル可ラス日本人ハ實ニ我國工人ノ對敵ナリ
 日本人ノ細工中ニハ摸倣スヘキモノ多クアリト雖モ然レモ假令摸造
 所爲ニ倣ハシテ我國特異ノ原性ヲ失フ可ラザランヲ要スニ日本人ノ
 ハキハ予輩ノ疑ハサル所ナリ
 日本ニ於テハ三名ノ製造家金牌ヲ得タリ即チ齋藤圓中及工商會社
 ニシテ其出品ハ金銀及渤藥ヲ以テ粧飾ヲ施セル青銅製ノ器物ニシ

其細工甚々奇巧ナリトス

第二十七小區

温室器械類ノ部

日本出品人ハ總テ五名ニシテ内銅牌ヲ得タルモノ三名ナリ
 外國部ノ論ニ曰ク
 予輩ノ端初ニ云ヘル如ク今回ノ博覽會第二十七小區ニハ外國人ノ出
 品セルモノ甚々少ク且ツ重要ナル物品ヲ送致セルモノアラザルナリ
 云々而シテ合衆國、英國、白耳義、伊太利、丁抹ノ出品ヲ評スルノ後又曰ク
 其他ノ國ハ大概火柴ヲ出品セルニ過キス瑞典、那威、魯西亞、西班牙、伊太
 利、匈牙利及日本皆火柴ヲ出品セリ
 日々駭々乎トシテ歐羅巴ノ開化ニ進歩スル所ノ日本ニ於テハ火柴ノ
 工業ハ合衆國ヨリモ速ニ擴張セントスルモノ、如シ

第四大區

第三十小區

第三十 木綿絲及織物ノ部

支那及日本ヨリハ別ニ何等モ出品セサルナリ此二國ニハ手製ノ織物
 及小雖特ニ愛ニ言フニ足ラス予輩ハ日本ノ物産中ニ木綿ノ紋派
 織唯一種アルヲ其外他支那區ニ二三種ノ出品アルヲ外他ニ何
 等モ言フヲ得ズ其外他ニ何モ出品セサルナリ
 第三十一 小區
 亞麻、麻等ノ絲及織物ノ部
 總論、亞麻工業ハ今回ノ博覽會ニ於テ甚ク隆盛ノ景況ヲ呈シ出品人
 亦三百二十六名内日本八人多キニ上リ云々夫レヨリ佛蘭西、白耳義
 英、吉利、澳地利、獨逸、伊太利、魯西亞ノ工業ヲ論スルノ後曰ク
 葡萄牙、西班牙、瑞典、阿蘭、那威、丁抹、瑞西等ノ國々ハ紡績工場アルモノ甚
 タ僅少ニシテ布ヲ織ルニ機械ヲ以テスルモノ亦甚タ稀ナリ材料ニ供
 スル絲ノ如キモ外國ニ仰クト云フ
 歐洲外ニ於ケル國ノ出品ハ甚タ僅々ナリトス是其國ノ亞麻工業ハ一

般微々タルニ因ルナリ抑亞麻工業ニ於テ粗製ノ品物ヲ產出スルニ事
 ニ於テハ我國ノ英國、白耳義國等及ハサルヲ遠シト雖佳美ノ品物即
 チ奢侈ニ屬スル品物ヲ製スルニ至テハ我國ハ其上ニ位スルモノナリ
 今此總論ノ文ヲ結ハントスルニ際シ一ノ注意セシムヘキヲアリ曰ク
 第三十一 小區ノ出品人ハ種々ナル亞麻製ノ品物ヲ陳列セリト雖然
 レモ紡績ノ業ハ獨リ亞麻耕作ノ擴張セルニ三ノ大國ニ非レハ甚ク盛
 ナラスシテ且又進歩セサルヲ見ルハシ亞麻ノ耕作自國ニ盛ナラス
 シテ亞麻工業ノ其國ニ盛ナルノ例ハ未ダ曾テ之アラサルナリ
 亞麻耕作ニ未製品ハ第三十一 小區ニ屬ス可ラスシテ原質材料部内ノ
 モノナリト雖モ亞麻耕作ト其工業トハ密着ノ關係アルガ故ニ吾人ハ
 自然亞麻耕作ノ景況ニ注目セサルヲ得サルナリ
 後ニ示ス所ノ員數ニ依レハ佛國ノ亞麻耕作ハ一千八百六十七年以來
 著シク減却シタルヲ見ルヘシ蓋シ其原因ハ素ト種々アリト雖モ其最

タルモノハ競テ亞麻ニ代ルニ甘菜ヲ以テシタルニアリ夫レ亞麻耕作
 往々凶歉ノ患アリテ耕者ハ二三年ノ間相續テ其歉收ニ遭フ時ハ皆
 勇氣ヲ挫キ他物ヲ播種シテ以テ其損失ヲ償ハント欲スルモノ一ニシ
 テ足ラサルナリ是レ即チ亞麻ニ代ルニ甘菜ヲ以テスル所以ニシテ會
 テ亞麻耕作ニ盛ナリシ州郡ハ今皆甘菜ノ園圃ニ變シ其耕作亦甚々盛
 ナリトス
 亞麻耕作減却ノ他ノ原因ハ機械紡績ノ手業紡績ニ換リタルノ故ナリ
 曾テ佛國諸州ニ於テハ大概皆亞麻ヲ栽培シ收穫ノ後手業ヲ以テ之ヲ
 紡績シ冬時ノ間耕耘ノ閑暇ナル時ヲ撰ミ田舎ニ送リテ之ヲ織ラシメ
 其ルモノナリ今セ然ラス亞麻ノ剝皮場及紡績所ノ近傍ニアラサル州
 郡ニ於テハ皆亞麻耕作ヲ放擲スルニ至レリ是レ之ヲ遠所ニ送リテ紡
 績スル時ハ運送ニ賃銀ヲ費シ其得失相償ハサレバナリ
 夫レ佛國諸州ノ氣候地味ハ亞麻耕作ニ適セリト雖モ其收穫ノ後直ニ
 之ヲ水ニ漚シ其皮ヲ剝クノ業ヲ施ササル可ラス之カ爲メ未製ノ亞麻

他方ニ送ル時ハ過當ノ運送賃ヲ要スヘシ且ツ水ニ漚シ及皮ヲ剝ク
 ノ業ハ既ニ經驗アリテ善ク事ニ慣レタル者ヲ要シ佛國北方ニアル
 モツハ如キ特別ノ工場ニ於テモサレハ費用ヲ節減スルヲ能ハサルヘ
 是ニ由テ之ヲ觀レハ亞麻耕作ヲシテ佛國ニ盛ナラシムルニハ諸處ニ
 漚漬場及剝皮場ヲ建設シ且ツ鑛道局ニ運賃減價ヲ請求ヲ爲スヲ要ス
 ヘシ今ノ鑛道運賃ヲ以テセハ必ス得失相償ヲ至ラサラン
 リヨソノ亞麻會社ハ曾テ其耕作ヲ盛ニスル爲メ大ニ盡力セリコト
 シヨソノ亞麻會社モ亦政府ニ向テ亞麻耕作ヲ盛大ニスルノ保助ヲ
 乞フヨ頻リナリト云フ
 漚漬場剝皮場ヲ建設シテ經驗アル職工ヲ派遣シ尙ホ且ツ獎勵ノ典例
 ヲ立ツレハ遠隔ノ諸州ニ亞麻ノ耕作ヲ振興スルヲ得ヘシ
 我佛國政府ハ英國ノ例ニ注目シ奮然其爲ス所ニ倣ハサル可ラス夫レ
 英國愛倫ニ於テ亞麻耕作ノ十二万「ヘクタール」我「ヘクタール」ハ五歩ノ多キ

上レルハ獎勵ノ典アルニ因ルモノナリ
 我國ニ於テ亞麻ノ耕作盛ナレハ則チ夫ニ外國ノ輸入ヲ減殺スルヲ得
 シト雖モ其輸入ハ千八百七十七年ニ在テハ七千万「キログラム」キ
 我ニ百六十ハ凡ソニシテ大略十七万五千「キログラム」ノ産額ナリ又其價
 格ハ一億「フラン」内外トス

亞麻耕作ノ減却セル又他ノ原因ハ其耕者ノ上等品ヲ産出セントスル
 ノ傾向アルニ是レナリ耕者ニ在テハ素ヨリ其理アルノ所爲ナリト雖
 惜ムラクハ紡績所ヲ有スルモノ其製造物ヲ廉價ニ販賣セサルヲ得
 ず下外國ノ競争アルトニ因テ精製ノ品物ヲ産出スルヲ減シ尋常ノ
 品物ヲ製スルカ故ニ其需用ニ適セサルナリ
 我國紡績所ノ需用ハ外國亞麻内國亞麻各相半スト云フ
 一千八百六十七年及一千八百七十七年ノ外國亞麻輸入左ニ如シ
 國名 噸 一千八百六十七年 一千八百七十七年
 魯西亞 一〇二五四噸 一〇二五四噸

白耳義 一三三七〇七噸
 英國 一三三〇噸
 其他 一四九〇噸
 歐洲諸國ニ於ケル亞麻耕作ノ大小ヲ見ルヘキ確實ノ員數ハ知ルニ由
 ナシト雖モ後ニ掲ルモノハ審査官ノ告タル所ト英國ノ「フラグスサップ
 ラ」會社ノ報告書ヨリ引用スル所ト大數ナリ此會社ハ愛倫ニ於テ
 亞麻耕作ノ擴張ニ從事スルモノナリ其統計表ニ因レハ大英國ニ係ル
 モノ左ノ如シ
 年次 噸
 一千八百七十五年 一〇一二四八「アークル」即四〇九七〇「ヘクタール」
 一千八百七十六年 一三二九三八「アークル」即五三七九六「ヘクタール」
 一千八百七十七年 一二三三六二「アークル」即四九九二〇「ヘクタール」
 愛倫ノ亞麻耕作ハ一千八百五十年ニ在テハ九萬壹千〇四十「アークル」
 ニシテ千八百六十四年ニハ最モ隆盛ノ域ニ達セリ(三十萬壹千六百九

十三「アークル」即チ十二萬二千〇八十五「ヘクタール」ノ多キニ至レリ爾來
 連年漸衰退ノ景況ナリ云々
 澳地利匈牙利ニ於テハ商務尙書及農業會社ヨリ亞麻ノ耕作ヲ獎勵ス
 十雖能然レモ匈牙利ノ如キハ著シク減却セリ
 一千八百七十年 一〇一二〇「ヘクタール」
 一千八百七十六年 一〇二五一二「ヘクタール」
 一千八百七十年 一六八二七「ヘクタール」
 一千八百七十六年 一六八〇九「ヘクタール」
 白耳義ノ亞麻耕作亦左ノ如シ
 一千八百四十六年 二九八七九「ヘクタール」
 一千八百五十六年 三二八三六「ヘクタール」
 一千八百六十六年 五七〇四五「ヘクタール」

一千八百七十七年 五〇〇〇ヨリ六〇〇〇ニ至ル

此最終ノ數ハ諸書ヨリ拾集セル大略ノ數ナリ官府ノ調査ハ一千八百
 八十年ニ至ラサレハ行ハスト云フ
 獨逸ノ亞麻耕地ノ面積ハ未ダ詳ナラスト雖モ千八百七十五年ニハ二
 十壹萬四千八百三十五「ヘクタール」ノ概算あり
 阿蘭ハ亞麻ノ耕作甚タ盛ナル國ニシテ輸出ニ供スルモノ多シ面積左
 ノ如シ
 一千八百七十年 二四二二「ヘクタール」
 一千八百七十三年 一八九九六「ヘクタール」
 一千八百七十四年 二〇二三六「ヘクタール」
 一千八百七十六年 二三〇〇「ヘクタール」
 一千八百七十七年 二八〇〇「ヘクタール」
 伊太利ノ亞麻耕地面積ノ確實ナルモノハ千八百六十七年ノ調査ニ係
 ルモノ、外之レ有ラス當時ノ調査ニ因レハ八萬壹千三百八十六「ヘク

タルナリトス蓋シ此數中ニハ麻ノ耕地モ包含スルナルハ
 魯西亞ハ最多ク亞麻ヲ產出スル國ニシテ歐洲諸國ノ需用ハ皆其供ス
 ル所ナリ年々ノ收穫ハ二億五千万「キログラム」ニシテ之ヲ地ノ面積
 ニ比例スレハ大略七十萬「ヘクタール」トス其輸出額左ノ如シ

一千八百七十三年	一五〇〇〇〇〇	「キログラム」
一千八百七十四年	一六四四二〇〇	「キログラム」
一千八百七十五年	一六七四五三〇	「キログラム」
一千八百七十六年	一一三六五〇〇	「キログラム」
一千八百七十七年	一八六六三六〇	「キログラム」
一千八百七十六年間各國へノ輸出左ノ如シ		
獨逸國	四七二五二六〇	「キログラム」
英國	四六二一〇四〇	「キログラム」
佛國	七七〇五二五〇	「キログラム」
白耳義	三八三七〇〇〇	「キログラム」

澳地利

丁抹

瑞典及那威

合衆國

阿蘭

爰ニ

七千五百

ヘン

前ニ列舉セル面積ヲ總計スレハ幾ト百五十萬「ヘクタール」トナルナリ亦
 以テ亞麻工業ハ重要ナルコトヲ證スルニ足ルヘシ
 亞麻商業ニ亞麻ノ商況ハ一千八百六十七年以降大ニ變狀ヲ呈セル會
 テ紡績所ノ產出ヲ一手ニ買受ケシ所ノ大商家ハ其取引ノ數大ニ減ス
 ルノ不幸ニ遇ヘリ是レ紡績所々有主ハ可及的價ヲ廉ニスルノ已ムヲ
 得サルニ因リ牙錢ヲ節センガ爲ニ購買人ト直接ノ取引ヲ始メタルニ

原因スルモノナリ抑、田舎ニ於テセル手織ノ廢セラレテ機械織トナリ
 唯々二三ノ大家ニ於テ專ラ製出スルニ至ルニ及テ賣者買者ノ直接取
 引ハ妙ニ容易トナレリト云フ
 然レモ佛蘭西ニ於テハ亞麻絲ノ商業ヲ營ム夫家尙ホ二三アリテ就中
 紡績所一箇ト數多ノ機械織場ヲ有スルモノ一名アリ云々
 諸種ノ麻布類ノ部下題スル所ニ曰ク
 「チヤイナグラス」ト稱スル布ノ部類日本ノ出品中ニ絹ヲ交テ織レルモ
 ノアリ甚タ風趣アリテ又甚タ佳美ナリトス其織物ノ巾ハ甚タ狭ク三
 十「サ」チメ「ト」ル」シテ惜ムラクハ價極メテ貴シ是レ日本ノ婦人ハ我
 國ニ於テ美飾專務ノ婦女ノ如ク大尺ノ布類ヲ粧飾ニ供セサルヲ証ス
 此等ノ布ハ其質硬クシテ到底今ノ用ニ供スルニ適當ナルモノニアラ
 又結文ニ曰ク我國ノ研究家ハ專ラ事物ノ發明ヲ務メ又博學碩儒ハ一

ニ學問ヲ主トシテ以テ新規ノ發明ヲナシ在來ノ方法ヲ改良シ兼テ我
 國工業ニ供スヘキ新材料ヲ案出セシヨヲ望マスンハアル可ラサルナ
 此第三十一小區ニハ日本出品人三名ニシテ内金牌ヲ得タルモノ一名
 實狀ヲ得タルモノ一名トス
 第三十二小區
 毛絲及毛布ノ部
 (此區ノ報告ニハ別ニ日本出品ノ品評ナシト雖モ總論ヲ譯出ス)
 總論第三十二小區ニ係ル工業ニ付キ前回博覽會ノ事ヲ爰ニ掲出ス
 ルモ無要ト認ムルニ因リ唯々千八百六十七年以來ノ工業進歩ヲ説明
 スルニ止メントス
 此第三十二小區ニ出品セル各國ヲ逐一掲出セント欲スルモ頗ル困難
 ニ遭遇スルモノアルナリ何ントナレハ英國、匈牙利、波希米亞、伊太利、白
 耳義、亞米利加等ハ皆少數ノ出品人アルニシテ其國ニ於ケル毛布

工業の盛大ノ比例ニ適合セザレハナリ其他予輩ノ其工業ノ重要ナルヲ知ルニ國ニシテ全ク出品セサルモノモ亦若干アリ予輩ノ特ニ合衆國ノ出品ナキヲ遺憾トス何ントオレハ若シ合衆國ヨリ出品シタラシニハ其陳列ニ著名ノ一場ヲ占領スヘキヲ以テナリ獨リ魯西亞ニ甚タ多ク出品セリ斯ノ如ク各區ニシテ一様ナラザル故ニ此等ノ國ニ於ケル製毛工業進歩ノ度下我國ニ於ケル其工業進歩ノ度下ヲ相比較スルオハ予輩ニ於テ極テ困難ナリトス未製毛類ノ審査ハ農業部ノ擔任ナルカ故ニ予輩之ヲ論スルヲ要セスト雖然レハ歐羅巴外ヨリ毛類ノ歐洲ニ輸入スルノ數年々増加スル實證ニキ官報書類中ニ示ス所ノ員數ヲ見レハ又默視ス可ラサル其以アルナリハ千八百七十七年ニハ千八百七十五年ニ比シテ千八百十年ニ方リ澳太利ヨリ英國ニ向テ輸出セシ未製毛ハ僅々七十五「キログラム」ナリシト雖レ千八百五十年ニハ一千七百七十壹萬四千二百七十三「キログラム」ヲ輸出シ千八百七十七年ニハ其輸出額ハ

更ニ壹億二千七百五十七萬六千四百七十五「キログラム」ノ多キニ上レリ（予輩ハ此三箇國ニ對シテ）我歐洲ノ市場ニ對シテ輸余澳太利ニ付キ言ヘル如ク歐洲外ノ毛類ノ我歐洲ニ市場ニ對シテ輸入スルヲ以テ之ヲ見レハ未製毛ノ產出ハ歐洲中ノ若干國ニ於テ少ク減少セリト云フモ不可ナキナリ但又毛類ノ總產額ハ目今現世紀之初ヨリ多キト大略三倍半ナリト云フハ太過ナカルトシ（予輩ハ抑精算ト信スルニ足ル）統計表ニ因レハ全地球上ニ牧養スル所ノ綿羊ノ總數ハ大略六千萬頭ナリトス（予輩ハ此ニ對シテ）左ニ掲ル表ハ毛類ノ產出スル所ノ重ナル國々ヨリ歐洲ニ輸入シタル額ノ一千八百六十七年ヨリ一千八百七十八年ニ至ルモノヲ示スナリ

年次	國名	澳太利	喜望峯	拉巴拉伦	合計
一千八百六十七年		四二六四一	二二八四一八	一九二九八九	七三四〇四八
一千八百六十八年		四九二二一八	一四一九一六	二三四九二六	八六八〇五〇

一千八百六十九年	四九九六一〇	一四四三四九	二四四三六九	八八八三二八
一千八百七十年	五四九二六四	一四五〇五〇	二二二三八六	九一五七〇〇
一千八百七十一年	五六七〇二三	一四八八〇六	二二二八〇七	九三七六二六
一千八百七十二年	五二二八七七	一五四八八四	二二七七四九	九一五五五〇
一千八百七十三年	六二五五九九四	一五〇〇三三	二六四二六四	九七六五八九
一千八百七十四年	六六五二五七六	一六四一九四	二四五八八三	一〇六一六五三
一千八百七十五年	六六九九六二〇	一七五五九五	二四七八五八	一一二三〇七三
一千八百七十六年	七七一二八二	一七〇九四一	二七二二二七	一二四三五〇
一千八百七十七年	八三三七八三	一六九九七四	二七七〇四九	一二七〇八〇六
一千八百七十八年	七九二一〇二	一五四三三六	二五六八七九	一二三二二九七
總計	七三三一九三〇	三八六八七四	三九二七七六	二二二七九三〇

此表ニ因テ之ヲ見レハ毛類ヲ歐洲ニ輸入シタル數量亦唯々此三箇國ニシテ(予輩ハ唯々此三箇國ヲ適例ニ引用シ他ノ印度、波斯、亞非利加等ハ算入セス)左ノ如シ

一千八百六十七年ニ在テハ總計七十三萬四千〇四十八細
 一千八百七十八年ニ在テハ總計百三十三萬二千九百九十七細トス
 然ルハ則チ一千八百六十七年以降ニ増加シ四十八萬八千四百四十九細
 ニシテ即チ百ニ付六十六、五ノ割合ナリ
 「アルバカ」稱及「モヘル」稱ノ羊毛及駱駝毛ノ輸入ニ於テモ其増加ノ比例
 ハ之ニ異ナラサルナリ然レモ佛國ノ稅關ニ於テハ此類ノ物品ハ單ニ
 獸毛ト稱シテ合算シ之ヲ官報書類中ニ示スル慣例ナルカ故ニ其佛國
 ニ輸入シタル數量ハ惣括シテ示スル外之ヲ細別スル能ハサルナリ
 野羊駱駝毛等ノ輸入ハ左ノ如シ
 一千八百七十六年 四十七萬三千細
 一千八百七十七年 七十萬一千九百二十一細
 一千八百七十八年 五十四萬九千二百細
 又英國ノ統計表ハ最モ明瞭ナリ下ス其輸入左ノ如シ
 ラマ稱アルバカ稱ヒゴ稱

ニ因レハ千八百七十八年ニ於ケル紡錘ノ數ハ左ノ如シ
 ノール州 百三十五萬本
 マルヌ州 十六萬本
 アルプンヌ州 十二萬五千本
 エトヌヌ州 十四萬本
 其他諸州 三十七萬五千本
 合計 二百三十七萬本
 アルサス州ノ紡錘ノ數ハ此合計中ニ含有セズ其數ハ一千八百六十七年ニ在テハ十萬本ニシテ現今ハ大略二十萬本ナリト云フ
 以上ノ數ハ以テシテ氏ノ報告書ニ掲クル所ナリ而シテ此二百二十七本ヲ紡錘ヲ以テシテ大略三千四百〇五萬キログラムニシテ製出スルキハトス
 又官報統計書ニ掲クル所ノ調査ニ因レハ梳製長毛及野羊毛ノ輸出ハ四百六十七萬五千五百キログラムニシテ

一千八百七十八年間ニ輸入スル百四十五萬四千四百四十七キログラムニシテ其故ニ輸出額ト輸入額トノ差ハ三百三十三萬一千〇六十三キログラムニシテ輸出毛絲ノ價ヲ一キログラムニ付キ十フラントスレバ其金額左ノ如シ
 三百二十三萬二千二百二十一萬〇六百三十三フランナリ
 佛國ニ止マル毛絲ノ量ハ左ノ如シ
 三千四百〇五萬キログラムニシテ百四十五萬四千四百四十七キログラムヲ加ヘ其内ヨリ四百六十七萬五千五百七十七キログラムヲ減スルカ故ニ残り
 二千九百三十七萬八千九百三十七キログラムトス
 此殘額ハ織物ニ製シタルモノニシテ製造屑ヲ百五分ノ割合トスレバ合計百五十四萬一千四百四十六キログラムニシテ差引二千九百二十八萬七千四百九十二キログラムノ毛布ハ一千八百七十八年間

ノ製産額ナリ而シテ當時ノ價ハ毛布一「キログラム」ニ付キ十五「フラン」
 八十五「フラン」ナリ而シテ下ニ百四十「フラン」ニ付キ二十「フラン」
 是故ニ我國現今ノ毛布年々ノ製産額ハ四億六千四百二十萬六千七百
 三十三「フラン」ナリ而シテ八千八百三十三「フラン」ニ付キ二十「フラン」
 又輸出額ハ輸入額ヲ差引キテ三千〇九十四萬八千五百六十一「フラン」
 トス而シテ短毛絲トスルモノハ製産額ヲ八億五千〇四十五萬九千三
 百「フラン」ニ付キ而シテ屑物ヲ六百二十五萬「フラン」ニ付キ而シテ我國毛絲製造工業
 總産額ハ五億六千四百〇七萬五千二百二十三「フラン」ニシテ内一億四
 千七百六十三萬二千三百三十四「フラン」ハ職工ノ賃銀ナリ云々以下略ス
 日本ノ出品人ハ十名ナリ而シテ其ノ中ニ三十三百二十一萬〇六
 百「フラン」ノ出品人ハ一人名ナリ而シテ其ノ出品額ハ三十三百二十一萬〇六
 百「フラン」ニ付キ而シテ組絲織及縫箔ニ關スルモノハ出品額ハ三十三百二十一萬〇六
 百「フラン」ニ付キ而シテ支那及日本ノ出品ハ其數甚々多シ物品亦美麗ニシテ燦爛ナル種
 ナキ織物ヲ陳列セリ實ニ重要ナル出品五萬圓ニ審査官ニ於テハ製造人

下商人トヲ分別シ易カラサルヲ以テ最初ハ之ニ褒賞ヲ與フルニ合同
 ノ賞狀ヲ以テセント欲セシト雖モ其國ノ委員ハ一人一箇ノ褒賞ヲ授
 與センコトヲ請願シタルニ因リ審査官ニ於テ銀牌ヲ與フルモノ左ノ如シ
 支那ノ部略スルニ
 日本ノ部略スルニ
 東京府下
 立工商會社
 西村總右衛門
 大橋彌兵衛
 加太八兵衛
 神奈川縣下
 結局略言ニ曰ク
 手製組絲ノ工業ハ二十年以來完全ノ極ニ達シ今ヤ其以上ニ超越スル
 能ハサルモノハ如シ然レモ其圖畫ニ至テハ尙ホ種々ノ方法ヲ施シテ
 人ノ嗜好ニ適セシメ其愛玩ヲ失ハサルヲ得ヘシ今回出品ノ如キ一モ

古法ノ旨趣ニ悖ラサルコトハ予輩ノ大ニ満足シテ證檢スル所ナリ是レ第十七世紀及第十八世紀ノ品物ヲ研究シ古代ニ於ケル組絲製造ノ秘蘊ヲ發開シ近世ノ時好ニ適セシメタルノ致ス所ナリトス
器械ヲ以テスル縫箔ノ平組絲織ノ製造ハ一千八百六十七年ノ萬國大博覽會以來著シク進步ヲナシタルナリ曾テ組絲織器械ニ漸次改良ヲ施セシヨリ其結果ハ甚タ良好ニシテ實ニ後來組絲織手製ノ廢棄ヲ憂ヘシムルモノアルナリ縫箔工業ニ於テモ亦同シク其機械ハ大ニ改良セリ二十年前ニハ指若クハ圓キ棒ヲ以テ縫箔ヲナシタルニ過キス曾テ歐洲ニ於テハ其工業ニ五十萬人以上ノ婦女ヲ使役シタルモノナレ
現今ニ至テハ其業ハ全ク縫箔機械ヲ以テスルニ變シ男子ノ衣服及女子ノ粧飾ニ供スル物品ヲ廉價ニ販賣スルノミナラス家内ノ粧飾ニ供スル物品モ亦多ク產出スト云フ種條目利安等ノ工業モ亦日々新奇ノ物品ヲ製出スルナリ抑此工業ニハ毫モ器械ヲ要セスシテ又時アリテハ頗ル利益ヲ得テ勞スルコト甚タ少シ其材料ニ供スル粗布類ノ製造

及色染ノ方法等ノ進步スル爲ニ種々ナル些末ノ事業新タニ創起シ之カ爲メニ婦女ノ業ヲ營ムヲ得ルモノ甚タ多シトス
又說ヲ終ルニ臨テ一言セサル可ラサルモノアリ曰ク此報告書ヲ製スルノ目的タル所ノ工業ノ景況ハ機械ノ使用ニ因テ大ニ變セリト雖モ手業ノ全ク廢棄ニ歸シタルニ非ス機械進步ノ著大ナルハ拍手喝採ヲ以テ之ヲ賞スヘキモ手業ノ隆盛ナルモ亦又予輩ノ竊カニ祈ル所ナリ何ントナレハ其手業ハ老少ノ婦女ニ貴重ナル營業ヲ與フルニアルモノナルニ因リ其婦女ハ窮困ニ陥ルノ苦ヲ免ルヘキヲ以テナリ

第三十七小區

衣裳屬品ノ部

被物ノ部ニ曰ク

日本支那及コシヤンシーヌノ三國ニ於テハ幾ト被物ヲ製造スルコトナク偶之アルモ極テ微々タリ此等ノ帝國ハ古代ヨリノ開化ニシテ或ル工業ニ於テハ甚タ進步スト雖モ目利安織ノ如キニ至テハ甚タ其利用

アルヲ知ラサルモノナリ歐洲ト間斷ナキ關係アルノ今日ニシテ其然
 ルニ幾ト信ス可ラサルノ一事アリ其出品ニ係ル足袋類ハ數百年前ニ
 我國ニ行ハレシモノニシテ羅紗ヲ裁テ以テ我國ノ衣服ヲ製スルカ如
 ク裁縫スル所ナリ抑佛國ノ被物ヲ日本ニ輸入シ又日本人ノ目利安編
 製臺ヲ購入セルハ唯々五六年以來ニ過キサルナリ云々

鈕扣ノ部總論ニ曰ク

鈕扣製造工業ノ重要ナルコトハ未タ人ノ徧ク知ラサル所ニシテ公衆ノ
 注目亦未タ甚ク至ラサルモノアルナリ是レ畢竟公衆ハ鈕扣商業ノ盛
 ナルカ爲ニ製造モ亦昌ニシテ内地貿易ト外國輸出ト大ニ行ハルコト
 思ハスルテ唯々鈕扣ノ價ニノミ注目スルニ因ルナリ

後段ニ至テ鈕扣製造ニ係ル工人製出額ノ員數ヲ示スヘシト雖モ爰ニ
 ハ鈕扣需用ノ夥シキコト之ヲ製スル材料ノ多クナルコト、製造ノ方法種々
 ナルコト、時好ニ從テ其模形ヲ變スルコト等ヲ數件ヲ示シ其工業ハ經濟學
 者ノ最モ注意シテ常ニ講究スル所ノ工業中ノ一ナルコトヲ知ラシメ以

テ世人ノ疑惑ヲ冰解セシメントス

夫レ鈕扣製造工業ハ全ク近代ノモノニシテ其世ニ出ルノ遲緩ナリシ
 ハ蓋シ是レ鈕扣ヲ要セサル所ノ大ナル衣服ヲ用フルノ風習尙ホ存シ
 テ其需用ノ一般ニ涉ラサルニ原因スルモノナリ

鈕扣ノ衣服ニ於ケル一日モ無ル可ラサル所ノ附屬品ナリト雖モ然レ
 モ其需用ノ治子カラサル所以ハ是レ古代ニ在テ一般ニ翻々タル大衣
 ヲ着クルノ風習常ニ存シテ今日ニ至リ古來ノ遺傳習慣ヲ守ル所ノ國
 ニ於テハ大衣ヲ着ルノ風俗今尙ホ依然トシテ存シ又土地ノ氣候ニ因
 リ衣服ノ風ヲ改メサル國モ亦之アルニ因ルナリ

又古代ニ在テ用ヒタルモノハ今ノ鈕扣ト稍相似タルモノニシテ眞ニ
 鈕扣ト稱スヘキモノハ第十六世紀ニ至テ始メテ世ニ盛ニ行ハレ曾テ
 衣服ノ止メニ用ヒタル紐、帶、鈞等ハ漸次ニ廢セラレタルナリ蓋シ古代
 ニ在テ衣服ニ用ヒシ所ノ紐、帶、鈞等ノ製造ハ眞ノ工業ト云ヘキ盛大ノ
 モノニアラスシテ金銀寶石ヲ用ヒ手ニテ製シ又ハ絹布及天鵝絨ニ縫

箔シタルモノニシテ到底小間物商爲セル職業ノ一部ニ過キサリキ
 歐洲ノ或ル國及亞米利加亞細亞ニ於テ鈕扣ヲ用ヒタルハ禮衣ノ粧飾
 トシタルニ始マリ而シテ今日ニ至レバナリ之ヲ製スルニ金銀ノ貨幣
 ヲ以テスルモノモ亦之アリキ又其禮衣ハ僻遠ノ地ニ於テハ今日尙ホ
 存スルヲ見ルナリ
 古代ノ粧飾鈕扣ヲ用フルヲ漸ク一般ノ俗ヲ出スニ至レルヲ以テ其製
 造ハ從テ重要トナレリト雖モ寶玉工寶石工縫箔師等ノ附屬工業タリ
 シニ過キス故ニ斯ノ如キ時代ニ在テハ鈕扣工業ト稱スヘキモノハ未
 タ之アラサルナリ抑鈕扣工業ト稱スヘキモノハ始メテ英國ニ於テ大
 工場ヲ設立シタルノ時ヨリ起リ英國ハ久シク其製造ヲ專有セリ後年
 我國ニ於テ競争心ヲ發生セシ時ニ方リ鈕扣工業ヲ我國ニ盛ニセンコ
 ヲ欲セシト雖モ英國ノ職工ヲシテ我國ニ來ラシムルニ非レハ其盛大
 ハ得テ期ス可ラサル所ナリキ既ニシテ英國ノ工場ニ拮抗スヘキ一大
 工場ノ設立アリ加之一千八百三十七年ヨリ一千八百六十七年ニ至ル

ノ間他ノ工場モ亦相次テ設立シタルカ故ニ其工業ノ擴張ハ頗ル著シ
 カリキ又鈕扣底板ノ切斷及其形附ニ器械ヲ以テシ蠟附ニ瓦斯ヲ用ヒ
 染ルニ藥劑ヲ用ヒ金滅金、銀滅金ニツケル滅金ニ「ガルバニ」電氣法ヲ用
 ルニ至ルニ及シテ產出ノ方法ハ十倍シ從テ鈕扣工業愈我國ニ行ハレ
 巴理ノ如キハ最モ盛ヲ極ルニ至レバナリ
 又英國ハ最モ鑛品ニ富ムノ國ニシテ近代ノ工業ハ皆其源ヲ英國ニ發
 シタルモノナリ曾テ全世界扣鈕ノ需用ハ皆英國ノ供出セシ所ナリト
 雖モ今日ニ至テハ鈕扣ノ需用ヲ佛國ニ仰クト云フ
 獨逸ノ如キハ曾テ其鈕扣工業ノ隆盛ヲ求ムルニ種々ノ方法ヲ以テセ
 シト雖モ既ニシテ我國ノ模範ニ倣ヒ廉價ヲ以テ鈕扣ヲ產出スルニ至
 レリ是レ其工業ノ一種特異ノ性質ニシテ即チ其著ク擴張セシ所以ナ
 リ
 澳地利モ亦鈕扣ノ工業盛ニシテ五六年以來ハ特ニ著シク擴張セリ而
 シテ青貝製及硝子製ノ品物ヲ多ク輸出ス

伊太利ハ尋常品ヲ輸出スルノミ又其他ノ諸國ハ鈕扣ヲ産出スルモ内地ノ需用ニ供スルニ過キス而シテ禁令ヲ設ケテ外國産ノ輸入ヲ防遏ス

製造現況

材料 鈕扣製造ノ工業ハ其産出ノ爲ニ種々ノ物品ヲ利用スルニ至レリ 鑛物植物動物皆其材料ヲサルモノハナシ

鑛物ニ在テハ金、銀、銅、鐵、ニツケル、礬土、亞鉛等其他硝子及磁器ノ製造ニ用フル物品

植物ニ在テハ堅質ノ木類

動物ニ在テハ骨、象牙、革、毛、青貝其他介類トス

又絹布、毛布、絹毛、交織布、綿布等モ其工業ニ用フル所ナリ

職工統計及給料

鈕扣製造ノ事業中ニハ甚タ簡易ナルモノアルカ故ニ長キ年月ヲ習職ヲ要セスシテ婦女幼兒ヲ用フルヲ得ルナリ又田舎ニ在ル所ノ職工ノ

如キハ之ニ因テ日ヲ空フセスト云フ罪人ニモ亦タ其業ヲ取ラシムト雖モ唯ニ粗製ノ物ヲ作ラシムルノミ

今ヤ鈕扣工業ハ大ニ佛國ニ擴マレルヲ以テ現今其業ニ従事スル職工ノ數ハ得テ精密ニ知ル可ラズト雖モ大略三萬人ト認ルヲ得ヘシ其内男ヲ壹萬人トシ女ヲ壹萬五千人トシ童兒ヲ五千八トス

給料ハ一千八百六十七年以來漸次騰貴シ巴理ニ於テハ現今左ノ如シ

男 四「フラン」五十「サンチム」ヨリ八「フラン」ニ至ル

女 二「フラン」五十「サンチム」ヨリ三「フラン」七十五「サンチム」ニ至

童兒 一「フラン」ヨリ二「フラン」ニ至ル

男女及童兒ニ因リ其給料ノ甚タ異ナルハ亦以テ良工ヲ要スルノ大ナルヲ見ルヘシ且ツ日給ハ日ニ廢セラレ時間ニ因テ給料ヲ與フルカ或散工法ヲ以テスルヲ盛ニ行ハルハ是レ時間ニ因ルノ給料ト散工法トハ良工ノ希望スル所ナレハナリ

産出統計

佛國ニ於ケル鈕扣ノ産額ハ近來著シク増加セリ下段ニ掲グル所ノ員數及説明ニ因レハ我國工業中ニハ鈕扣製造ノ大部ヲ占ムルコトヲ證スヘシ貿易條約ヲ締盟セシヨリ輸入ノ増加セリトハ甚タ大ナリト雖モ輸出モ亦非常ニ擴張セリ

確實ナル報道ニ因レハ佛國ニ於テ鈕扣製造ノ全額ハ一千八百三十年ニハ二百萬「フラン」ニ越ヘサリシカ今ヤ五千萬「フラン」以上ニ上レリト云フ

工業及商業ノ擴充スルニ從テ銀價ノ低落セシコトヲ知ラハ其進歩セルノ狀ヲ解スヘシ

一千八百六十七年以來ノ輸出入額ハ左ノ如シ但内地ノ消耗額ハ算入セス(鈕扣工業ノ盛大ニ趣キシハ此年以降ナリ)

年次	輸入	輸出
一千八百六十七年	七七五〇〇〇	七〇〇〇〇〇

一千八百六十八年	一〇三〇〇〇	八五〇〇〇
一千八百六十九年	一二〇〇〇	一〇〇〇〇
一千八百七十年	官ノ調査ナシ	
一千八百七十一年	六二〇〇	一三五〇〇
一千八百七十二年	一五〇〇	一五三〇〇
一千八百七十三年	二一〇〇	一六二〇〇
一千八百七十四年	三八〇〇	二一三〇〇
一千八百七十五年	三七〇〇	二四一〇〇
一千八百七十六年	二五〇〇	二九六〇〇
一千八百七十七年	二六〇〇	二六五〇〇

此輸出入額ニ其三分一ヲ加フレハ精密ニ員數ヲ得タルモノトスルヲ得ヘシ是レ商人ハ員數ノ申報ヲナスニ員數ヨリ以下ノ數ヲ以テスルヲ利益アリトスレハナリ

此十一年間ニ我國輸出額ノ漸四倍シテ七百萬「フラン」ヨリ二千六百五

十萬「フラン」ニ至レルコトヲ見レハ鈕扣工業ノ重要ナルコトヲ解スルニ若シマサルヘシ
 抑又既ニ詳ニ證明セル所ノ増加ノ進歩ハ一千八百六十七年ノ博覽會ニ出品セル佛國人員トヲ比較スルモ亦知ルヲ得ヘキナリ
 蓋シ一千八百六十七年ノ博覽會ニ出品セルモノハ僅々十七名ナレモ
 今回ノ博覽會ニハ五十三名アリトス然リ而シテ或ル大家中ニ尙ホ出品セサルモノアルハ予輩ノ甚々遺憾トスル所ナリ云々之ヨリ各國ノ出品ヲ論シ其結文ニ曰ク
 概言セハ鈕扣ノ製造ハ近來諸國ニ於テ盛ナリト雖モ佛國都府ノ中特ニ巴理ハ萬國ニ於テ消耗スル所ノ鈕扣類ノ大市場タリ抑巴理製品ノ上等ナルコトハ陳列セル物品ト又外國製造家ノ其製品ヲ比較セラレンヲ恐レテ出品セサリシトニ因テ見ルヘキナリ
 是レ予輩一家ノ私言ニアラス且請フ一言スルヲ許セ夫レ我國製品ノ

上等トシテ萬國ニ稱セラレ勝ヲ天下ニ制シタルハ外國製造主ノ自ラ賜フ所ナリ

抑外國ニ於テ製造スル鈕扣中六分ノ五ハ其箱ニ(巴理新形)新巴理(新佛蘭西)巴理製鈕扣ノ商標アルナリ

佛國ト條約ヲ締盟セル各國ノ政府ニ於テ各其國ノ工業及商業ニ從事スルモノヲシテ製産國ノ言語ヲ以テ記セル商標ニ非ラサレハ貼付スベカラサルヲ命令セシコトハ德義上予輩ノ願フ所ナリ

此事ヲシテ萬國公法上ノ問題タラシムルヲ以テ過重ナリトセハ佛國ニ於テハ唯タ英國ノ良例ニ倣フヘキアルノミ

抑英國ノ法律ニ因レハ商標ニ購者ヲ欺クヘキ記號若クハ他國ノ物品ヲ英國製ト認メシムヘキ記號アル時ハ英國ニ來着スヘキモノノミチラス英國ヲ通過スヘキ物品ト雖モ亦押管スルヲ得ルノ制規タリ
 佛國製ノ商標ヲ付シタル外國製ノ物品ハ其輸入ヲ杜絶スルカ若クハ之ヲ沒收スルコトヲシテ英國ノ如クナラシムルノ許可ヲ佛國稅關ニ與

ヘンコハ予輩ノ願フ所ナリ
 杖鞭ノ部總論中ニ曰ク印度支那及日本ヨリモ竹籐等ヲ産出ス其價ハ
 未製品百本ニ付キ十「フラン」ヨリ百「フラン」ノ間ニアリト云フ抑杖ニハ
 木ヲ用フルヲ得レモ鞭ニハ籐鋼鯨鬚革ヲ用ルヲ善トス是レ其鞭ノ真
 トナルモノニシテ又之ニ木綿絹絲等ヲ卷キ付クヘシ
 一千八百七十六年以來ハ鯨鬚ノ價漸々騰貴シタルヨリ鞭ノ製造ニ一
 大變動ヲ生シ爲スニ販路ハ著ク閉塞セリ
 其製造ニ使役スル職工ノ數ハ男女童兒ヲ合セテ一千二百人ト算定ス
 ルヲ得ヘシ日給ハ日ニ十一時間ノ就業ニシテ男子ハ二「フラン」五十「サ
 ンチム」ヨリ七「フラン」ノ間トシ女子ハ二「フラン」五十「サンチム」ヨリ
 三「フラン」五十「サンチム」ノ間トス
 年々ノ産出額ハ大略五百萬「フラン」ニシテ皆各國ニ向テ輸出スルモノ
 ナリ
 佛國及外國ノ出品ヲ評スル未文ニ曰ク

今ヤ言ヲ終ルニ臨テ十分ノ風趣アリ加フルニ特異ノ原質ヲ備ヘタル
 杖ヲ送致セル所ノ日本ノ出品ハ三名ニ敬禮セサル可ラサルナリ
 夫レ日本人ガ歐洲ノ倉庫ニ五六年以來充ツル所ノ種々ノ物品ヲ製造
 スルニ於テ工夫ニ富ムコトハ世人ノ徧ク知ル所ナリ
 日本區中ニ其國製造家ノ一大榮譽タルヘキ美麗ノ杖アルヲ見タリ其
 販路ノ幾日ナラスシテ擴張スヘキハ敢テ驚ク所ニアラサルナリ
 扇ノ部ニ曰ク

景色若クハ人形繪ヲ畫ケル紙ヲ用ヒ自然竹若クハ漆汁ヲ塗抹セル竹
 ヲ以テ製シタル支那及日本扇類ノ最モ大ナル効用ハ其價ノ廉ナルニ
 アリ其漆ハ平滑ニシテ堅固ナレモ其價ノ極テ廉ニシテ其細工ノ大ニ
 宜シキハ佛國尋常扇ノ未タ及ハサル所ナリ尙ホ一言スヘシ其用紙ニ
 襪襪ヲ取ルノ細工ノ如キハ最モ普通ノ品ト雖モ甚タ精巧ナリトス
 日本人ニシテ扇ヲ出品セルモノハ僅々四名アルノミ
 其四名中京都府下ノ二人ハ銅牌ヲ得タリ其出品ハ特ニ廉價ノモノニ

シテ細工モ亦甚ク宜シ他ノ二家ノ中一ハ「ラマカナ」神奈川ノ誤植ナラ
 (シ)カキノ一ハ「シズモ」静岡ノ誤植ナラシノモツニシテ並ニ頁製ノ物
 品ヲ陳列セリ
 譯者曰ク日本出品目錄ト原文トヲ参照スルニ甚シキ誤謬アルカ如
 シ然レモ暫ク原文ニ從テ譯セリ
 日本ト亞墨利加合衆國トノ扇貿易ハ其荷箱ノ數千ヲ以テ數フヘキナ
 リ然リ而シテ其扇ノ廉價ナル爲ニ紐育ニ於テハ我國製産ノ尋常扇ヲ
 壓倒シ今以テ時ニ當テハ我佛國製扇ノ買買ハ幾ト皆無ナリトス
 日本ノ製造ニハ支那ノ製造ト同ク稱賛ノ語ヲ呈スヘシト雖モ然レモ
 予輩ハ支那日本ハ共ニ其扇ノ製法ヲ種々ニ爲スコヲ知ラサルモソト
 檢定セサルヲ得ス夫レ佛國製ニ係ル扇ノ亞墨利加市場ニ於テ尙ホ上
 等ヲ占ムルハ唯々此一點ニアルナリ
 又結局略言ニ西班牙、伊太利、澳地利ヲ論シ亞墨利加ヨリ日本ニ論シ移
 ルシ文ニ曰ク

亞墨利加モ亦薄布ヲ用ヒテ木製ノ尋常扇ヲ製作スルコヲ始メタリ
 而シテ又關稅ヲ設ケテ以テ外國ノ製産ニ課スルニ雖モ其製造ハ木製
 扇骨ノ外進歩セサルカ故ニ遂ニ佛國ノ大ナル製造家ノ競争ニ勝ヲ制
 スルコト能ハスシテ止ミタリキ
 然レモ又亞墨利加ノ競争ハ我國ノ製造家ニ於テ慢ル可ラサルモノア
 ルナリ其競争盛ナルノ日ニ至テハ自家ノ利害ト佛國ノ利害ニ關スヘ
 キカ故ニ我國製造家ハ勇ヲ鼓シテ之ニ敵スルノ準備ヲ爲サハル可ラ
 ス
 此點ニ關シテハ我國製造家ノ熱心ニ依頼スルノ望アリト雖モ尙ホ他
 ニ一ノ競争スヘキモノアリ蓋シ勝ヲ制スルノ望ヲ屬スルモ到底無益
 ナルヘシ抑佛國ハ工銀ノ貴キカ爲ニ扇ノ價ニ於テハ支那及特ニ日本
 ト戰フコト能ハサルナリ
 支那及日本ニ於テハ手業ノ工價最モ廉ナルカ故ニ斯ノ如ク夫レ頁製
 ナル扇ヲ製出スルヲ得ルモノニシテ巴理ニ於テハ其扇ノ價一個十五

「サンチ」若クハ「二十」サンチトシノ賣買タリ、日本ヨリ紐育ニ於ケル輸入ノ擴張セルコヲ示シ、爲ニ一ケ年以來其額ハ六千箱ノ夥キニ上レルコヲ一言スヘシ。蓋シ扇ノ價ヲ以テハ支那日本ト競争シ得ルカヲサレ、雖モ我國ノ製造品ニ新形ヲ作り風趣ヲ備テ以テ勝ヲ制スルコトハ爲サズ、然レ可ラサル所ナリ。是故ニ此工業ニ係ル製造家ノ其使役スル所ノ職工ヲ獎勵シ之ヲシテ職工學校及特ニ畫學校ニ通學セシメンコトハ切ニ予輩ノ冀フ所ナリ。巴理ニ於テハ技術教育ノ初等ヲ受ル處ニ乏シカラズ、雖モ再ヲア、其州ニ於テハ職工ノ通學スヘキ畫學校及彫刻學校ハ並ニ之ヲラサルナリ。惜マサル可シヤ此州ノ製造家及邑廳ハ早ク爰ニ見ル所アラサル可ラズ。又工藝ヲ工業ニ相交ヘ技術學ヲ尙ホ、層深ク研究セシメ學才ヲ以テ獎勵シテ外國ニ競争ニ目ヲ注留セ、忍耐力勇氣トヲ以テ之ニ

抗セシムルヲ要スルナリ。我國製扇工業ノ盛衰ハ、斯ク如クニ激烈ナル工業ノ競争アル時ニ當テ、生ヲ營ムニ祖先ノ遺傳ヲ守テ未ダ足レリト爲ス可ラズ、又唯テ進步スルモ尙ホ未ダ足レリトス可ラズ、進步ノ路ニ在テハ挺身シテ他ノ競争者ニ先進スルヲ要スレハナリ。第三十九小區、金玉寶石器品ノ部、別ニ品評ナクシテ唯タ曰ク日本及支那ハ今回博覽會ニ於テ他區ニ出品セルコトハ甚タ多シト雖モ此小區ニハ何等モ出品セザルカ故ニ論スヘキモノアラサルナリトス。總論中工業ノ景況ト題セル目ノ部ニ曰ク今回博覽會ニ於テハ金玉寶石器具ノ出品ハ佛國ノ右ニ出ルモノアラサルナリ、特別褒賞ヲ得タルモノ三名ニシテ金牌ヲ得タルモノハ三分ノ二以上ニ居レリ。

外國製造家中ニハ其出品セルモノ甚々多カラサルカ故ニ工業ノ改良
進歩セシヤ否ヲ檢定ス可ラス然レモ十年以來佛國ニ於ケル其進歩ハ
顯明ニシテ此點ニ關スル我國製造家ノ勉勵ハ實ニ未タ曾テ有ラサル
所ナリ縱覽人ノ常ニ充滿シテ立錫ノ地ナキモノハ佛蘭西ノ出品區ヨ
リ他ニオーストリス是レ總額四千七百萬フランニ上ル所ノ物品ヲ蒐集
セル爲メノミニオーストリス尙ホ且ツ其物品ニハ風趣アリ新發明スル圖書
精妙ニシテ施工宜キヲ得タルノ致ス所ナリ然而シテ其製造ハ概テ手
業ニ屬スルカ故ニ其使用器具ニ至テハ尙ホ改良スベキモノアリ總テ
職工ノ巧智ト否トニ關スルモノトス
外國人ハ汲々トシテ職工及藝工ノ教育ヲ度テ高クセン所欲スルナリ
工業學校工業博物館ヲ設立セシヨリ以來其進歩ハ著シキモノアリト
ス今ヤ各國ニ於テ萬國博覽會ヲ開設スルヲ頻リナルカ故ニ外國ハ佛
國ニ超越セザルヲ戒テモ其追及セシヨリニ戒心セズンハアル可キ佛國
ノ久シク工業世界ニ立テ上位ヲ占ムルヲ得タルハ唯々其工人ノ作業

ヲ愛スルト發明ノ精心アルトニ因ルナル人シト雖モ然レモ萬國博覽
會開設ノ舉アル毎ニ外國人ハ佛國ノ模形及方法ヲ參考トシテ取捨
ルカ故ニ新工夫ノモノヲ製出スルニ怠ラサントハ我國製造家ニ要
スルカハ其
抑萬國大競争會即チ博覽會ハ貴重ナル獎勵法タルノ外尙ホ各國ヲシ
テ製作ノ改良及其難キヨリ易キニ至レル所以ヲ講究スルノ方法ヲ有
セシム且ツ博物場ヲ如キハ製造家及藝工ニ裨益ヲ與フルヲ甚々多シ
ク製造家藝工ハ一ニ模寫スルヲホクシテ古代ノ模形ニ遵據スルキ
ノミナラス各其國固有ノ特質ヲ損失セサランヲ要スヘシ是レ其國
固有ノ特質ナキ時ハ自己ノ製造品ハ普通一様ノモノタルヘキヲ以テ
ナリ今回ノ博覽會ニ於テモ外國製造ノ金玉寶石器品中ニ其弊アルハ
往々見タル所ナリ

第四十一小區
旅行用器品之部

旅行用器昂製造工業之成立ハ唯々鐵道ノ築造以來ニアルコト一言セ
 サル可列ス其築造アル前ニハ人民ノ移轉甚々稀ニシテ從テ旅人ノ數
 亦僅少ナリ更シカ故ニ旅行用器昂製造ノ工業ヲシテ未タ盛ナルノ域
 ニ至ラズ又新發明而シテ又馬止用革囊ヲ製造スルハ製鞍師ニ托シ
 板製荷箱ヲ製作スルニ木工ニ囑シテ以テ當時ノ需用ニ充テタルハ
 旅行用器昂製造ハ佛國巴黎ノ一種ナル工業ニシテ實ニ此地ヲ以テ
 其製造之中心トス佛國製造他國ヲ攬ル所以然ニ及今日旅人ノ日
 益無少ル可キ所ノ革櫃ニシテ旅行中荷物無益ノ重量ヲ減殺スル
 亦爲極極輕便製ス其因ルカガリハ我國製造家ノ極力ニシテ
 抑我國製造家ノ極テ輕ク之ヲ製スルノ所以ハ是レ我國運送會社ノ定
 款ニ僅少ノ重量ニアラザルハ貨銀ヲ免セサルノ制規也其因ニ及
 是因故ニ形体及用品ノ如何ニ拘ハラス袋夫ニシテ堅固車馬美
 麗製シテ重量ヲ減スルコトハ實製製造家ノ汲々トシテ務ムル所也

外國過半ノ製造家ハ其困難ニ遭遇セズ而シテ英國ノ如キハ運送會社
 ノ荷物運賃ヲ免スルハ佛國ニ比スレバ三倍若クハ三倍ニシテ又旅人
 又遇スル極極輕便荷物重量ヲ秤ルハ甚々稀ナリ故ニ製造家ハ無
 用ノ重量ヲ掛念ナク唯々一事ヲ憂フハキアルコト一事トハ何ソ曰ク
 堅固ニ製シテ運送中動搖ニ堪ヘシムルコト是レナリ其材料ヲ撰ハハ則チ甚々易
 ナリ其小ス之ヲ主トシテ製造スル所ノ物品ハ英國加拿他伊太利合衆
 國等ハ出品ニ見ハルモノハ價ナリ價ノ貴賤時々購フモノ少ナシ
 重量ノ問題ト相離レサルモノハ價ナリ價ノ貴賤時々購フモノ少ナシ
 英國ニ於テ製スル所ノ粧飾モノヲ附屬品モオキ馬止用革囊ノ價ハ我
 國ニ於ケル奢侈品物ノ價ニ伯仲ス亦以テ其製造ニ注意ノ至レルト如
 何スルモ破損セサルノ堅固トヲ知ルヘキナリ
 外國論ハ部日本ニシテ陳列セル物品ハ敢テ利用アルモノト見
 日本ヨリ旅行用器昂トシテ陳列セル物品ハ敢テ利用アルモノト見

ハサルナ其價ハ甚ク貴クシテ寧ロ奇ヲ好ミ新ヲ競フカ爲ニ製作セ
ル物品中ニ列スヘキモノナルヘシ

第四十三小區
玩具類總論
今回ノ博覽會ヲシテ商業及工業ノ年表中高等ノ位置ヲ
占有セシメタル原因ノ數多アル中ニ就テ多年來重要トナレルモツ、
次ニ於テ其工業ノ擴張セルニ因リ公衆ノ裨益タルヘキ製産物ヲ論セ
サル可ラス

夫レ玩具類製造ノ工業ハ其一居ルモノナリ其工業タルニ千八百七
十八年前ニハ未ダ著ク擴張セザリシト雖此年始テ博覽會ニ一場
ヲ占メ佛國ノ出品人ハ二十三名アリキ一千八百七十八年ニ於テ其
出品人員百三十四名ニ及ビ亦以テ其製造業ノ十年以來盛大ナリ
ヲ見ルヘシ此區ニ出品セル工業家ハ縱覽人ノ目ヲ喜ハシムル爲メ其
注意ヲ惹ク爲メニ其意ヲ用ルニ至ラサルハ大ニ

抑區域ニ狹少ナルカ爲メ一般玩具リ來歴ヲ爰ニ説ク可能ハサルヲ
以テ唯ダ其玩具ノ起源ハ太古ニアルニテ幼兒ノ身体能力及道德能力
ヲ發達スルニ其利用アルヲハ古來世人ノ認知スル所ナルコトヲ言テ
止レトモ蓋シ玩具ニ數多ク改良アリシコトハ疑ヲ容レサルナリ是レ玩
具ノ性質タル素ト新工夫ヲ施スヘキモノナルカ故ニ工藝ノ隆盛ナル
ニ從テ新奇ノモノ出テ漸ク改良セシテ其進歩ノ結果ハ即チ古代
ノ玩具ニ於ケル如キ粗野ヲ製作ヲ廢シタルヲ以テ之ヲ見ルニ當リ
近代玩具製法ノ最も著シキ所ハ其形体及着色並ニ模形トスル所ノ物
品ニ其形ヲ模寫スルニ傾向アルト是レ亦此傾向ナルカ爲ニ曾テ多
年之間存セザリシ所ノ裨益タルヘキ性質ヲ玩具ニ備フルニ至レリ今
テ玩具ハ幼兒教育ノ愉快ナル補助物トナリテ大發明ノ物件及日々ノ
新事ヲ民間ニ廣布スルニ適當ナルモノトナレリ是レ後來其製造ノ益
擴張スル所以ナルヘシ

外國部ノ論ニ曰ク支那及日本モ亦テ裨益アル物品ヲ陳列セリ云々

佛國ニ於テハ玩具類製造額ハ合計一千八百十五萬五千五百「フラン」ニシテ其内佛國ノ需用ニ供スルモノヲ一千百十九萬一千「フラン」トシ輸出ニ供スルモノヲ六百九十六萬四千五百「フラン」トス又製造主ハ五百五十名職工ハ男女ヲ合セテ五千八百四十五人ナリ

日本出品ハ評ニ曰ク其内三名ハ本區ニ屬セス又他出品目錄ニハ日本出品人八名トアレド其内三名ハ本區ニ屬セス又他出品一名ハ出品セザリキ悉ク者曰ク日本原出品ハ少ク誤認アルカ如シテ木製神樂面ハ甚ク好ク製作セルモノモ亦見ヘズ然レド其價甚ク貴キガ故ニ其販路ハ廣マラズルベシ

東京ニ在テ盛大ニ製造スル所ノ或ル製造家ハ紙製偶人ノ摸形ヲ出品セリ其細工ハ十分ニシテ衣裳ハ最モ美ナリトス然レド其價ハ予輩ヨリ之ヲ見レハ甚ク貴キモノハ如シ

其製造家ハ予輩ニ告テ曰ク之ヨリ最モ裨益アル物品ヲ製作スルハ其物品ハ今回ノ博覽會ニ出品セサルカ故ニ予輩之ヲ檢證スルコ

ヲ得サルナリ

他ノ出品人三名ハ磁石鐵ヲ附ケタル魚類小犬及其他些末ノ物品ヲ陳列セリ

第五大區

第四十三小區

鑛山採掘及冶金術ニ係ル產品ノ部

本報告書ニ於テハ有要ナル種々ノ鑛品及鑛石ヲ檢査スルニ其順序ヲ立テタルヲ左ノ如シ

第一 石炭類

第二 燃土及鑛油

第三 常用金屬

第四 貴寶金屬

第五 金屬ニ「ガルバニ」電氣ノ應用

第六 化學工業ニ用フル鑛品

第七 粧飾鑛品
 第八 諸種鑛品
 第九 一般之蒐集品
 第一 石炭類

今回ノ博覽會ニ出品セル諸國所陳列ハ其國ノ石炭類ニ富ムノ比例ヲ以テセハ甚ク不同ナリ。如キ國ニ於テハ重要ナル鑛山ニ從事スル者ヨリ地圖鑛層ノ形狀ヲ示スヘキ平面圖斷面圖及鑛業擴張次說明書ヲ添ス。其採掘品ヲ完備セル標本ヲ送致セリト雖其其他國ハ二三箇以石炭塊ヲ送レルヲミシテ鑛脈ノ大小及採鑛事業ヲ說明ス。採鑛書類ヲ如キハ一モ出タサ、ルナリ抑石炭ハ博覽會ニ出品スル甚ク不便ナルモノ、一ナルコトハ思ハサル可ラス夫レ工業ノ進歩ヲ判然見ルヲ得ヘキ所ノ金屬ハ暫ク措テ論セサレトモ鑛品ノ唯タ一片塊以其性質其純粹ニ因テ人ニ裨益ヲ與ス。其外他參照スルモノナキモ諸國產ノ鑛物ヲ相比較セハ常ニ利益ヲ得ヘキコトハ確

乎。蓋シ石炭ハ唯タ片塊ヲ以テハ能ク練熟セル人ト雖其良否ヲ檢定スルコト能ハサルモノトス然ルカ故ニ必ス知ルヲ要スル所ノモノハ鑛坑總体ノ景況鑛脈ノ形狀及大小出產額ノ多寡ナリトス。此重要ナル部分ニ應セサリシト雖其幸ニシテシヨトシテ得タ其著書ハ澳地利區ニ出品セルモノニシテ題シテ世界萬國石炭及鐵詳説ト云フ銀牌ヲ以テ其功勞ヲ褒賞セリ。一六〇〇其著書ニ因レハ全地球上石炭ノ產出額ハ一千八百七十六年ニ於テハ二億八千八百萬噸ニ上レリ英國ノミニシテ幾ト其半ヲ產出セリト云フ合此噸數ヲ各國ニ割レハ左ノ如シ

國名 噸數
 一三三六二噸數六
 大英國 一三五六一一七八八
 獨逸及盧森堡 四九五五〇四六三

佛蘭西	一七二〇	四七九四
白耳義	一三四三	二九五七
澳地利匈牙利	一三三六	二五八六
魯西亞	一八二四	八六八
瑞典	九三三	五二
西班牙	六八一	四
伊太利	一〇一六	四〇
其他歐洲諸國	六〇〇	〇
亞墨利加合衆國	四八二	七三四
加拿大	七〇	九六四
其他亞墨利加諸國	四〇〇	〇
支那	三九六	五〇
日本	三九六	五〇
其他亞細亞諸國	一一〇	〇

亞非利加諸國 一八八〇 一三三〇
 澳太利 一八八〇 一三三〇
 合計 二八八〇 六八九七五

此噸數ヲ下ズレハ氏ノ編纂ニ係ル一千八百六十七年ノ報告書中ニ示ス所ノ噸數ニ比スレハ十年間或ハ十二年間ニ石炭採掘量ノ増加セシメ下其工業ノ擴張セルコトヲ見ルヘシ英國及白耳義ノ如キハ其產出額ハ七ヨリ九ニ至ルノ比例ヲ以テ増加シ合衆國ノ如キハ一ヨリ三ニ至ルノ比例ニ因テ増加スルモノニシテ魯西亞ハ其比例尙ホ大ナリト云フ

亞細亞ノ部 日本

日本ニ於テハ其產出額極テ著シカラスト雖モ然レモ重要ナル石炭鑛ヲ有シ採掘スルモノノ百八十六所トス工部省鑛山局ヨリ出品セル蒐集品中ニハ石炭及燃鑛ノ標本數多アリキ其他鑛山採掘ニ從事スル所ノ後藤氏ヨリ長崎高島石炭鑛山ノ產出品ヲ陳列セリ其石炭鑛山ハ年々

一萬五千噸ノ石炭ヲ出サスト云又出產ノ額ニ對シテ其價値ハ
 第三ニ燃土及鑛油ニ對シテ其價値ハ其額ノ半ニ出產スル
 抑出品ノ景況ハ第一ニ端緒ヲ説ケル如ク其價値ハ其額ノ半ニ出產スル
 支那ニ在テハ天津ノ稅關ヨリ出品セル石炭油アルコノ外言フコヲ得
 日本ニ於テハ凡ソ六十箇所ノ鑛坑ニ於テ鑛油ヲ產出ス一千八百七十
 五年ニ於テ石油ノ產額一萬〇三百五十ヘク其後其額ハ其額ノ半ニ出產ス
 第三ニ常用金屬ノ產額ハ其額ノ半ニ出產ス一千八百七十五年
 亞細亞ノ部 鉛
 日本ニ於テハ一千八百七十五年ニ百八十八噸ノ鉛ヲ產出セリ其價ハ
 十萬九千七百八「フラン」トス佐藤氏ナルモノ硫化鉛鑛ヲ出品セリ日譯者

日本ニ出產スル鑛物ノ原産地ニ對シテ其價値ハ其額ノ半ニ出產スル
 銅 日本ノ部 鑛山甚多シ工部省鑛山局ヨリハ其美麗ナル標本ヲ出
 品セリ其價値ハ其額ノ半ニ出產スル
 其產出額ハ一千八百七十五年ニ於テハ三千〇四十八噸ト云フ即
 チ四百六十四萬四千「フラン」ノ價値ニ對シテ其價値ハ其額ノ半ニ出產スル
 錫 日本ノ部
 日本ニハ錫ノ鑛山三所アリテ一千八百七十五年ニハ七千五百「キログ
 ラム」ヲ產出セリ此物品ハ鑛山局ノ蒐集品中ニ見ヘタルカ故ニ唯々
 爰ニ記スルニ止ルノミ
 水銀 日本ノ部
 鑛山局ヨリ出品セル標本ニ因シテハ水銀亦日本ニ在ル所ノモノナリ
 然レ其盛ニ採掘セサルモノハ如シ
 安質母紐

安質母紐ノ著シキ採掘ヲナスノ國ハ地球上ニ之ナシト雖モ然レモ全
 然採掘セザルモニアラズ諸國ヨリ出品セリ
 日本ニハ安質母紐ノ鑛山三箇所アリ其鑛塊ヲ通例硫化品ニシテ堀田
 氏之ヲ出品セリ
 第四 貴寶金屬
 此題號ヲ以テ銀鑛金塊及金銀混交物ト白金トヲ論スベシ白金ハ元來
 貴寶金屬ニアラザレモ常用金屬ノ部類ヨリハ寧ロ此部類ニ入ルヘキ
 モノナリトス
 銀鑛 銀鑛ノ採掘ハ近年著シク擴張セリ特ニ亞墨利加ニ於テ然リト
 ス地球上銀ノ產出額ハ一千八百五十二年ニ在テ六年ニ三億〇二百萬
 「フラン」ナリシガ一千八百七十一年以來其増加スルヲ甚ク速ニシテ一
 千八百七十五年ニハ四億〇三百萬「フラン」ニ上リ一千八百六十六年
 則一千八百七十五年ニ至ル十年間ニハ合計三億〇〇八百萬「フラン」ニ
 シテ一千八百七十八年ニ於テハ地球上ニアル所ノ銀ハ三百八十億「フ

ラン」ヨリ三百九十億「フラン」ニ至ルノ間ニ於テ算定スルヲ得ルシハ
 日本 爰ニ日本ヨリ銀鑛ノ產塊ヲ出品セザラズ一言スヘク今採掘ス
 ル所ノ鑛山ハ凡ソ四十箇所ニシテ其產出額ハ一千八百七十五年ニ於
 テ九千七百四十「ログラム」ナリ
 金鑛 亞細亞ノ部ニ日本ヨリ鑛山四箇所ニ於テ其產出額ハ
 日本ニハ金鑛三十箇所アリ其鑛塊ヲ出品セリ其產額ハ一
 千八百七十五年ニ於テハ六百七十三「キログラム」ニ上レリ即チ百二
 十九萬「フラン」ノ價アルモノナリトス
 第五 金屬ニ「ガ」バニ「電氣」ニ應用スル日本ニ爲ニ説ク所ナシ
 第六 化學工業ニ用フル鑛品
 酸化滿俺 日本ノ部
 今モ日本ニ滿俺ノアルヲ示カ爲スニ茅野氏出品ニ係ル加州產過
 酸化品ノ標本アルヲ一言スベシ
 硫黃 日本ノ部

日本ノ鑛山局ヨリハ其國ニ於テ採掘スル所ノ諸鑛山ヨリ産出セル粗
 硫黃ハ標本ヲ出品セリ一書ハ
 第七 粧飾鑛品、日本ノ爲ニ說ク所ナシ
 第八 諸種鑛品、同上
 第九 一般ノ蒐集品、
 今此小區中ニ陳列セル數多ク蒐集品ヲ說クハ無事アルソミ其蒐集
 品ニ目シテ某國ノ鑛物ニ富メルヲ知ラシムルモノナリ採掘ノ日尙
 本淺キ國ノ物品ハ特ニ裨益アルモノト云々
 日本ヨリハ既ニ言ハル如ク有要ニ鑛品ヲ陳列セル種々ノ鑛類ニ富
 ヲ知ラシムル是レ工部省鑛山局ノ出品ニシテ銀牌ヲ得タリ
 第四十四小區
 山林開墾及工業產出品ヲ部
 地中ニ埋藏スル所ノ石炭ヲ悉ク採掘シ終ル時ハ人生將
 何スヘキカ下云ハル問題ハ曾テ人々展論議セシ所ナリ石炭ハ盡
 然爲スル事アルカ否是レ問題出テタル所ナリト雖
 今代ノ人及今代ニ次ク所ノ時代ノ人ハ幸ニ此憂ヲ免ルヘシ然レ
 最モ恐ルヘク今代ノ去ル毎ニ吾人ニ近ク所ノ災害ハ地上ニ蕃
 茂セル樹木ノ全ク盡キントス
 材ノ價格ハ更ニ無シト云フモ不可ナシト雖
 鐵道若クハ水路ヨリ數百里ノ外ニ運搬シ非常ノ費用ヲ出サ
 者及商買ハ尙ホ利益ヲ得ルト云フ抑木材ノ價ノ古來未ダ曾テ有ラサ
 ルニ比例ヲ以テ騰貴スルニ從ヒ之ヲ材料トシテ製出スルノ利益亦大
 用シ施工ノ巧智トナルニ從テ昔時ノ木材ヲ利用スル粗惡ノ方法ハ自
 然跡ヲ滅シ又森林ノ耕植開拓等ハ既ニ一科ノ學術タルヲ以
 テ之ヲ見レハ世人ハ森林ノ事ニ着眼スルヲ見ル

時如何ニ方法ヲ以テ我身體ヲ暖
 充足セシメ都府邦國ノ形狀ヲ示シ今日ノ如ク存在セシ
 然爲スル事アルカ否是レ問題出テタル所ナリト雖
 今代ノ人及今代ニ次ク所ノ時代ノ人ハ幸ニ此憂ヲ免ルヘシ然レ
 最モ恐ルヘク今代ノ去ル毎ニ吾人ニ近ク所ノ災害ハ地上ニ蕃
 茂セル樹木ノ全ク盡キントス
 材ノ價格ハ更ニ無シト云フモ不可ナシト雖
 鐵道若クハ水路ヨリ數百里ノ外ニ運搬シ非常ノ費用ヲ出サ
 者及商買ハ尙ホ利益ヲ得ルト云フ抑木材ノ價ノ古來未ダ曾テ有ラサ
 ルニ比例ヲ以テ騰貴スルニ從ヒ之ヲ材料トシテ製出スルノ利益亦大
 用シ施工ノ巧智トナルニ從テ昔時ノ木材ヲ利用スル粗惡ノ方法ハ自
 然跡ヲ滅シ又森林ノ耕植開拓等ハ既ニ一科ノ學術タルヲ以
 テ之ヲ見レハ世人ハ森林ノ事ニ着眼スルヲ見ル

木ヲ再植スルコト木材産出ノ爲ニ荒蕪ニ屬スル土地ヲ利用スルコトハ甚
 々緊要ナル問題トナリ其重要ナルコトニ意ヲ注カサルモノアラズ今日
 マテ開設セザル所ノ博覽會ハ予輩ノ見ル所ニ於テハ今回博覽會ノ如ク
 種々ノ木類ヲ陳列シテ又其區域ノ廣大ナリシモノ一毛之アラサルナ
 リ云々
 外國部ノ論中ニ曰ク
 印度支那及日本ニ於テハ博覽會ニ出品スル爲ニ檀香水及竹ノ彫刻物
 品ヲ夥シク製造セリ印度ヨリガールノ太守ニ進呈シタル贈品中ニハ
 檀香水ヲ以テ製造セル烟筒ノ前節アリ云々
 第四十六小區
 非食料農産物ノ部
 總論
 人ハ唯々己レニ必要ナル食料ヲ地ヨリ得ンコトヲ願フニ止マラ
 サルナリ其生存ニ欠ク可ラサル諸物及其安全ニ緊要ナル工業ニ供ス
 ル材料モ亦又地ヨリ獲ル所トス然リ而シテ植物ノ纖維ハ産出物中ノ

第一等ニ位スルモリナリ之ニ次クモノハ染料、單寧、革、蠟類ニシテ烟草
 ハ利要上ヨリ論スレハ最下ニ位スルモリナリ然レモ又其需用ノ
 廣キト各國政府ノ之ニ因テ利益ヲ收ムルトツ點ヨリ見レハ賤位ニ置
 ヲヘキモノニアラス耕作ノ物産ニシテ食料中ニ入ル可ラサルモノヲ
 陳列セル所ヲ第四十六小區即チ本區トス抑此小區ハ種々重要ノ物品
 ト其利用ノ大ナルニ因テ各國産出セサル所ナキ物品トヲ包括スルカ
 故ニ極テ廣大ナルモノナリ是レ實ニ氣候地味ノ大ニ同シカラサル諸
 地ニ於テ人類ノ需用ニ供スル爲ニ天ヨリ人ニ與ヘタル萬般ノ物品ヲ
 陳列セル所ト云フヘシ夫レ人ハ何レノ地ニ棲息スルモ衣食ナカル可
 ラス疾病アル時ハ醫藥ヲ服セサル可ラス其他千百ノ必要ヲ満足セサ
 ル可ラサルナリ是ニ於テカ造物者ノ物ヲ賜フテ其必要ニ供スルアリ
 ト雖モ其形状ハ甚々同シカラサルナリ寒帶温帶ノ地ト熱帶ノ地トニ
 アルヲ問ハス人ニハ麵粉類脂質甘味ノ食物ヲ要シ衣ヲ製スルノ布ヲ
 作ル爲ニ植物ノ纖維ヲ要シ且ツ容易ク破壊セサルヲ方法若クハ目ヲ

悦ハシムル爲ニ之ヲ染死ノ方法ヲカル可ラサルナリ然レ而シテ如何ナル土地ニ行クモ人ニ有要ナル物品ヲ製スルニ供スル植物ニ空乏セズ下雖其植物ハ相同シカラステ皆植物學ノ範圍ヲラサレハナカルヘシ土地ニ因テハ麥ヲ食物ノ基本トスヘク或ハ米ヲ本食トスヘク又其他ニ於テハ稗黍等ヲ食用ト爲スヘシ油ノ如キモ何レノ地ヲ論セテ一日モ無ル可ラサルモノニシテ某種ヨリ榨收スル土地アリ或ハ橄欖ヨリ榨收ズル土地アリ其原質ニ様ナラス纖維植物ニ於ケルモ亦然リ亞麻、麻、如キハ舊大陸ニ屬シ新大陸ニ於テハ木綿ヲ生スルナリ夫レ乎輩カ此等ノ事ヲ爰ニ一言スル所以ヲモテ本小區ノ廣大ナル可ヲ示スニアルヲミテ其ノ詳ニハ別ノ章ニ於テ述ベルベシ

抑本小區出品人ノ數ハ官報目錄ニ依レハ一千五百二十四人アリ而シテ又英國屬地ノ如キハ尙ホ此數ニ洩ル、ト云フ縱令官報目錄中ニ掲載セキモ各國ノ特別目錄ニ載スル所ノ出品人ヲ總計スレバ一千八百〇九人ニ上ルヘシ且本小區ノ審査官ハ誤テ他區中ニ陳列セル數多ク

物品ヲ検査撰別シ物品ハ異ナレモ同一ノ出品人ヲ審査シタルト少カフザルカ故ニ出品ノ種類ハ二千種ナリト云フモ尙ホ實數ノ下ニアルハ云々

亞細亞諸國ノ出品中支那及日本ノ出品ハ特ニ論スルニ足ルモノナク支那本區ノ出品ハ官府ヨリノ陳列ニ屬ス抑支那國ノ重ナル物産就中輸出貿易ニ係ル物品ヲ出品セルモノハ關稅官衙ナリ蓋シ私人ヲ催促シテ出品セシメタランニハ尙ホ一層ノ景況ヲ添ヘ實際ノ裨益アリシナルヘシ

本區日本出品ハ多クハ教育ニ係ル公館ヨリ出タセルモノナリト雖モ又産出人及商人ヨリ出品セルモノモ亦少カラス其出品ハ概テ始テ歐羅巴ニ出タセルモノニシテ因テ日本物産ノ種類ト工業中二三種ノ改良セル景況トヲ知ラシメタリ平紐ノ形ニ於ケル麻ノ纖維ノ如キハ驚クヘキ軟柔ニシテ特ニ注意スヘキモノアリトス養蠶ニ係ル物品工業ニ用フル油類及烟草ハ皆出品セリ

麻ノ部總論 麻耕作ノ古キコトハ多ク亞麻ニ讓ラスシテ萬國ノ植藝スル所ナリ奇ナル哉麻及亞麻ハ並ニ織緯植物中最貴重ナルモノニシテ又並ニ油ニ富メル穀ヲ生ス木綿樹ニ於ケルモ亦然リ抑麻ノ生長ハ亞麻ニ比スレハ少ク時日ヲ要スト雖也然レ其大ナルコトハ亞麻ニ愈レリ織緯長ク且ツ強クシテ又巧ニ製スル時ハ最モ緻密ナリ夫レ織緯植物中耕作ノ簡單ニシテ歉收ノ憂ナク地味氣候人異ナルヲ忌マス美ニシテ長ク又軟柔ナル織緯ヲ生スルモノ麻ヲ措テハ決シテ之アラサルナリ

麻ヲ知テ其耕作ヲ放棄スル所ノ國アルコトハ未ダ曾テ聞カサル所ナリ今日ノ如キハ萬國之ヲ產出セサルハナシ其耕作ノ最モ盛ナルハ魯西亞、伊太利、佛蘭西、西班牙、澳地利、匈牙利トス此等ノ國ハ皆博覽會ニ多少ノ標本ヲ出品セリ其製法ハ極メテ宜シク品質又甚タ美ナリ日本モ亦一種ノ製法ヲ以テ製シタル麻ヲ出品セリ其質美ニシテ強ナルヲ實ニ著明ナリトス

夫レ植物學者ハ曾テ一種ノ麻ノ外知ラザリキ即チ普通麻ト稱スルモノ是レカレ然レ其數多ノ變種アリトス其生長ハ多少早クシテ其長サハ多少大ナルモノアリ佛蘭西ノ如キハ播種ノ爲メピエモンヨリ麻種ヲ輸出シアンジュニ於テハ其輸入ノ種子ヲ播テ收穫セル種ヲ特ニ貴フト云フ

日本ノ部 諸種ノ織緯植物ニ富ム所ノ日本ニ於テモ亦麻ヲ耕ヤシテ驚クヘキ疆靛ナル織緯ヲ製スルナリ日本耕ス所ノ變種ハ支那ノ麻ニ近似セルモノ、如シ是レ一種ノ生長晚キモノニシテ枝ヲ生スルコト多ク歐羅巴ニ於テ一般用フル所ノモノヨリモ大ナリ織緯ハ平紐ノ如クシテ甚タ白ク甚タ光澤アリ是レ生幹ナル時夥ク含有スル所ノ脂質物ニ因テ相附着スルヤ疑ヒナキナリ此麻ヲ以テ製スル綱ハ同シ直徑ニシテ歐羅巴ノ最上等ノ麻ヲ以テ製スル綱ヨリモ強キコト三分一トス蠶繭ノ部總論 繭及生絲モ農業ノ附屬產物トシテ本區ニ出品セルモノハ、中ニ列セリ然レ本區ニ出品セル標本ハ甚タ僅々ナリ其他ハ第

三十四小區ニ製絲ト共ニ陳列シ或ハ又有要出類及其產物ニ供シタル
 第八十三小區ニ出品セリ世界萬國ノ養蠶及其方法上最モ完全セル説
 明ヲナスハ二小區ノ報告ニアリトス是レ本區ノ報告ハ報告スヘキ産
 物ノ員數ト重要トニ準セサルニ非ルヨリハ區域ヲ廣ムル能ハサレハ
 ナリ
 支那ヲ以テ養蠶ノ本原トナスハ衆人ノ異見ナキ所ニシテ支那ハ實ニ
 古代ニ在テ養蠶工業ヲ專有セシモノナリ羅馬人ノ如キハ蠶絲ト支那
 トヲ以テ異名同物ト爲セリ中古近代ニ至リ養蠶ノ術及製絲ノ術漸々
 歐羅巴全國及亞米利加ニ廣マレリ是レ養蠶ノ業ハ好時氣ニケ月ニ於
 テ成就スルノ簡短ナルト葡萄樹ノ生スル地ニハ繁茂スル所ノ桑樹ノ
 健強ナルトニ因リ如何ナル氣候ノ土地ト雖モ其業ニ從事スルコトヲ得
 ルニ因ルモノナリ但其工業ハ世界萬國ニ廣マルト雖モ支那日本印度
 佛蘭西及伊太利ニ於ケル如キニ非レハ重要ノ工業トハ稱ス可ラサル
 ナリ

蠶絲出産額ノ多キニ於テハ萬國中支那ヲ以テ第一等トセサル可ラス
 然レモ又歐羅巴工業ノ點ヨリ論スレハ伊太利及佛蘭西ハ今ヨリ三十
 年前以來發生スル疾病ノ養蠶ニ大害ヲ爲サ、ル前ニハ其工業最モ盛
 ナリシ國トス
 其害ヲ蒙リシ時ニ當リ我國蠶絲織布工場ノ事業ニ要用ナル原質材料
 ヲ支那及日本ヨリ輸入スルヲ得タルハ甚々幸ナリキ
 支那及日本ヨリ歐羅巴ニ輸出スルコトハ此時甚々迅速ナル勢力ヲ有シ
 タリ今日其輸出ノ漸減スル所以ノモノハバステウトル氏新發明ノ方
 法ヲ應用スルカ爲メニ歐羅巴ノ産額稍増加スルニ因ルナリ
 日本ノ部
 日本人ハ養蠶ノ業ヲ以テ日本ニ創起セルモノニシテ何レノ世ト雖モ
 其業ニ從事セサル時ナシト思惟スルナリ暫ク外國ヨリ日本ニ輸入シ
 タルモノナリトセハ其輸入セルハ頗ル太古ニアルヘシ何ントナレハ
 日本ノ最モ古キ史乘ニ養蠶ノ事ヲ記載スレハナリ又此工業ノ擴張ノ

速ナルハ日本ト歐羅巴トノ關係盛ナル時ヨリ以來ニアリト認めサレ
 可ラス是レ唯タ日本ヨリ蠶絲ヲ輸出スルノミナラス毎年日本ヨリ歐
 羅巴へ輸出スル蠶種ノ數量ハ頗ル著大ナルニ原ツクモノナリ抑多年
 ノ間歐羅巴ニ於テ日本蠶種ヲ争テ購求シ今日ト雖モ尙ホ其愛顧セラ
 ル所以ノモノハ是レ日本人ノ蠶ヲシテ卵ヲ生マシムルノ業ト種紙
 ノ貯藏トニ注意スルノ密ナルニ因ルモノトス然レモ今ヤ日本蠶種
 類ノ歐羅巴ニ輸入スルノ數量ハ一年ヨリ減少スルヲ見ル夫然リ
 而シテ蝶ヲ一々撰別シパステウール方法ニ因リテ検査シタル蝶ヨリ
 收穫スル所ノ歐羅巴産ノ蠶種ハ今實ニ日本ノ蠶紙ト甚タ盛ナル競争
 中ニアリ日本産中ノ最モ貴重セラレハ米澤ネダヨリ産スル所ノモ
 ノナリ近頃日本ニ於テ温度ノ變スルヲナクシテ常ニ清涼ナル洞ニ夏
 期養蠶ヲ試シシニ充分ナル結果アリシト云フ又種紙モ爰ニ貯フレハ
 甚タ好ク保存シテ孵生スルヲナク意ノ如ク孵化シ時期ヲ延ハスヲ得
 ルト云フ斯ノ如クシテ七月マテ貯藏シタ蠶種ハ孵化セハ其生長甚

速ニ最良ナル蠶種及繭ヲ生セリト日本政府ハ常ニ其國諸工業ノ改
 良ニ學術ノ理ヲ適用スルニ汲々トシ一千八百七十四年ニ當リテハ試
 験養蠶所ヲ開設セリ蓋シ其國ノ養蠶家ハ大ナル裨益ヲ得ルガレヘシ
 日本ニ於テ年々ノ蠶絲産額ハ二百萬キログラム少シク以下ニシテ
 其内概略百十萬キログラムハ地方紡績所ノ需用ニ供スルモノナリ
 其紡績所ニハ蒸氣機關ヲ備フルモノ甚タ多シ又輸出額ハ年々七十萬
 「キログラム」ヨリ七十五萬「キログラム」ニ至ルノ間ニアリ
 左ニ掲クル所ノ表ハ一千八百六十七年及一千八百七十六年間佛國ニ
 輸入セル各國ノ蠶絲ノ數量ヲ示スモノナリ

輸入

支那	一千八百六十七年	一千八百七十六年
英國	三〇六五一五	二〇五七九二一
日本	一一四三一五三	六八四七四九
	一七八四八一	四六八一五九

伊太利	二三五八九四	四一七〇六八
土耳其	三一五〇三五	三五三三六四
埃及	四五二二五	二六三七〇三
瑞西	二二六〇一	三三二五二八
英領印度	一四五四〇四	一〇九〇四〇
西班牙	二三四八一	七〇九八六
其他	二〇六三三六	七八〇四二
合計	二六二二〇〇	四七三五〇〇

榨油穀類及油ノ部總論

脂質物ハ人類ノ生活ニ必要ナルモノニシテ實ニ食料ニ欠ク可ラサルモノナリ家々日常ノ用ニ供セサルハナク又工業ニ於テ之ヲ用ヒサルモノハ極メテ稀ナリトス世ノ創始ニ於テハ獸脂ヲ以テ諸ノ需用ヲ満足セシメタリモ人ナリト雖也今日ニ至テハ縱令野蠻ノ人民ト雖也植物ヨリ採ル所ノ脂質物ヲ需用セサルハナク植物ヨリ採ル所ノ脂質物

以甚ク夥シクテ其類幾ト枚舉ニ暇アラズ抑植物ノ油及脂ハ唯タ炭素ハ水素トヲ以テ成分スルモノニシテ其榨滓ヲ地ニ復スル以上ハ地味ヲ損セシテ限リナク産出スルヲ得ハ然リ而シテ如何ナル大量ノ油ヲ輸出スルモ榨滓ヲ失ハサレハ地味疲瘠スルヲチシト雖也種實若シハ其榨滓ヲ外國ニ送クレハ是レ其國ノ沃饒ヲ他ニ輸出スルモノナリ

日本ニ於テハ胡麻ヲ耕作スルノ頗ル夥シク之ヨリ油ヲ榨收シテ以テ食料燈料ニ供スルナリ又諸種ノ茶科植物ノ實ヨリモ油ヲ榨收ス落花生モ亦日本ニ於テ耕ス所ナリ荏ハ日本ニ於テ最モ工業ニ用フル所ノ最モ貴重ナル油ヲ生ス其油ハ半透明ノ紙ヲ製スルニ用フルナリ其紙ハ軟柔ニシテ水ヲ透サス故ニ用フル所甚ク多シ又其油ハ漆ノ製法及木蠟ヲ取ルニモ用フルモノナリ

烟草總論 諸種ノ製造ニ係ル烟草ヲ消耗スルノ次第ニ進歩スルヲハ今時ヲ最モ人ヲ驚カス所ノ非常ナル事實ノ一ナリ道德學者經濟學者

統計學者ハ之ニ因テ以テ珍奇ノ學業ヲ修ムルヲ得ヘシ抑、人生ニ最モ
 必用ナル物品ヲ產額増加スルコトハ目今舊大陸ニ於テハ甚メ徐々タル
 煙草ヲ需用ハ益擴張シテ止マサルナリ蓋シ煙草タルヤ無用ノ物品
 ニ屬シ又時アリテハ有害物ナリ然ルニ各國人口三分賦スレハ其比例
 不日急大ナリ
 夫シ喫煙ノ人ニ害アルニ拘ハラズ各國大概煙草稅ノ歲入ヲ以テ豫算
 額ヲ平均ヲ定ムルヲ見ルノ今日ニ於テハ深思熟考セズンハアル可ラ
 ズ夫モソアルナリ蓋シ煙草稅ノ民望ニ適セサルヨ今日ノ鹽稅ニ於ケ
 ルカ如クナルニ至ルヘント云フモ全ク架空ノ言ニアラサルナリ事爰
 至レハ其歲入ニ代ルニ何ヲ以テセンカハ是レ人ノ竊ニ思考スル所
 ナリトス今ヤ諸國ニ於ケル煙草稅ノ金額ハ千百萬ノ數及億ノ數ヲ以
 テ算スルキナリ唯シ佛蘭西一國ニシテモ煙草ニ係ル部分ノ歲入ハ一
 千八百七十六年ニ於テ二億六千三百萬「フラン」ニ上リ而シテ爾來漸増
 加シ徵アリ確實ナル書類ナキヲ以テ他國ノ煙草稅額ヲ精密ニ知ルニ

由ナシト雖、世界年々ノ消耗全額ハ一億「キログラム」ニ下ラスト云
 フヲ以テ之ヲ見レハ其稅ノ重要ナルコトヲ知ルヘシ若シ其煙草ヲ直徑
 五「センチメートル」ノ筒ニ作ル時ハ地球ヲ三十周スルニ足ルヘント算
 定セシモソアリ左ノ表ハ諸國ニ於ケル年々ノ分頭消耗額ナリ

獨逸	一「キログラム」八〇
合衆國	一「キログラム」六〇
澳地利	一「キログラム」四六
佛蘭西	一「キログラム」八八
匈牙利	一「キログラム」八六
伊太利	一「キログラム」七〇
英國及魯西亞	一「キログラム」六〇

前回ノ博覽會ニ煙草ヲ出品セル國ハ今回モ亦皆出品セリ而シテ前回
 ニ於テハ諸國概ネ其國ニ於テ消耗スル所ノモノヲ出品セシト雖、今
 回ハ自國ノ收穫ニ係ル煙草ヲ出品セリ

日本ノ部 日本人ハ第十七世紀ノ初以前ニハ烟草ヲ知ラザリシモノ
 如シ此時ニ當リテ葡萄牙人日本ニ到リ烟草ノ耕作及喫吸ヲ日本人
 傳ヘタリ然ルニ日本人大ニ之ヲ愛シ喫烟ノ風習ハ全國ニ廣マ
 リ男女並ニ之ヲ喫シ幼兒ト雖モ甚タ幼ヨリ之ヲ喫スルニ至レリ而シ
 テ其之ヲ喫スルヤ小ナル烟管ヲ以テス日本ニ於ケル烟草ノ耕作收穫
 及製法ハ全ク歐羅巴ト異ナラサルナリ又五六年以來歐羅巴風ニ烟草
 ヲ製スルコト大ニ進歩セシハ世人ノ知ル所ナリ今ヤ大ニ卷烟草紙卷烟
 草製造ノ業ニ從事ス其製造物ヲ博覽會ニ出品セリ甚タ注意セル製造
 ナレモ烟力弱クシテ香氣ナシ

染料物品ノ部總論

一般ノ分類ニ因リ染料植物ハ此第四十六小區ニ屬シ而シテ其植物ヨ
 リ採ル所ノ染具ハ第四十七小區ノ區域ニ係ルカ故ニ爰ニハ製藍ヲ論
 スルヲ要セサルヘシ抑藍ハ今日植物染料ノ重要ナル部分ヲ占ムル所
 ナリモノナリ具ニ經濟上ノ價格アル染料植物トシテ今回ノ博覽會ニ出

品セルモノガ「ガランズ」酒夫藍紅花「ロク」ノ四種ニシテ此他ノ植物モ亦多
 ク諸國ノ出品中ニ見ヘタレモ標本ノ名義ニシテ奇ヲ惹キ新ヲ著スカ
 爲メニ陳列セルノミ

支那及日本ノ部
 支那及日本ハ其國ニ於テ甚タ舊時ヨリ諸種ノ布類ヲ染ル所ノ染法ノ
 種々ニシテ又染具ノ不易ナルニ因テ有名ナリ抑今日尙ホ此二國ノ染
 具ノ世ニ棄テラレサル所以ノモノハ古來ヨリ其有名ナルニ因ルモノ
 ナリトセサルヲ得ス何ントナレハ五六年以來其染法ノ進歩ヲ見ルニ
 歐羅巴ノ諸國ニ比スレハ遠ク及ハサルモアルハナリ其用フル所ノ
 染料モ亦種々アルニアラスシテ唯タ種々ノ分量ニ因テ諸物ヲ混交ス
 ルナリ然ルカ故ニ一種ノ染具中ニ五六種ノ物品ヲ混交スルコトハ其常
 ナリトス爰ニハ支那及日本ノ重ナル植物染料ヲ論センノミ
 支那ノ部略ス
 日本ノ出品中ニモ亦支那ト同シク染料ニ用フル所ノ數多ノ植物染具

アリ其重ナルモノ左ノ如シ
 茜草「ガランスス」(植物)ニ甚ク好ク似タル植物ニシテ其根ヨリ美ナル赤
 色ヲ生ス(日本人之ヲ呼テ「アカネ」ト云フ)
 楊梅 其樹皮ハ收斂ノ性質アリテ暗赤色ヲ生ス日本人ハ植物ヲ「ヤマ
 モ」ト呼ビ皮ヲ「シブキ」ト稱ス是ノ染具ハ染藥ヲ用ヒサルモ不
 可ナキカ如シ又漁網ヲ染メ腐敗ヲ防クニ此皮ヲ用フ
 黄柏 其皮ヲ黄色ノ染料トス
 危子 其實ヲ黄色ノ染具ニ用フ
 榭 黒色ニ染ルニ用フ
 又支那及日本ニ於テハ鬱金ヲ染料ニ用フ而シテ印度ノ藍ニ似タル藍
 ヲ生スル所ノ蓼藍ヲ大ニ耕作ス其耕作ハ支那ニ於テ殊ニ盛ナリトス
 第四十九小區
 草皮ノ部
 百工ノ中柔皮ノ工業ハ萬國人民ノ皆一般ニ從事スル所ノ業ナリトス

ハ更ニ疑ヲ容レサルナリ蓋シ獸皮ヲシテ住居衣服及獸類ヲ使用
 スルニ供スル器具其他百般ノ用ニ適セシムルノ必要ヲ最モ先キニ感
 シキルモノハ曾テ居所ヲ定メサリシ所ノ浮浪ノ小人民ナリトス而シ
 テ獸皮ヲ其用ニ供センニハ先ツ之ヲシテ腐敗セス水ヲ透漏セサルノ
 製法ヲ施サ、ル可ラサリキ
 柔皮ノ業起ラサル以前ニ之ヲシテ用ニ供スルニ至ラシムルノ最初ノ
 方法ハ今マ尙ホ亞細亞ノパスキトル人民及亞米利加ノ野蠻人中ニ存
 スル如ク之ヲ柔ニスルハ或ル藥劑ト共ニ之ヲ燻フルニアリシモノハ
 如シ此方法ヲ以テシテ天幕帶皮及衣服ニ供スヘキ皮ヲ製シタルモノ
 ナリ
 抑柔皮術即チ或ル植物中ニ含有スル所ノ單寧ト有機物トヲ相合着セ
 シムルノ起源ハ甚ク明カナラス是レ昔時開化ノ世ニ在テハ各自其固
 有ノ方法ヲ秘シ竊ニ其業ニ從事シタルニ因ルナリ
 抑柔皮ノ術ハ獸皮ノ需用日ニ盛ナルニ從テ年一年ヨリ改良シタルモ

今時ニ在テモ尙ホ柔皮工業ハ駿々タル進步ニ獎勵セラレ、モノトス
 是レ各國互ニ競争スルニ原因スルノミナラス消耗ノ必要日ニ盛ナル
 依ルモノニシテ即チ新方法ヲ探求シ完全迅速ナル柔皮術ヲ發明ス
 ルノ必要ナル所以ナリ云々
 日本ヨリハ家内ヲ粧飾スルニ用フル所ノ特種ナル製皮ノ美麗ナル蒐
 集品ヲ出品セリ其繪圖ハ種々ニシテ布ニ於ケル如ク金銀ヲ附著セル
 モシアリ形附アルモシアリテ亦奇觀トスルニ足ルナリ
 第七大區
 第六十九小區
 穀物類ノ部
 本小區ノ出品ハ歐羅巴、亞細亞、亞非利加、亞米利加、大洋洲ニ於テ耕作ス
 ル所ノ穀類及穀ヲ以テ製スル所ノ物品、食料ノ菜根、球根ヨリ取ル所ノ
 澱粉ニ係レリ

是ノ故ニ本區ニ陳列セシ物品ハ大麥、小麥、燕麥、玉蜀黍、粟、蜀黍等及其澱
 粉トス
 裸麥、小麥及燕麥ハ年内雪ノ絶ハサル地方ヲ境界トシテ兩半球ノ極端
 ニ最モ進入スル所ノ穀類ナリ小麥ノ如キハ熱帶間ノ國ニ於テ好ク生
 長スルモノトス
 小麥ハ歐羅巴ニ於テハ北緯六十度外亞米利加ニ於テハ其五十度外ニ
 出テス抑實ノ熟スル時ニ當リ暑熱ノ甚ク過度ナルニ因テ熱帶ノ地ニ
 於テハ小麥ヲ耕作スルヲ甚ク僅々ナルニセヨ「カブサコル」又「熱帶ヨリ
 南半球緯線ノ四十度ニ至ル間ノ地ニ於テハ甚ク好ク生長スルモノナ
 リ南亞米利加、喜望峰及大洋洲ニ於テハ甚ク美ナル小麥ヲ生ス玉蜀黍
 ノ如キハ熱帶間ノ地ニ於テ甚ク好ク熟シ其耕作ハ熱帶以外ニマテ及
 シテ一方ハ北緯四十七度ニ至リ又一方ハ南緯四十度ニ至ル米ノ耕作
 ハ北緯四十六度ヨリ南緯二十五度ニ至リ伊太利、埃及、日本、コシヤ、
 印度、支那ニ於テ年々耕作スル所ノ地ノ面積ハ頗ル大ナリトス又

蕎麥ハ北極線ト北緯三十五度ノ間ニアル地ニ於テ耕スノミ魯西亞、日本、加拿他、佛蘭西等ニ於ケル蕎麥耕作ノ面積ハ甚ク大ナリ馬鈴薯ハ初メ比路ニ産セルモノニシテ今ハ歐羅巴全洲、南亞米利加ニ耕スト雖用埃及及中央亞非利加ニ於テハ小球根ヲ生スルノミ云々

亞細亞ノ部總論

亞細亞ハ分テ二部トス赤道下「カンセル」熱帯ノ間ヲ南亞細亞ト云ヒ波斯、日本、コシヤンシーヌ、インドスタンヲ包括ス「カンセル」熱帯ニ始リ北緯五十度ニ終ルノ地ヲ北亞細亞トス南亞細亞ニハ熱帯間ニアル所ノ植物過半ハ之アリ

日本ノ部

日本ハ三十九萬四千「キロメートル」平方ニシテ高低起伏ノ土地ナリ景色絶佳地味膏腴ニシテ草木繁茂ス

氣候ハ一様ナラスシテ北部及西部ハ寒ク東部及南部ノ地方ニ於テハ暑シ

日本人ハ多年ノ間孤立シテ諸國ト通商セザリシヲ以テ農事ノ進歩ハ極メテ微々ナリ抑日本人ノ其耕ス所ノ植物ノ收穫ヲ増殖スルノ目的ヲ以テ耕作方法ヲ改良スルノ必要ヲ理解シタルハ僅々五六年以來ニアルノミ

日本ニ於テハ大麥小麥蕎麥蜀黍茶砂糖等ヲ産ス

米ノ耕作ハ甚ク盛ニシテ年々ノ耕地面積ハ五十八萬「ヘクタール」一「ヘクタール」ハ一〇ハルニ十五歩トス而シテ耕地ノ全面ハ五十一萬六千「ヘクタール」ニシテ從テ譯ク原文ニ過キサリナリ普通ノ米ハ之ヲ稱シテ粳米ト云ヒ晶明ノ狀アルモノヲ糯米ト云フ粳米ハ食料ニシテ又酒ヲ製スルニ用ヒ糯米ハ味淋ヲ作ルニ用フ陸稻ノ耕作ハ甚ク僅少ニシテ又大麥ハ小麥ヨリ品質下ルト雖田之ヲ耕スモノ甚ク多シ又玉蜀黍、川穀、柿、稔、車前、葉山慈姑、蕨等モ亦日本人ノ栽培スル所ナリ

日本ヨリハ麥米玉蜀黍蕨蕎麥小麥食用荳科植物ノ種子、澱粉等ヲ出品セリ三月中トロガデロ園圃内ニ日本ノ早麥ヲ播種セルニ七月ニ至テ

十分ニ熟セリ
 出品論ヲ部米ヲ論ニ曰ク
 日本ニ於テ米ノ種類二百七十種ニシテ早稻中稻及晚稻ニ區別ス普通ノ
 米ハ呼ビテ粳米ト云フ
 日本入ル粳米ト稱シテ大ニ耕ス所ノ米ハ干飯及餅ト稱スル所ノ菓子
 ヲ製スルニ用フ又其粉ヲ用テ以テ寒晒ト稱スル菓子ヲ製スルナリ普
 通ノ米及特ニ陸米ハ酒及酢ヲ製スルニ用フ干飯ハ米ヲ炊キ日ニ干シ
 タルモノニシテ何年ニ至ルモ保存スル之ヲ食フニハ乳汁中ニ入ル
 カ若クハ煮汁中ニ混交スルナリ事實ニ誤アレド暫ク原文ニ從テ譯ス
 本區内日本出品中銀牌ヲ得タルモノ一賞狀ヲ得タルモノ三ナリ
 第七十二及第七十三小區
 獸肉魚肉菓實及蔬菜ノ部
 獸肉魚肉菓實及蔬菜ニ總ヘテ此二區内ニ陳列セリ
 外國ニ於テモ博覽會ノ所望ニ應シ務メテ國ノ物産ヲ出品セリ

那威、西班牙、加拿他コレクシヨノ如キハ蒐集品ヲ陳列セリト雖モ佛國英國合衆國
 ハ硝子箱ニ入レテ物品ヲ各別ニ陳列セリ
 出品人ノ數ハ大略一千六百名アリ其數ハ甚タ少キカ如シト雖モ博覽
 會ノ開會期限ノ永キコト佛國及近隣國ニ在テハ生鮮ノ物品ヲ引換フル
 以困難ナルコト遠離ノ國ニ在テハ物品ノ損害スルコトナク到達ナシ難キ
 ヲ以テ之ヲ見レハ其人員ハ決シテ少シトハ爲ス可ラサルナリ
 此二小區出品ノ主意ハ食料物品ヲ其產地外及産期外ニ於テ消耗スル
 カ爲メニ貯藏方法ヲ講究スルニアリキ日本及支那ヨリモ物産ノ若干
 ヲ出品セリ夫レ食物タル人生利害ノ關スル所甚タ大ナルカ故ニ生鮮
 ノ獸肉魚肉蔬菜菓實ノ事ヲ爰ニ少シク論シ本二區ノ主眼タル貯藏方
 法ヲ審査及製産物列舉ニ至テ詳ニ説ク所アルヘシ
 生鮮獸肉魚肉菓實蔬菜ノ部
 鮮肉、獸肉ハ食物中最貴重ナルモノニシテ滋養分多キカ故ニ世人ハ
 爭テ之ヲ求ムルナリ然ルカ故ニ其消耗額ノ増加スル勢ハ都府ニ於テ

盛ナルノミナラス田舎ニ於テモ亦盛ナリトス實ニ我人民ノ安寧及健康ニ益アリト云フヘシ五六年前ニ在テハ田舎人ノ其勞ヲ恢復スルカ爲メニ食セル所ノ室素分アル食物ハ唯豚肉一種ニ過キスト雖在今日ニ至テハ縱令日ニ食用セサルニモセヨ其食用ノ度數ハ漸々増殖シ脂質澱粉質鹽分ノ食物ヲ同時ニ食フカ故ニ甚々健康ニ利益アルナリ年々ノ消耗額分頭平均額ハ一千八百七十三年ニ在テハ都府ニ於テ六十一「キログラム」ナリシニ頓ニ増加シテ一千八百七十五年ニハ七十「キログラム」ニ上レリ爾來ノ統計書ヲ製セハ尙ホ増殖セルモノアラシ

田舎ノ獸肉消耗額ハ農事萬國統計表ニ掲クル所ノ外更ニ知ルニ由ナキナリ此表ニ因レハ一千八百七十六年間ニ屠殺セル獸肉ノ純量ハ八億三千九百六十六萬千八百五十五「キログラム」ナリ佛國ノ人口ヲ三千六百萬トスレハ平均一人ノ消耗額ハ大略二十四「キログラム」ナルニ前ニ云ヘル量中セルレト市場ノミニシテ一億六千萬「キログラ

ム」ヲ賣買メリト雖此市場ハ啻ニ巴黎及セーヌ州ノ需用ニ供スルノミヲ中心ニアラスシテ近隣ノ諸州モ肉ノ賣買ヲ皆此市場ニ仰グヲ思ハサル可クサレナリ

斯ノ如ク夫レ大量ナル消耗ト其益擴張スルノ需用ニ供スル爲メ佛國ニ於テ食料トスルキ家畜ノ總數ハ四千五百二十萬七千〇三十六頭アリ魯西亞ノ如キハ尙ホ多シト云フ然レ在テ此四千五百二十萬七千〇三十六頭ヲ人口若クハ「キロメートル」平方ノ數ニ比スル時ハ佛國ハ或ル獸類ニ於テハ歐羅巴二三國平均ノ下ニアリトス是ノ故ニ此問題ヲ講究スルヨハ特ニ農業ニ裨益アルモノナリ云々魚肉菓實蔬菜ノ部略ス

貯蓄獸肉魚肉菓實及蔬菜ノ部

貯蓄法 食物ヲ貯蓄スルノ方法ハ甚々多シ乾燥燻製鹽漬ノ如キハ爰ニ論スルヲ要セサルナリ此方法ニシテ用フレハ腐敗スルノ憂アラサレハシ是レ廉價ナル一時ノ賣品ニ應用スヘキ法トス

五六年以來氷ヲ用テ以テ貯蓄スルノ試驗ヲナセリ亦甚々裨益アリト

防腐劑ノ貯蓄法ハ今マテ結果ヲ生ゼサリキ
 アテタル方法發明人ノ名ヨリアッペルト稱スル所ノ方法ニ因テ製スル
 貯蓄食料ノ益々世人ニ貴重セラレルノ景狀アリ
 其方法ハ其貯蓄セル物品ノ自然ノ味其形体及其原色ヲ失ハシメサ
 ルモノニシテ購買者ノ直ニ用フルヲ得ルカ爲メニ味ヲ附ケルヲ得ヘ
 シ又各國其習慣ニ從テ調理スルヲ得ル爲メニ自然ノ景狀ヲ以テ蓄フ
 ハキモノトス斯ノ如クナルカ故ニ其工業ノ日ニ進歩スルヲハ敢テ怪
 ムニ足ラサルナリ是レ工業上ニ應用スル必要方法ノ改良完全ノ域ニ
 達シタルニ因ルモノトス
 此方法ニハ三種ノ業アリ
 第一 豫メ煮ルコト
 第二 密閉ノ器物ニ入ルコト
 第三 湯中ニ其器物ヲ煮ルコト

此第三ノ業ハ蓋ヲ閉チタル釜ヲ用ヒ之ニ氣壓計及寒暖計ヲ附シテ相
 照檢スルカ故ニ貯蓄品ノ景狀及其風味ヲ損スルコトナク其貯蓄ニ必要
 ナル温度ヲ密ニ知ルヲ得ヘキモノトス至リ製造家ノ此閉釜ヲ用ヒテ經
 驗ヲナシタルニ因ルモノナリ
 斯ノ如クシテ製シタル物品ハ何レノ地下雖モ輸送スルヲ得ル所ノ貯
 蓄食料タルヘシ又其貯蓄器ニ用フル所ノブリツ箱價ノ漸々低落
 セルハ是レ其箱ヲ製作スル所ノ器具ノ改良完全セルニ因ルモノニシ
 テ爲メニ貯蓄品ノ價モ貴カラサルヲ得ルカ故ニ其工業ニ裨益ヲ與ヘ
 其業ニ從事セサル所ヲキナリ
 其他家内ニ於テ用フヘキ貯蓄方法アリト雖モ工業ニハ應用スヘカラ
 乾蔬菜ノ部

食料 荳科植物ノ實ハ人民ノ食物中重要ナル部分ヲ占ムルモノニシテ
麵包ニ代用スヘク或ハ又麵包米玉蜀黍等ニ混スレハ貴重ノ食料タル
ヘシ

豆類ヲ生スル所ノ植物ハ一般年々枯死スルモノナリ其莖ハ植物ノ種
類變種氣候地質及地味ニ從ヒ三十五「サンチメートル」ヨリ二「メートル」
ニ至ル云々

耕作地方

地球上ニ其植物ノ分派セルコヲ理解センニハ地球ノ面ヲ三種ノ大帶
ニ分メサル可ラス北國、温帶國、熱國是レナリ北國、温帶國ノ部略ス
熱帶ハ北緯三十五度ヨリ南緯四十五度ニ至ル
熱帶地方ニアル國ハ埃及波斯支那南部日本其他二十餘國トス
此等ノ國ニ於テ耕スモノハ赤小豆刀豆其他數種ニシテ又此植物ハ温
帶ニ在テハ熱地ニシテ北及東ノ塞カリタル所ニ非レハ耕スヲ得サル
ナリ

英領印度支那及日本ヨリモ甚々美ナル赤小豆刀豆等ヲ出品セリ
熱帶ノ國ニ於テ耕ス所ノモノハ蘆粟、加珙木綿、胡椒、茶等ナリ是レ歐羅

巴ノ耕作ニ屬セザル所ノモノトス

出品

乾蔬菜ノ陳列ヲ詳説センカ爲メニ予ハ食料トスヘキ豆類ヲ生スル所
ノ植物各種ヲ列舉シテ以テ論セントス

眉兒豆 此荳科植物ハ佛蘭西、澳地利、伊太利、西班牙、葡萄牙、希臘、埃及、日
本等ニ於テ大ニ耕ス所ナリ日本人之ヲ「インゲンマメ」ト云フ

赤小豆 此豆ハ印度、日本、佛領印度、南亞米利加ニ於テ耕ス所ナリ其花
ハ濃紫色ニシテ其實ハ小ニシテ長キアリ長圓ナルアリ黃色ヲ帶フル
モノアリ綠色ナルモノアリ又黑色ナルモノアリ日本人之ヲ「アヅキ」ト
云フ

豇豆 此豆ハ歐羅巴南部、波斯、埃及、支那及日本等ニ於テ耕ス所ナリ

大豆 此豆ハ支那、日本、印度等ニ於テ甚々耕ス所ナリ其花ハ桔梗色ナ

其其實ハ椭圆形ニシテ黄赤緑黒ノ色アリ其粉ハ日本ニ於テ醬油ト稱
 大豆汁及味噌ト呼ビ所ニ食物ヲ製スルニ用フニ效アリ
 抑大豆ニハ早仲晚ノ別アリ今マ方ニ歐羅巴南部ニ之ヲ移植センコトヲ
 務ムヤナリ其莖ハ高サハ五寸サシチメトトルヨリ七寸五「サンチメ」ト
 トル「ク」ニアリ其實ハ小ニシテ長サ四若クハ五「サンチメ」トナル「ク」ノ莖
 生ズ
 大豆ニ此豆ハ紫色花ヲ蔓生植物ナリ日本之ヲ「オタマオ」ト云フ支那日
 本ニ於テアトシテ「ク」等ニ於テ耕ス所ニモナリ
 蠶豆此豆ハ寒熱温ノ三帯ニ屬スルモノナリト雖田歐羅巴ノ北部ニ
 於テハ通例二月若クハ三月ニ於テ播種シ温帯熱帯ノ地ニ於テハ秋季
 其播種ヲナスヲ常トス其耕地面積ハ阿蘭英國佛國魯西亞西班牙葡萄
 牙希臘波斯埃及日本支那等ニ於テ甚タ大ナリインドスタンは於テハ
 此植物ヲ知ルモノナシ日本人此豆ヲ呼ビ「ク」ト云フ「ク」ハ蠶豆
 英國及日本ハ綠色及紫色トシテ蠶豆ノ甚タ美ク變種ヲ出品セリ西班牙

亦伊太利及希臘ノ出品モ亦甚タ著明ナリ伊太利日本西班牙ヨリ出
 品蠶豆蒐集品中ニハ佛國ニ於テ黒豆ト稱スル所ノ變種ニ屬スル黒豆
 種モ亦見ヘテ云フ

賞状

開拓使

獸肉牡蠣等ノ貯蓄品

教育及學校ノ事

職工ノ一般教育ヲ受ルヲ得ルニ至ラントハ見ント願フ所ナリ但特別
 教育ヲ設ケ技術學校ヲ立ツレバトテ食料物品貯藏工業ノ必ス進歩ス
 ルハ期ス可ラサルカ如ク何ントナレハ職工ハ此工業ニ從事スル
 モノハ既ニ大概ニ成人ニシテ又其教育ハ已ニ終ルノ後カレバ然
 レバ職工ヲ以テ廣ク教育ヲ受ルヲ得セシメタランニハ修業ノ事ニ慣
 熟セルカ故ニ容易ク新業ニ熟スルヲ得ヘク自ラ完全ヲ計ルノ點ニ向
 フヘシ是レ教育スベキ第一ノ結果トス
 蓋シ後來食料貯蓄品ニ係ル製造業ノ盛衰ハ未製ノ物品ト貯蓄ノ物品

トノ價ノ差ノ減殺ニ關スルナリ其差ノ減殺スルコトハ湯中ニ煮テ破損
 ス可ラサル密閉ノ器物ヲ廉價ニ製造シ得ルニ至ラサレハ能ハサル所
 カリ器物ニ用フヘキモノハ獨リ「ブリツキ」アルノミナリト雖モ然レモ
 工業實地ノ進歩ニ比スレハ其價ハ尙ホ甚タ貴シトス
 「ブリツキ」ヲ用フルニモセヨ又其他ノモノヲ用フルニモセヨ未製品及
 貯蓄品ノ價ヲレテ相均キヲ得セシメハ食料貯蓄品ノ販賣ハ著シキ勢
 カヲ有スス然レバ則チ其製造工業ノ人民ニ幸福ヲ與フルヤ大ナル
 幸シ是レ物品上ノ幸福ナリト雖モ道義上ニ係ル幸福ノ元素ト認ルヲ
 得ベシ

第七十五小區

酸酵飲料ノ部

酒造方法ノ進歩貯酒器ノ製造ニ注意スルノ周密ナル「アルコール」
 及麥酒工業
 進歩ハ是レ本小區萬國審査官ノ本主トスル所ニシテ即チ五千六百
 六十名ノ出品人中三三〇九十七箇ノ褒賞ヲ與ヘタル所以ナリ

澳地利、匈牙利、白耳義、支那、丁抹、西班牙、亞米利加合衆國、佛蘭西其屬地、英
 國其屬地、希臘、伊太利、日本、那威、阿蘭、波斯、葡萄牙、魯西亞、瑞典、瑞西等ハ皆
 本小區ニ出品セリ
 葡萄酒、強酒ノ部ニ曰ク

日本ヨリハ醇及米酒ヲ出品セリ而シテ其出品人ハ銅牌及賞狀ヲ得タ
 麥酒ノ部日本ノ爲ニ說ク所ナシ

第七十七小區

博覽會馬匹出品場ニ率致セル動物ノ検査ニ任シタル審査官ハ唯タ最
 モ功勞多キモノニ褒賞ヲ與ヘタルヲ以テ既ニ其業務ヲ終レリトセサ
 ルナリ抑其審査官タルヤ其特別ナル學業ニ因テ高名ナル人ニシテ政
 府ノ信用ト出品人ノ投票トニ因テ此博覽會ニ集合セル地球上ノ馬種
 ヲ比較講究スルコト價格ノ大小ニ從テ馬種ヲ排列スルコトニ任セラレ
 タルモノ、一群ナルカ故ニ其事業ノ形迹ヲ後代ニ存スルノ義務アリ

ト信セリノ一... 抑其審査官ノ列ニ加テ... 若クハ之ニ關スル著明... 外國出品馬匹ノ部... 伊太利、可抹、畜養... 爲送致也... 答

第八大區... 有要虫類ノ部... 養蠶新業... 織布工業... 於我佛國產... 蠶絲ヲ需用... 此蠶絲... 動物若クハ植物... 收入スル織物中... 最々美麗... 法以然

レ其蠶絲ノ高價ナルヲ蠶ノ食料タル桑樹ヲ各所ニ耕ス可ラサルヲ... 養蠶所ヲ荒害セシ所ノ疾疫等之ヲ原因トナリ内國若クハ外國蠶種中... ヨリシテ其良種ヲ撰ムコトニ至ラシメタリ... 人ア既ニ前世紀ニ於テ蜘蛛絲ヲ利用シテ布ヲ製スルコトヲ發議シ然... カモ學術學士會院ニマテ蜘蛛絲ヲ以テ自ラ製シタル足袋及手袋ヲ提... 出シタリキ同時ニ博物學者ハ亞細亞産及亞墨利加産ノ大蠶アルヲ知... リ其形ノ潤大ナルト其色ノ潤澤アルトニ驚キタルノミナラス之ヲ利... 用スルノ思考ヲモ發生セリ而シテ其大ナル繭ハ我國産蠶絲ノ如キ有... 要ナル蠶絲ヲ供出スヘキヤ否ヲ疑ヒタリキ然レモ其蠶絲ヲ工業ニ用... ヒントスル思考ノ人心ニ發生セルハ特ニ三十年以來ニシテ我國ニ於... テ外國産ノ蠶ヲ養育シテ好結果ヲ得タルノ時ニアリナリ或ル博物學... 者ハ唯々學術上新奇ノ事トシテ爲セル此試驗ヲ學術學士會院ニ申報... シ此外國ノ蠶種ヲ我國ニ養育セハ養蠶工業ニ利益ヲ與フヘキヲ説... ケリ而シテ又此蠶種ハ我國ノ蠶種ナレハ養育ス可ラサルヘキ氣候ノ

地方ト雖^レ之ヲ養育スルヲ得^{ヘキ}トモ亦論シタリキ
 特ニ博物學者^ヲランシヤル氏ノ如キハ此經驗ニ因^レハ此蠶ハ我國内
 地ニアル植物ヲ以テ養フヘクシテ特別ノ耕作ヲ起サ^ルモ養育スル
 ヲ得^ルカ故ニ彼ノ特別ノ耕作ヲ要スル所ノ蠶ニ比スレハ費用モ亦少
 カルヘキト示セリ氏曰ク
 此蠶ハ我國ニアル植物ニ似タルモノヲ食フモノニシテ我國ニ生ス
 ル所ノ植物ヲ以テ充分ニ生活スヘシ概言セハ此蠶ハ特別ノ耕作ヲ
 爲サ^ルモ我國ニ於テ養育スルヲ得^ルナリ彼ノ藩籬ト爲ス所ノ「ラ
 ーベルピーヌ」^{樹名一種}モ同シク其蠶ノ食料ニ供スル爲ニ利用スヘ
 シ又田舎ノ貧人ハ其近傍ニ於テ蠶ノ食料タルモノヲ見出タスヘク
 大額ノ産出ヲ爲スヲ得^{ヘシ}婦女兒童及凡ソ勞働ニ堪^ヘサル人ヲ以
 テスルモ數週間日々其蠶ニ注意セシムルニ足ルヘシ云々
 此數行ノ文字タルヤ新蠶ニ係ル利益ヲ充分ニ言ヒ盡スモノナルカ故
 ニ予輩ハ讀者ニ之ヲ示スヲ以テ緊要ナリト信セリ而シテ其言ハ三十

年前ニ係^レリト雖^レ今日現ニ利益アルノ言ナリトス
 抑外國ノ蠶種ヲ養育スルノ此試驗タルヤ始メ學術上ノ娛樂トシテ企
 起シタルモノナレ^レモ忽チニシテ實地應用ノ工業領内ニ入り頓ニ佛蘭
 西全國及歐羅巴中ニ廣マ^レリ此新業ノ起^ルヤ僅カニ五十年以來ニ
 シテ日尙ホ甚々淺キカ故ニ予ハ其來歴ヲ爰ニ説クヲ欲セサルナリ抑
 新蠶ヲ歐羅巴ニ移スノ事跡ニ關スル詳細ノ事ハ暫ク措キ其新蠶ヲ我
 國氣候ニ慣^レシムル爲ニ養蠶家ノ遭遇セシ困難ヲ回顧スレハ輕々看
 過ス可^ラサルモノアルナリ然^レモ我輩ハ唯々前回博覽會即チ十年以
 來ノ進歩ヲ論スルニ止メントス

第一章

此時ニ當リ二十年以來我養蠶地方ニ慘酷ナル荒害ヲ爲セシ所ノ虫疫
 ハ益々猖獗ヲ極メ其止マル所ヲ知ル可^ラサリキ我内國蠶種ノ全ク消滅
 スルヲ憂フルマテニハ非ルモ其變動ノ無窮ニ渉ルハ世人ノ憂懼セ
 シ所ナリ其變動ヤ養蠶工業ニ大妨害ヲ爲セシモノニシテ今日ト雖^レ

尙ホ未タ全ク恢復スル能ハサル所ナリ此憂アルヲ以テ世人ハ其災害ヲ恢復スル爲ニ大ニ奮テ新ニ輸入セル外國産ノ蠶種ヲ増殖スルヲ試ミテ此時幸ニシテ我國氣候ニ適セル蠶ハ三種アリキ其首ナルモノヲ支那種ノ「エーランド」蠶ナリ蓋シテ此蠶ヲ養フニ樹ノ名ニシテ「アスチ」以テ是レゲラシメテネロルナルモノ、佛國ニ養育ヲ始メシ所ナリ此蠶種ハ我國ノ氣候ニ慣習シ未タ十年ナラサルニ全ク人力ヲ假ラサルニ至リ而シテ今ヤ我國ノ公園及遊歩場ニ生活シテ自ラ増殖スルハ人ノ知所ナリ此大利益アルニ拘ハラス此蠶種ノ貴重セラレハ以前ニ比スレハ甚ク減殺セリゲラシメテ死シテ養蠶者ノ熱心ヲ刺激スルモノナキ以來ハ特ニ甚クホス既ニ一千八百六十七年ノ博覽會ニ於テ豫知シテ此事アルヲ感知セシメ果シテ今回ノ博覽會ニハ此蠶種ノ産物甚ク稀ニシテ實ニ重要ナルモノニアラザリキ夫レ斯ノ如ク此蠶種ノ貴重セラレサルノ重モナル原因ハ「エーランド」蠶ノ繭ノ體質ニアルナリ其繭ハ形平ニシ而シテ護謨質物ニ因リ甚ク

附着セル絲ヲ以テ成ルカ故ニ桑蠶絲ノ層ノ如クサスニアラサレズ利用ス可ラザルナリ然レモ其困難ハクリステヤレルツト云ヘル養蠶家ノ發明セル方法ニ因リ今日消滅セル如シ其方法タルヤ「エーランド」蠶ノ繭ヨリ絲ヲ紡績シ桑蠶ノ繭ヲ以テ製スル所ノ絲ニ比スヘキ數本撚リ絲ヲ作ルヲ得ルモノナリ又其紡績ハ普通ノ生絲ヲ製スルニ用ラレ所ノ器械ヲ以テ之ヲ爲スヘキカ故ニ此方法ヲ用ラレモ別ニ費用ヲ要セサルナリ是ノ故ニ從來經濟ニ關係アリトシテ今日マテ新規ノ事ヲ敵視スル所ノ工業人モ此ニ至テ新繭ヲ利用セサルカ爲メニ自實スル所ナカルヘシ又一方ニ付テハ「エーランド」樹モ其葉ヲ食料トスル所ノ蠶ト同シク全ク我國ニ生ヲ保ツモノトナレリ如何ナル不長ノ地ト雖此樹木ノ生長セサル所ナキカ故ニ其養蠶ハ費用ヲ出タサズシテ從事スヘキ後來利得ノ根源トナラン

第二章

「エーランド」蠶ニ係ル出品ハ今回ノ博覽會ニ於テ甚ク哀ムヘキノ狀ヲ

呈ヒシト雖支那及日本ノ蠶「アツタ」及「ユスバ」ニ至テハ大ニ然ラスニ
 シテ其產物ハ養蠶出品中ノ最モ裨益アリテ最モ本色ナル部分ナリシ
 蓋シ此結果ハ驚ク足ラサナリ何ントナレハ其蠶絲ノ品質ハ貴重
 ナルカ爲メニ養蠶者ノ此二種ニ注意スルコト茲ニ年アレハナリ其蠶絲
 美シ桑蠶ニ次クモノニシテ之ニ業ヲ施スノ容易ナルモ亦桑蠶ニ似
 ナリ蠶ハ強壯ニシテ我氣候ノ變化ニ能ク堪ヘ第一其養育ヲナスニ費
 用少キコト「エーラント」蠶ニ同シ而シテ其食料タル所ノ樹葉ノ消耗
 亦實ニ夥シク是レ皆我國公園ノ森林ヨリ採テ供給スル所ニシテ蠶之
 ヲ食ヒ腹中ニ於テ纖維物ニ製スルナルハ且ツ山蠶ハ原野ニ於テ之
 ヲ養フ所ノ日本ニ於テハ既ニ馴致セル所ナリ而シテ又日本ノ北部及
 特ニ山蠶ノ養育ニ從事スル所ノ中部ニ於ケル氣候ハ我歐羅巴ノ温帶
 地方ニ著シク異ナラサルナリ日本ノ或ハ地方ニ於テモ温度下リテ樹
 葉ノ霜ニ侵サルトコアリト云フ之ニ因テ之ヲ觀レハ山蠶ノ養育ヲシ
 テ日本ノ如ク我國ニ盛ナラシムルコトニ於テ毫モ妨害ヲ見サルナリ而

シテ家外ニ於テ其養蠶ノ業ヲ大ニスルヲ得キハ佛蘭西及其他歐羅
 巴ノ諸國ニ於テ爲セル所ノ經驗ニ因テ既ニ知ルヘキ所ナリベルソン
 氏ハ一千八百六十五年ニ當リ唯々一回ノ養蠶ニ二千箇ノ繭ヲ收穫
 シ又「アレト」氏ハ澳地利ニ於テ一千八百六十六年ニ其養蠶ヲ試シ
 ニ同シク三十萬箇ノ卵ヲ得タリト此二氏ノ經驗ニ因ルモ養蠶ノ業ハ
 佛國ニ於テ大ニスヘキヲ見ルヘシ又其大ニスルヲ得ヘキヲハ今回ノ
 博覽會ニ於テ愈々確定セルナリ抑西班牙區ニ在ル所ノ「リスカル」侯ハ出
 品セル硝子箱中ニ其養育セル蠶ノ甚々美ナル繭二萬五千箇アリシハ
 人々感嘆セシ所ナラスヤ其蠶ハ家外ニ養フ所ナリト云フ輒近公布セ
 ル報告書ニ因レハ一千八百七十六年ニ於ケル「ガタリ」ニツプノ收穫ハ
 繭十七「キログラム」ニシテ又其卵ノ收穫ハ一ニ對シ九、二ノ比例ナリ
 シト此結果ヲ得タルノ名譽ハリスカル侯養蠶ノ管理ニ任セラレタル
 ホナヘ及モラシノ二氏ニ歸スルモノニシテ氏ハ實ニ其用ヒテ結果ヲ
 得シ所ノ養蠶方法ニ付キ甚々裨益アル報告ヲ「巴理」ノ「アツクリ」マタシ

「會社」爲シタリキ
 伊太利ニ於テ亦タ日本蠶種ノ養育ヲ起業スルニ盡力セリブリゾラ氏ノ如キハ其養蠶ノ標本トシテ葉中ニ山蠶ノ大繭ヲ附ケタル小繭樹ヲ出品セリ氏ノ之ヲ伊太利ニ養育スルコトヲ試ミテ得タル所ノ結果ハ西班牙ソリスカル侯ノ如シ今ブリゾラ氏ノ得タル結果ノ重要ナルコトヲ示サンカ爲メニ一言スベキモノアリ曰ク氏ハ此五年間蠶種百「ダクシム」ニ付繭二十六「キログラム」ヲ得シテ虚歲ヲシト
 抑日本蠶種ヲ佛國北部ノ氣候ニ慣習セシムルコトハ伊太利ノ如ク容易ニ得タル所ナリ氏ハ其養蠶ノ業ヲ一千八百七十年ニ始メ爾來最善賞スベキ熱心ヲ以テ其事業ヲ繼續シタリシニ一千八百七十五年ニ至リ巴理ノ氣候ニ於テ山蠶ヲ養育スルコトハ既ニ成就セル事業ト認ムルヲ得ヘキコトヲ「アツクリマタシヨシ」會社ニ報告スルヲ得タリ我國氣候ノ日ニ變シ時ニ動クニ拘ハラヌ山蠶養育ハ家外ニ於テ爲スベキモノナ

リ又蠶ハ我國ニ産スル繭ヲ食ヒ而シテ其解卵ハ毎年恰モ繭芽ノ開ク時ニアルカ故ニ解卵ノ期ヲ遅緩ナラシムルカ爲メニ人造法ヲ以テ之ヲ冷スヲ要セサルナリ是レ日本山蠶ノ我國ノ氣候ニ慣習セル微標ナリトス

「ゴー」氏ノ養蠶ヲ説キ終ラントスルニ先チ氏ノ有益アル經驗ニ付數言ヲ陳フヘシ其經驗タルヤ唯タ全ク形相上ノ利害ニ關スルニ過キズシテ今實地應用スル所ニアラス即チ日本山蠶ト「ベルニ」蠶トヲ交接セシムルノ經驗是レナリ氏ハ山蠶ノ雄ハ甚タ容易ク「ベルニ」蠶ノ雌ト交接シ其結果ハ夥シキ卵ヲ得ルニアルコトヲ確認セリト雖モ其反對即チ「ベルニ」蠶ノ雄ト山蠶ノ雌トノ接尾ヲ得ルコトハ甚タ困難ニシテ結果ヲ生セサルコト概テ其常ナリ其雜種蠶ハ初年ニ在テハ雄ニモ又雌ニモ似タルノ色ニアラス或ハ其二色ヲ混交セルノ色アリ然レモ二年目ヨリハ漸「ベルニ」ニ近似スルノ傾向アリテ愈々年ヲ閱ミスレハ益々然リ其繭ニ至テハ形及色並ニ二種ノ繭ニ似テ薄綠色ノ點ヲ帯ヒタル暗

鼠色アリト云フ
抑尙ホ此經驗ヲ續行シ其新種ハ何年ノ間相續キテ卵ヲ生シ何代目ニ至テ其混交ノ性質ヲ失フヤ確見ズルコト蓋シ裨益アルノ一事ヲ其雜種ニ付キ予輩ノ知ル所ニ因レハ若干日ヲ經ルニ從ヒ二種ノ内ニ復スヘシ是レ蓖麻蠶ト「エドランド」蠶トハ雜種ニ於テ見タル所ナリカトトルハトシユ氏ノ報告ニ因レハ其雜種ヲ博物館ニ養育セルニ概テ皆ナ第七代ニ至テ本ニ復セリト
白耳義ノ氣候ハ養蠶ニ甚タ適セスト雖モ外國ニ遲レスシテ新蠶ノ養育ヲ試行セリ比律悉シモントヒユイツト女ノ出品ハ蠶ト其產物トヲ講究スルカ爲メニ甚タ裨益アル裝置ニシテアツタキユスモリ蠶ノ繭及生絲ノ美ナル標本中ニ山蠶ノ繭生絲及製絲ヲモ陳列セリ日本蠶ヲ白耳義ニ於テ養育スルノ結果ハ幾ト得タリト云フヘシ此養蠶者ハ一千八百七十八年ニ於テ四千箇ノ卵ヲ孵化シ繭樹ヲ以テ養育セシニ六年ノ繭樹二千本ヲ以テシテ二千箇ノ繭ヲ收穫セリ而シテ其蠶卵ハ四

月十八日ヨリ五月五日ニ至ルノ間ニ孵化シ恰モ繭葉ヲ開ク時ニ際シ從テ損失モ甚タ僅少ナリキ又其養育ニ係ル時日間ハ雨頻リニ下リ風烈クシテ温度ハ攝氏寒暖計五度ヨリ二十七度ノ間ニアリシト雖モ蠶ハ好ク其氣候ニ堪ヘタリ抑白耳義氣候ノ不順ナルハ養蠶者ノ爲ニ妨害ノ最タルモノニアラスシテ最モ甚タシキハ鳥鼠ノ害タリ未タ之ヲ防クノ方法備ハラサリシ故ニ其害ハ特ニ大ナリシト云フ
蓋シ白耳義國ハ歐羅巴ニ於テ山蠶ヲ養育スル北方ノ極端ナルヘシアルフレトワイリ氏ノ言ニ因レハ既ニ英國ニ於テハ晚霜ノ下ルヲ概テ日々ニシテ山蠶ノ死スルモノ夥シキカ故ニ今ヤ之ヲ養育スルコト能ハサルニ至レリト「ベルニ」モ亦甚タ其氣候ニ適セサルモノ、如シ北亞墨利加ノ蠶種ハ英國ニ於ケル寒濕ノ氣候ニ適スルコト亞細亞蠶種ニ比スレハ稍賴ムヘキモノアルヲ以テ氏ハ亞墨利加ノ蠶ヲ養フテ以テ其結果ヲ得ンコトヲ望ムト云フ

第三章

支那北部ノ産タル他ノ一種ノ蠶モ亦十年以來歐羅巴ノ諸國ニ於テ養育スルコトヲ試行セリ是レ此一種ノ蠶ハ山蠶ノ繭ノ如ク大ニシテ柔和ナル艶美ノ絲ヲ生スレハナリ然レモ此蠶ノ山蠶ニ異ナル所ハ人ノ知ル如ク一季ニ二回ノ收穫アルコトノ或ル桑蠶ニ於ケルカ如クナルコト是レナリ佛蘭西及其他歐羅巴ノ温帯諸國ノ氣候ニ於テハ第二回ノ時ハ孵化ヲ全フスル能ハスシテ蛾ノ形ニ止リ翌年ノ春氣ニ至ラザレハ全ク孵化スルコトナシ而シテ氣候寒冷ナル時ハ蠶ノ生育甚ク遅緩ニシテ早ク樹葉ニ空乏ヲ告ケ食料ナクシテ死スルコト往々之アリ是ヲ以テ養蠶者ハ往々損失ヲ蒙リ之カ爲メ此蠶種ヲ棄テ、山蠶ヲ撰取スルニ至レリ是レ其孵化ハ一回ナレモ養育ノ容易ナルニ因ルナリ抑、歐羅巴南部ノ國ニ在テハ前言ノ蠶種ノ生育最モ速ニシテ此妨害ニ遭遇スルコトナキカ故ニ一季内ニ三回ノ養蠶ヲ爲スヲ得ヘシ西班牙國ニ於テベレト氏ノ之ヲ養育シテ完全ナル結果ヲ得タルハ其例ナリ其方法ハ詳細ナルハ今知ルニ由ナシト雖モ今回ノ萬國博覽會西班牙區中ニ

於テ其善良ナル結果ヲ證檢スルコトヲ得タリ而シテ又西班牙ニ於テリヌカル侯ノ山蠶養育ヲナシテ甚ク不良ヲササル結果ヲ得タルハ既ニ予輩ノ言ヘル所ナレハ今ヤ予ハ西班牙國ニ向ヒ二種ノ蠶ヲ養育スルヲ得ルニ至レルノ成績ヲ賀スルナリ
 新大陸モ亦タアタキニスセクロセヤ、リユナ、プロメテウ、ポリヘミユス等ノ蠶種ヲ産出ス歐羅巴ニ於テハ若干年以來其養殖ヲ計ルト雖モ然レモ其養蠶ハ未ダ工業ト稱スルノ域ニ達セサルナリ
 然レモ亞墨利加蠶ノ生スル國ノ氣候ト歐羅巴ノ氣候トノ相似タルコト又其蠶ノ過半ハ食ヲ撰ハサル虫類ナルカ故ニ其養育ニ困難ナキコト其蠶絲ノ品質ノ貴重ナルコトヲ思ヘハ其養蠶ノ業ハ忽ニスヘカラサルモソアルナリ必好結果ヲ得ルノ機會アルヘシ其蠶タルヤ山毛櫟、榭、栗、柳、莖麻及其他種々ナル植物ヲ以テ養フヲ得ルモノタルカ故ニ之ヲ我國ノ氣候ニ慣習セシメハ豈ニ利益ナシト爲ス可ンヤ抑、フランスヤル氏ノ所言ヲ應用スヘキハ特ニ此蠶種ニアリトス氏曰ク田舎ノ最モ貧キ

人ハ近傍ニ於テ充分ニ新蠶ノ食料ヲ見出タスヘク而シテ大價アル物
品ヲ得ヘシト
絲ノ美ナルト其多キトノ爲ニブレジールニ於テ養育ヲ始メタル南亞
墨利加ノ蠶種「アタキユス」ヲ「ラタ」ハ佛國ニテハ氣候適セサルヘキ故
ニ養フ能ハサルモ亞爾及ハ其蠶ノ食料タル蓖麻ヲ容易ニ耕スヘキカ
故ニ爰ニ之ヲ養フヲ得ルナルヘシ
予輩カ列舉シ來レル蠶類ハ桑蠶ノ援助ト爲スヘキ蠶種ヲ言ヒ盡セル
モノニアラス現今知ル所ノ他ニ亞細亞人ノ蠶絲ヲ收ルニ用フル所ノ
蠶類尙ホ之アルモ計ル可ラス東洋極端ト我歐羅巴トノ關係日ニ頻繁
ニ月ニ擴張シ予輩ヲシテ其工産物ヲ詳ニセシムルニ至ルニ從ヒ予輩
ハ亞細亞人民ノ發明力ヲ以テ其國自然ノ産物ヲ利用スルニ至レルニ
驚クノミ抑其人ハ衣服ヲ製スルノ術及其他ノ事ニ於テハ歐羅巴人
ヨリモ先輩ニシテ布ヲ製スルニ種々ノ物品ヲ用フルナリ其物品タル
予輩之ヲ自國ニ見ルモ予輩ノ思考ハ蓋シ之ヲ利用スルニ至ラサルヘ

今回ノ博覽會ニ於テ近時ニ係ル其一例アリ曾テ日本區中ニ梳絲及染
布ノ標本ヲ添ヘ奇見ノ繭若干ヲ入レタル梓アリキ其繭ハ大ニシテ暗
色アリ其絲ハ護膜ノ爲ニ甚タ粘着セリト雖モ密着セステ恰モ編布
ニ同シキ間隙アリ其隙ヨリ繭中ニアル所ノ蛹ヲ見ルヘシ此類ノ繭ハ
我國ノ繭ニモ亦アル所ニシテ例之「アクリヤト」蠶ノ繭ノ如キ是レナ
リ然レモ日本ノ繭ニハ蛾蝶共ニ附添セスシテ出品セリ予輩ノ請求ニ
因リ博物館博物學助手「ケル」氏ハ之ヲ東亞細亞ノ産「アタキユス」
ヲ「ミス」蠶ニ屬スルモノト決定セリ予輩ハ日本事務官中ノ一人ヨリ此
蠶種ト其工業トニ付キ左ノ事實ヲ知ルヲ得タリ曰ク「アタキユス」アラ
ミス「蠶絲」ヲ産スル所ハ日本中部ノ中心及南部ニシテ特ニ信濃ヲ盛ナ
リトス日本ニ於テハ之ヲ樟虫ト云フ其繭ハ樟樹ヨリ直チニ取ルナリ
甚タ固結スト雖モ之ヲ梳スレハ鼠色ノ蠶絲ヲ得ヘシ之ヲ以テ織レル
布ハ極メテ堅固ニシテ柔和ナラス又光澤ナクシテ其硬キ粗毛ノ布ノ

如シ故ニ衣ヲ製スルニハ用ヒサレ且唯ヲ帶ヲ織リ以テ自國ノ用ニ供
 スルナリ又日本南部ニ於テハ其絲線ヲ以テ釣鉤ヲ結ヌモノ即(天蠶絲)
 ヲ製スル云フ抑「アマキユスアラミス」蠶絲ハ美ナラサルカ故ニ我國ニ
 之ヲ養ハサルヲ惜マサレ且唯ヲ新奇ナルカ爲ニ爰ニ一言スルニ(第
 四章略ス) 養蠶ノ部略スルニハ、
 養蠶工業ハ今回ノ博覽會ニ於テ著明ナル位置ヲ占メサリキ蓋シ著明
 ナル位置ヲ占ムルヲ得タルナルヘント雖且數多ク養蠶家就中尤モ著
 明ナル人特ニ伊太利ノ養蠶家ノ如キハ出品ナク且ツ偶、出品スルモノ
 アルモ其出品ハ他區ノ内ニ潜伏シタルカ故ニ之ヲ檢出シ之ヲ比較
 シテ研究スルニハ困難ナキ能ハサリキ是レ其出品ニ著明ナラサル所
 以ナリ 然レ其出品中ノ數多ハ僅ニ五六年前ニ希望セシ所ノ甚々著大ナル

進歩ヲ顯證ヲ呈スルヲ見レハ亦其出品ノ占ムル所ノ位置ノ著明
 ナラサルヲ忘ルヘナリ夫レ予ハ内地ノ蠶種改良養蠶器械及之ニ關ス
 ル刊行書ニ付キ一言セント欲スルナリ其刊行書中第一等ニ位ニ養蠶
 業ノ中興又表スルモノハ「養蠶ノ編輯セル蠶病論」ト題ス
 ル所ト書ナリトス

抑養蠶ニ係ル出品ノ事蹟ヲ詳ニセント欲セハ首又回スルニ十年前
 ニ溯リ養蠶工業ノ如何ナリシカヲ觀察スルヲ要スヘシ然ラハ則チ
 排除シタル困難及之ヲ排除セシ方法ヲ明知スルヲ得シ又其工業ノ後
 來ヲ思ヘハ自然今日養蠶上ニ係ル經濟ノ狀況ヲ觀察スルニ至ルニ
 其業ハ南部ノ農業中ニ最モ重要ナル位置ヲ占ムルモノトス抑灌溉ス
 可ラサルノ地ニハ唯々小樹ノ耕作ヲ爲スヘキノミ而シテ葡萄樹桑樹
 橄欖樹巴旦杏無花樹ノ如キヲ其地ニ種藝スレハ深キ根ヲ以テ日光ヲ
 歛赫スル所ノ地面ニ冷氣ヲ求メテ蕃殖ス然ルニ葡萄樹ハ所在皆虫害
 ニ罹ルヲ以テ農家ハ皆桑樹ヲ培養スルニ至リ曾テ養蠶ノ業ヲ廢棄セ

ルモノモ再ヒ其業ニ復シタリ云々
 養蠶工業ノ繁榮ハ養育ノ好結果ニ係ルモノトスレハ今時ハ昔時ノ最
 モ繁昌ナリト稱スル時ノ如ク幸ナルノ時ナルハ其然ルヲ詳ニセシ
 三六著明ナル二三事ヲ揭示セハ足ラシ
 二千七百五十五年アレニ於テハ七「フランス」ノ養蠶中ニ「フランス」ニ付キ
 繭七斤即チ蠶種二十五「グラシム」ニ付キ二十八「キログラム」ヲ收穫セ
 ル「ララ」シゲドツク全州ニ知ラシメタリ其時ニ於テハ二十「キログラ
 ム」ヨリ二十四「キログラム」ニ至ルノ收穫アレハ尤好結果ヲ得タリ
 トモシモノナリ
 「ララ」ハ二千七百七十五年ニ曰ク種ヲ取ルニ過キサルノ繭ヲ收穫
 セルモ其數得テ算ス可ラス其他ハ「フランス」ニ付十斤十五斤若ク
 ハ二十斤ヲ收穫セルヲ又三十斤ヨリ四十斤ヲ收穫セルモノアレ
 最極メテ僅カク人員ナリト

ニスタレノ一千八百八年ニ言ヘル所左ノ如シ曰ク予カコニ「サシタ
 ル」サロラン、チユラン及其近傍ニ於テ見タル所ノ農夫ハ種紙「フランス」
 ニ付キ繭三十斤以下ノ收穫ヲナセシコハ屢之アレハ三十五斤乃至四
 十斤ノ上ニ出タルコハ決シテ之ナシト
 ダンドロハ一千八百十五年ニ曰ク二十五「グラシム」ノ「フランス」ニ付二
 十「キログラム」ノ平均ハロンハルジニ於テハ蓋シ實數ヨリ上ニア
 ルノ鑑定ナリト
 佛蘭西ニ於テハ一千八百四十六年ヨリ一千八百五十三年ニ至ルハ
 年間ニ平均ノ收穫ハ十八「キログラム」四十二達セリ
 然ラハ則チ平均ノ收穫ハ十九「キログラム」トスルモ曾テ充分ナリト
 レテ定ムル所ノ收穫量ノ最上數ト爲ス然ルニ一千八百七十七年ニ至
 テハ佛蘭西全國ニ於ケル收穫ハ此數ニ超過スルノミナラス種紙ヲ製
 スルヲ目的トシテ以テ養蠶ノ業ニ最モ注意セル州ニ於テハ其收穫ハ
 此平均數ノ二倍ニ上レリ

在平揚ク化表ハ一千八百七十年以來其業ノ漸々ニ進歩セルノ如何ト
 新法ヲ用スルノ擴張セルト示スモノ在リハ一表ニ示スルニ其業ハ
 一ニテ之ヲ示スルニ卵ヲ孵化シタル平均産額(但キ只クダラシム)ニ示スルニ
 地名 一八七〇年 一八七一年 一八七二年 一八七三年 一八七四年 一八七五年 一八七六年 一八七七年 一八七八年 一八七九年

一	一五	一〇	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七
一五	一〇	一四	一四	一四	一四	一七	一七	一七	一七

佛蘭西全國統計表

一八七〇年	一八七一年	一八七二年	一八七三年	一八七四年	一八七五年	一八七六年	一八七七年	一八七八年	一八七九年
八二〇〇〇〇〇	一〇三二〇〇〇	七九六〇〇〇	七四〇〇〇〇	七四〇〇〇〇	六六〇〇〇〇	六六〇〇〇〇	五七〇〇〇〇	五七〇〇〇〇	四一〇〇〇〇
九五七〇〇〇	七九六〇〇〇	七四〇〇〇〇	七四〇〇〇〇	六六〇〇〇〇	六六〇〇〇〇	五七〇〇〇〇	五七〇〇〇〇	四一〇〇〇〇	四一〇〇〇〇
七〇	六四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四

此幸ナル結果アルニ又此表ノ第三行其他ノ結果ヲ示スモノヲ其結

果ナルヤ養蠶ノ量ノ減却スルニアリ而シテ其減却ハ八年間ニ百ニ四
 十ノ割合ナリトス是ニ由テ之ヲ觀レハ一千八百六十九年以來ハ養蠶
 工業ノ改良シテ收穫多キヲ加ルニ至ルニ從ヒ其擴張セスシテ反テ縮
 退シタルモノナリ甚チ奇ナル事實ト云フヘシ其事實ハ恰モ我葡萄園
 ノ著ク減シタルニ應レ他ノ耕作ヲ廢レテ桑樹ヲ培養スルニ至レルノ
 理ニ外ナラサルコトニ注意セスハアル可ラサルナリ然ラハ則チ恰モ
 ハ不テウールノ新工夫アル時ニ際シ養蠶工業ノ擴張ヲ妨害セル原因
 又他所ニ於テ探求スルコトヲ要スヘシ
 其原因ハ外見ニ因レハ營生即チ商業ニ付經濟上ノ狀況改マレルニ因
 ルモノナリ
 又養蠶費ハ昔時ヨリモ多クシテ繭ハ反テ廉價ナリトス
 東洋ノ蠶絲ハ實ニ抗スルニ困難ナル競争ヲ挑ムナリ
 又蠶絲ノ消耗ハ外國ハ暫ク措キ佛蘭西ニ於テハ滅殺セシ所ナリ
 蠶卵「フランス」ノ養育費ヲ觀察スル時ハ地方ト養蠶ノ多少トニ因リ甚

ク異ナルカ故ニ概算ハ爲ス可ラスト雖モ他事ヲ以テ之ヲ考フニ三二
 十年或ハ三十年以來其變セルコトハ左ノ如クナリト算定スルヲ得ヘシ
 今時

蠶種「フランス」ノ價	二「フラン」五〇	十「フラン」
「フランス」分葉ノ價	三「フラン」	四十二「フラン」
三十日間ノ工價	三十七「フラン」五〇	四十五「フラン」
雜費(紙等)	十五「フラン」	十八「フラン」
合計	八十五「フラン」	百十五「フラン」
之ニ因リ繭「キログラム」ニ付五「フラン」トスレハ其十七「キログラム」		
「キログラム」ニ付五「フラン」トスレハ其十七「キログラム」		
ヲ要スヘシ昔時ハ十九「キログラム」ノ平均ニテ利益アリシト雖モ今		
日ハ損失アリトス		
若シ繭ノ價ヲシテ六「フラン」ニ騰ラシメハ十九「キログラム」ノ平均ヲ		
以テ得失概ネ正ニ相半スヘシト雖モ繭價ノ上ランコトハ頼ム可ラス反		

岸低落スルカアルハ左ニ其理由ヲ説カシ
 一千八百六十九年シユエーズノ運河ヲ開通セシヨリ東洋蠶絲ヲ輸入
 易シテ容易ナラシムルノ著明ナル結局ニ放着シ其蠶絲ハ歐羅巴ノ製
 造中重要ナル部分ヲ占ムルニ至レリ抑入ノ争テ其蠶絲ヲ購求セシ所
 以及今尙ホ争テ購求スル所以シモウ以其品質ウ我國內地シモソヨリ
 善質ナルニアラヌ何シトナレバ其絲ヤ不充分ク製造セシテ極上等
 ノ絹布ヲ製スルニ適當セサレハナリ然レモ其争フ所以ハ東洋殊ニ支
 那ニ於テハ工銀甚タ廉ナラカ爲ニ廉價ニ製造シテ販賣スルニ因ルモ
 其消費額ト我國製造家ノ之ヲ購入スル景況ヲ判定スルニハ左ノ員
 數ヲ一見スヘキナルノミ

歐產生絲及東洋輸入生絲

國名	一千八百六十九年	一千八百七十年	一千八百七十一年	一千八百七十二年
佛蘭西	七千三百五十九	七千五百八十二	七千八百一十	八千七百三十三

伊太利	三三六	三六〇	三六六	三六八
西班牙	三〇	一十八	一十八	一十八
葡國	三五七	四三三	四三三	四三三
波斯	三一七	三二一	三二一	三二一
支那	三五四	四三〇	四三〇	四三〇
日本	七二六	六七九	六七九	六七九
印度	六四五	三八六	三八六	三八六
合計	八六〇三	九五七三	九五七三	九五七三

此數量中佛國製造家ノ製スルモノハ内地ヲ蠶絲ヲ除キ三四百萬キ
 告ニ東洋蠶絲ノ歐羅巴ノ經濟中ニ効用ヲ與ヘタルヲ説テ曰ク公衆
 且ツ價貴キ時ニ際シタルカ故ニ争テ求ムル所ノ需用ニ供セシ爲ニ
 並細亞産ノ蠶絲ヲ用ヒ具ノ蠶絲ニ他ノ織物ヲ交セ又ハ染料ヲ夥ク

附着シテ以テ絹布ノ品質ヲ下セリトナリ又曰ク染料ヲ夥ク
 附着スルノ方法ハ一般利益アル方法ニアラスト雖絹布ヲ低價ニ賣
 ラシニハ亦タ已ムヲ得サルノ一法ナリト云フ然レモ予輩ハ其所言ニ左袒セサルナリ何ントナレハ此詐偽絹布ニハ
 眞物ト分ツベキ特異ノ標徴アラサレハナリ諸ノ著述家ノ言ニ因レテ
 諸ノ製造家ハ廉價ナル美布ヲ販賣シテ世評ヲ買ハシムルヲ欲スル所ノ大
 商家ノ影響ニ感シ投機ノ計算ヲ爲セリト抑亞細亞産ノ蠶絲ノ愛顧セ
 ラレテ我國固有ノ製造ニ係ル絹布ノ價格ヲ失ヘルハ此原因ニ外ナラ
 サルナリ
 然リト雖其品質ノ下リタル絹布ヲ購求シテ損失ヲ蒙リタル人ハ必多
 カルヘシ絹布ヲ購フ爲メ金ヲ出タシテ其空影ヲ有スルカ如キモノト
 ス其絹布ハ百中ニ百二百三百四百百分即チ通例ヨリ四倍ノ化學藥劑ヲ
 含有スルカ故ニ自ラ切斷シ腐蝕シテ塵粉トナリテ落ツヘシ是ノ故ニ
 斯ノ如キ絹布ヲ消耗スルモノ漸減シテ皆毛布ヲ好ムニ至レリ或ハ人

之ヲ時好ノ變シ易キニ歸スト雖此事ニ至テハ然ラサルモノアリト
 ス蓋シ公衆ハ眞布ト偽布トヲ檢定スル能ハサルナリ
 之ヲ因テ之ヲ觀レハドロム及アルデーシニテ重要ナル紡績家カ製
 造者ヲ檢束レテ爾來絹布端ニ一定ノ色ヲ染メ公衆ヲシテ一見シテ以
 テ絹布ノ品質ヲ見分クルヲ得セシメ其絹布ニ檢査ヲ施スノ方法ヲ設
 ケント欲スルノ意見ヲ出タセルハ怪ムニ足ラサルナリ夫レ金玉細工
 ニ標記ヲ打チ生絲ヲ乾燥ノ檢査ニ附スルハ即チ偽造ノ弊ヲ防遏スル
 テアラサヤ其檢査ノ爲メ之ヲ水ニ浸タスニ其品質ヲ損セスシテ又其
 目方ノ四分一以上ニ重量ヲ増サ、ルナリ然レモ金屬質ノ染料ハ甚タ
 絹布ニ害アリテ其目方又増スコ三倍四倍ニ至ルヘシ是ノ故ニ其詐偽
 ヲ防禁スヘキヲ甚タ願フ可キ所ナリ
 然レモ今暫ク此方法若クハ他ノ方法ニ因リ公衆ノ絹布ヲ用フルコトヲ
 禁テ故ニ復セシムルヲ得ルトスルモ繭ノ價ハ之ヲ爲メ甚タ著キ改良
 ヲナスコトハ豫メ期ス可ラサルナリ其價ハ東洋ノ輸入ニ因テ制セラル

然ラハ則チ養蠶家ノ欲スル如ク歐羅巴ニ輸入スルノ關稅ヲ亞細
 亞産シ蠶絲ニ課スルヲ要スルカ曰ク否斯ノ如キ方策ハ諸國政府ニ於
 テ施行スルニ付困難アルコトハ暫ク措テ論セ今ニ在リ其方策ハ絹布ヲ製
 造スル者ニ損害ヲ與フベク而シテ其課稅法ハ暫ク行ハルヘシトスル
 事業ヲ小ナル養蠶家ニ利益ヲ與フルニ至ラサルニ夫レ最モ利益
 算計ルニキハ此小ナル養蠶家ヲ爲ニテラズヤ然ラハ則チ施シテ得
 キ別法ヲ他ニ求メテ可クサレテ其利益算計ニ及ビ得ルベク其
 此法ハ元世入リ知ル如ク蠶數ヲ最下度ニ減シテ小量養蠶ト稱スルコ
 度ニ止ラシムルニテ蓋シ蠶數ヲ少クセハ則チ諸事ニ利益少ク下
 支即チ費用ヲ最モ節減スル事共ニテ何トモテ養蠶ノ業其大體
 幸他ノ事業ノ間隙ヲ親シク家人ノ爲メ所ニシテ時間ヲ費スルコト多ク
 ナリ又ニ方ニ於テハ養蠶衛生法ヲ容易ニ行ハルニキカ故ニ從テ收穫
 モ亦大ニ増加スルベシ業ヲ盛大ニスルコト養蠶所ニ於テハ工價ノ費用常
 ニ著大ニシテ結果ヲ不良ナルハ幾シト其極ニ達スルハ是モ久シク既ニ

言ハル所カリ抑小量ノ養蠶法ハ東洋人ノ行フ所ニ外ナラズシテ支那
 ニ於テ歐羅巴ノ養蠶業ヲシテ危地ニ陥ラシムル所ノ巨大ナル量ノ蠶
 絲ヲ産出スルモノハ半「ヲンス」ノ養蠶業ヲ爲スモノ無數ナルニ因ルモ
 人ニシテ我國ニ於テ之ト競争セント欲セハ小量ノ養蠶業ヲ起スヘシ
 然ラハ則チ善良ノ蠶種ヲ撰別シテ大量ノ收穫ヲ爲スヘキノ利益アリ
 廣大ナル土地ヲ有スル人ハ能ク注意シテ耕作セハ一般ニ小ナル土地
 ヲ有スル所ノ養蠶者ヨリモ廉價ニ桑葉ヲ得ル由テ之ヲ觀レバ
 小量ノ養蠶家ニ桑葉ヲ供給スヘキノ義務ハ大地ノ所有者ニアルベク
 而シテ又小量養蠶家ハ各其目的ヲ五六「キログラム」ニ止メテ收
 穫ヲ確實ニスヘシ其收穫ヲ集ムレハ總計ノ收穫ハ現今ノ收穫ヨリ多
 クセントス抑又有志ノ人ヲシテ試行ヲ爲サシムル爲ニ健全ナル種紙
 ヲ無代ニテ交付シ小量養蠶ノ業ヲ奨勵スヘキノ農業會社ニアリ最モ
 名譽ヲ貴キ最モ業ニ注意スル所ノ産出者ヨリ其種紙ヲ買フ時ハ種紙
 ヲ製スルモノニ貴重ナル奨勵ヲ與フヘシモントベリエトシ養蠶場

五年以來小量ヲ以テ種紙ヲ分配スルノ制度ヲ設ケタルニ其結果ハ甚
 善真ナリト云フ
 小量養蠶家ヲ處々ニ起スノ法ヲ用ヒ蠶種ヲ撰テ種紙ヲ製シ有害ノ塵
 粉ヲ排除スル等日々衛生法進歩スルノ援助ニ因レハ養蠶工業ハ之ヲ
 シテ土崩瓦解セシメントスル所ノ原因ニ抗スルヲ得ヘキモノハ如シ
 今ヤ其工業ハ最モ不振ナル機運ニ際スルカ故ニ必ス多少ノ退縮ハ之
 アルヘシト雖モ然レモ養蠶家ニ於テ自ラ適宜ノ方法ヲ設クレハ不振
 ノ機運ヲ挽回スルヲ得ヘシ事爰ニ至レハ其土崩瓦解ヲ救フタルト同
 主義ヲ以テ其擴張ヲ確實ナラシムルヲ得ヘシ然ラハ則チ養蠶工業
 日ナラスンテ我國ノ諸工業中第一等ニ位スルニ至ルヘキハ予ノ堅ク
 信シテ疑ハサル所ナリ

第八十五小區
 園藝温室及器材ノ部
 吾人ノ住居ヲ粧飾シ衛生上ニ利益ヲ與フル所ノ諸ノ技術中ニ就テ裝

園ノ術ハ二十年乃至三十年以來最モ進歩セルモノハ一タリ抑裝園ノ
 術タルヤニ國人民開化ノ度ヲ計ルヘキ寒暖計ニアラスト雖モ其術ハ
 開化ト共ニ進歩シ且ツ一般ニ植物ノ培養ハ其國人民ノ安寧ナル景況
 ヲ示スモノナリト云フモ不可ナキナリ頭ヲ回ラシテ五十年前ノ事ヲ
 追想セハ獨リ富貴ノ人能ク其家屋ノ周圍ニアル所ノ園圃ヲ裝置スル
 ヲヲ得タルヲ見ルヘシ今日ニ至テハ或ル外國ノ例ニ摸倣シ少ク價格
 アル家屋ハ客室ニ庭園ヲ附屬セサルハナク植物ヲ撰テ花樹ヲ植藝ス
 ルカ故ニ花季ニ至レハ百花爛熳人ヲシテ戶外ニ樹木ナキヲ忘レシム
 又交通ノ路日ニ開ケ甚タ便益ヲ與フルヲ以テ都府内ニ住スルモノハ
 夕陽ニ至レハ郭外ノ地ニ退テ休スルヲ得ルカ故ニ爰ニ適宜ノ住居ヲ
 構造シテ以テ庭ヲ裝ヒ此樹木ヲ植ウルニ至レリ巴理府内ノ處々ニ公
 園ヲ増殖シタルコトハ公衆ノ園圃ヲ愛スルノ志ヲ發スルニ甚タ影響ヲ
 及ホシタルナリ第一等ニ位スル巧手ノ裝園師ヲシテ樹木ヲ植エシメ
 庭園ヲ裝ヘハ則チ其爲ス所ハ他ノ園丁ノ摸範トナルハ猶ホ高名ナル

工師アルハシノ該業ニ係ル著述書カ世ヲ手引トナルカモトシ世ノ公安ノ擴張セルヲ及不全視セラレ、所以吾人ノ住居ニ侈奢ノ粧飾ヲ施スコトヲ思ヒ今我庭園及室内ニ花木若クハ常緑木ノ粧飾ナキモノト考レハ裝園工業ハ今日著大ナル効用ヲ與ヘ其効用ハ日ニ月ニ盛ナルヲ理解スヘシ早咲ノ花木ヲ培養スルコト、菓實ヲ貯藏シ及運送スルコト、花季ナラサルニ花ヲ開カシムルコト培養等ハ皆ナ今日數多ク人ニ事業ヲ與ヘ之ヲシテ利益ヲ享有セシムルモノヲ求メ我國氣候ノ適當ナルヲ我國人ノ植物培養ニ天賦ノ性アルトニ因リテ佛蘭西ヲ以テ歐羅巴ノ園圃ト爲シ裝園工業ヲシテ最モ我國ニ利益アルモノトラシメテ以テ初メ人ハ是ヲ工業ヲ以テ重要ナルモノトセサリシト雖昨今ニ至テハ公園家庭ヲ裝整スルコト、植物温室ノ構造、灌溉器具、植物種藝ニ要スル器具、殺虫劑ヲ探求、公園ノ裝飾スル諸物ノ製造、水質ノ研究我國園丁ノ理論教育ニ供スヘキ書籍、花菓ノ模範等ハ園藝ノ部分ニアラサルハナシ而シテ又予輩ハベルサニ府ニ我國ニ耻チサルノ園藝學校ト其

長ニ高名ナル人アルト祝スルナリ園藝教育ニ付キテハ我國ノ白耳義國ニ遅クハ、日遙カナリシト雖昨天祐ニ因リ今ヤ他國ノ羨ヤムヘキモノナキニ至レリ夫レハ、
或ル人曰ク園藝ハ人ヲシテ遊惰ヲシムルモノナリト又或ハ曰ク園藝ハ商業工藝學術工業ヲ兼具スルモノナリト然リ而シテ予輩ノ講究スヘキハ工業ノ點ヨリスルニアリトス其重要ナルト種々ノ要點アルコトハ工業ノ點ヨリシテ一千八百六十七年ノ萬國博覽會ヲ觀察セバ知ルヘキナリ予輩ハ園藝材料ノ應用ヲ漸次ニ講究セシ爲ニ先ク庭園構造法ヨリ始メントス而シテ后チ植物温室、墻垣、植木鉢、園藝器具學術書ヲ順次ニ講究スヘシ
前數回ノ工業博覽會ニ於テハ曾テ目錄中ニ植物ヲ掲ケタルコトナシ是ノ故ニ之ニ關スル技術モ亦其内ニ入ラザリキ場所ノ狹隘ナルコト植物運送及保養ノ困難又手當ノ繁忙ナル等ハ是レ大ナル困難ノ原因ナリ是ノ故ニ先時ニ在テハ植物ヲ公覽所ニ陳列シテ會社ヨリ目錄ヲ發シ

褒賞ヲ與ヘテ以テ粧飾植物ノ培養ヲ獎勵シタルニ過キサリキ裝園器具ノ如キモ最モ簡單ナルモノニシテ第二次ニ位スヘキモノ、ミ抑園藝工業ニ關スル充全ノ温室及標本ヲ公衆ニ汎覽セシメタルハ一千八百五十五年以降ニシテ實ニシヤンユリゼーニ於テセル所ナリ一千八百六十七年ニ至テハ五「ヘクタール」ノ地面ヲ特ニ園藝ノ事ニ供シタルカ故ニ温室、育魚池及公園ノ粧飾ニ供スヘキモノヲ築造スルコトヲ得タリ而シテ碑ヲ形ニ作レル温室ノ基礎内ニ廊ヲ設ケ柵ヲ釣リテ以テ裝園器具ノ陳列ニ供シ又温室ヲ暖ニスル器具ノ競進會ヲ開キタリ然レモ其規則書ノ不完全ナルカ爲メニ諸種ノ器具ヲ以テ經驗ヲ爲セシモ其効ナクシテ實益ヲ見サリキ若シ夫レ其實益ヲ見ント欲セハ特別ノ條項ヲ設ケ巨額ノ費用ヲ支出シ其事ニ熟セル人ヲ要スヘシ今回ノ博覽會ニ於テハ一千八百六十七年ノ博覽會ト同ク諸事整ハサルカ爲メニ大ニ審査官ヲシテ困却ヲ蒙ラシメタリ

一千八百六十七年ノ園藝ニ係ル論說ヲ完全スル爲ニ外國裝園術ニ係

ル甚メ有要ナル出品三種アリシコト一言スヘシ抑普魯西ハ其自區ニ或ル裝園師ノ圖ヲ製シテ樹木ヲ植エタル眞個ノ庭ヲ裝置セリ日本モ亦メ其出品區中ニ其都府ノ住家ノ周圍ニアル庭ノ形ニシテ狹隘ナル場所ニ矮樹、噴水、橋梁、川河等ヲ設ケタル箱庭ヲ陳列セリ一千八百七十八年ニ於テトロカデロニ陳列セル所ノ園藝ニ係ル日本ノ出品ハ全ク他事ヲ目的トシタルモノニシテ其國ニ産スル植物ヲ知ラシムル爲ニ裝設セル園圃ナリキ

博覽會事務官ノ最初ノ計較ニ因レハイエナ橋ト本館トノ間ニアル地所ヲ園藝ニ供スルニアリキ蓋シ然ルハ則チ快活ノ通路ヲ顯出セシナルヘシ然レモ後日ニ至リ大工業者ノ頻々ナル出品請求、佛國外國ノ出品人員陸續増加アリシカ爲メニ最初ノ計較ヲ變更シ已ヲ得ス園藝ニ係ル出品ハ空地ニ於テスルニ定メタルヲ以テ館ノ周圍ヲ粧飾スルコトハナレルナリ

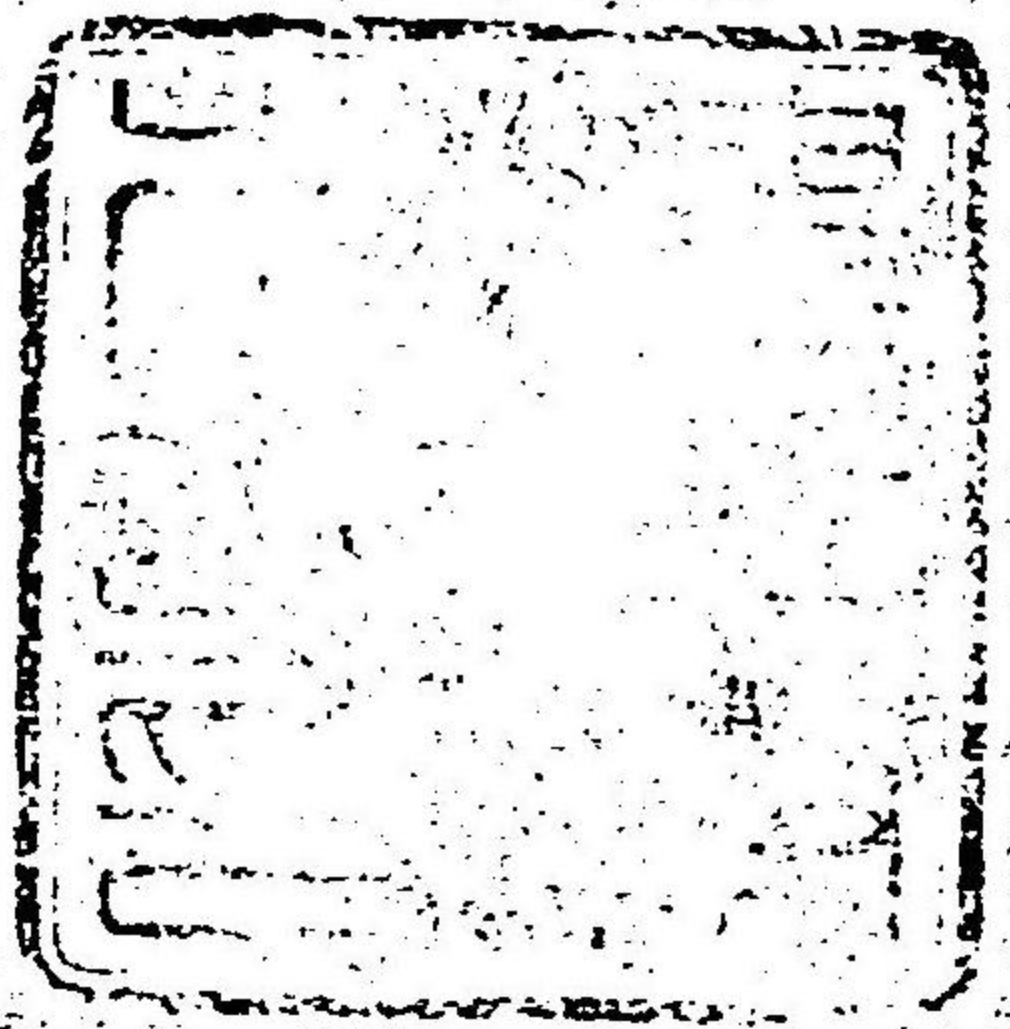
是ノ故ニ園藝工業即チ本區ハ三所ニ裝置セリ

第一 一ノナ橋及グレネルノ間ニ於テセイヌ河ニ並行セル場所

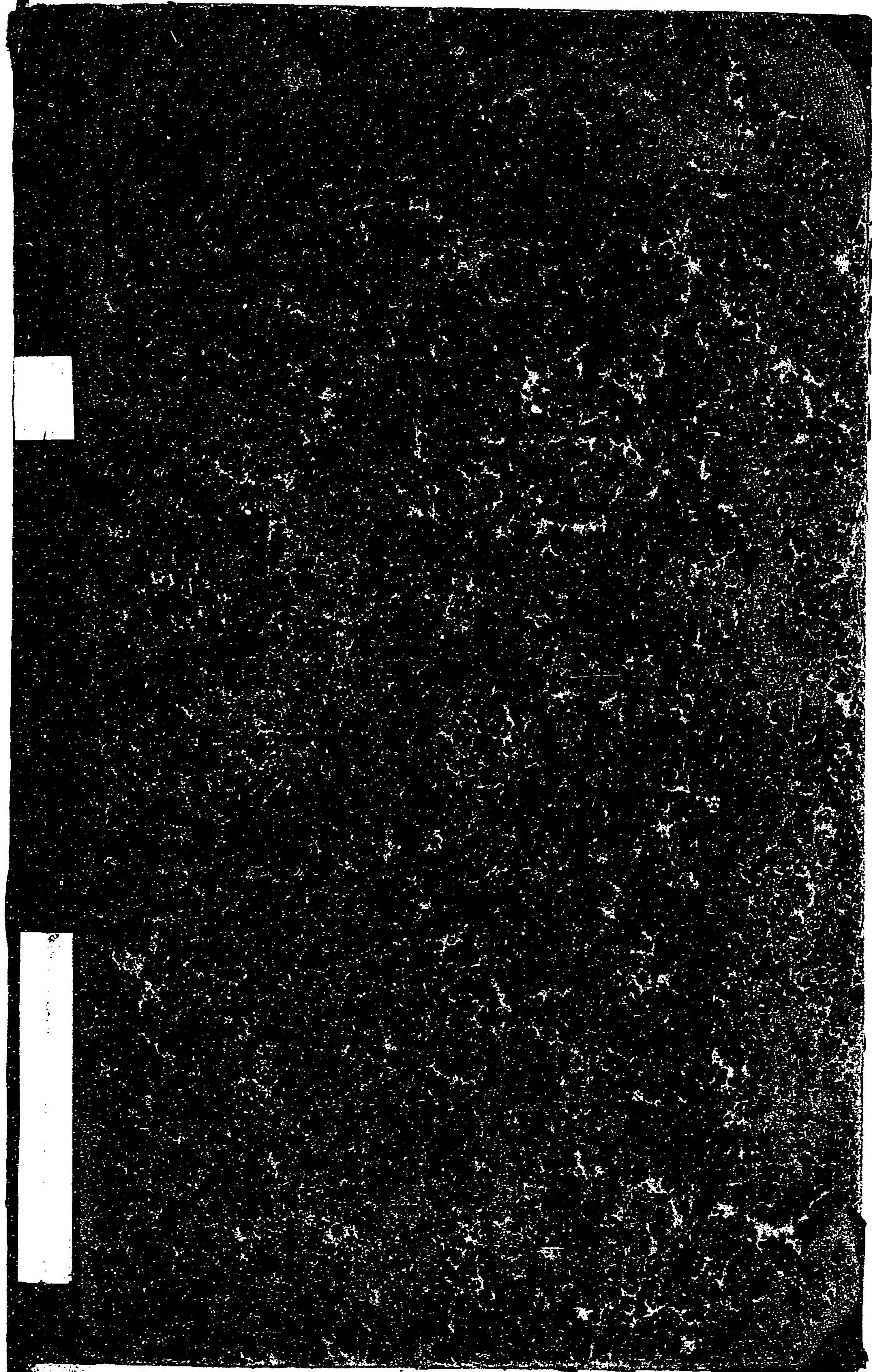
第二 セイヌ河ノ斷岸上農業部ノ外

第三 阿蘭區ノ傍

此三區ハ合計二千六百六十五「メートル」ノ地面ヲ占メタリ其他處々ニ
温室橋梁及園藝ニ關スル物品ヲ裝置セリ又二三ノ外國區ニハ園藝材
料ニ屬スル物品ヲ陳列シタリ是ノ故ニ本區ノ全部ヲ觀覽センニハ
幾ント博覽會全部ヲ通行セサル可ラサリキ云々



25
267



22

267

22

267

042197-000-5

22-267

巴理万国大博覧会日本出品品評抄訳

小野 清照/訳

M17

BDI-1295

